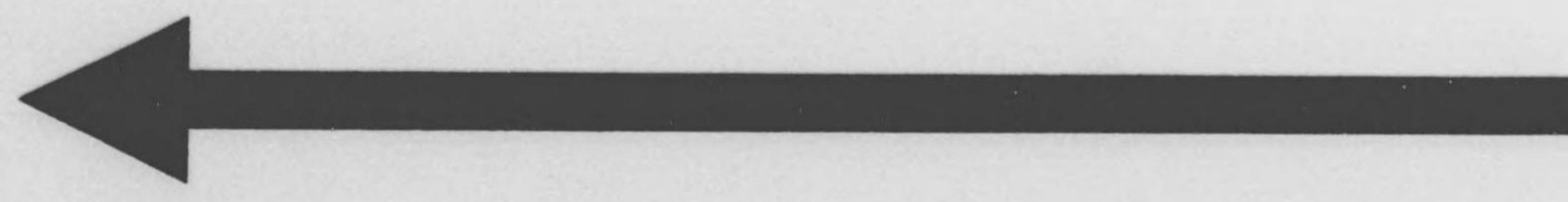




始



25



353-28 12



國譯密教

大正 12.7.28 内交

事 相

國譯密教事相第五

目次

大傳法院流

- 一、國譯傳法院流聖教(事相第四)……………塚本賢曉國譯……………一
- 一、國譯傳法灌頂三昧耶戒作法……………塚本賢曉國譯……………四五
- 一、國譯胎藏界傳法灌頂作法……………塚本賢曉國譯……………五七
- 一、國譯金剛界傳法灌頂作法……………塚本賢曉國譯……………六五
- 一、國譯七卷鈔……………塚本賢曉國譯……………七三
- 一、國譯澤見抄……………塚本賢曉國譯……………三二六
- 一、國譯澤抄……………塚本賢曉國譯……………四七四

國譯密教事相第五目次終

目次



遊戯三摩地を憶念したまひ、一切の天龍・藥叉・乾闥婆・阿蘇羅・藥路茶・(三) 堅那羅・摩呼羅伽等、皆な佛世尊に歸依す文。

○六種供養次第の事。 大疏第八に云く、供養の時、先づ當さに閻伽水を奉るべし、次に塗香を獻じ、次に獻花燒香飲食、後に燈明を獻せよ文。

本尊に向はずと雖、觀行を修すべき事。一字佛頂經に云く、若し畫像あることなくんば運心して觀行を作せ、諸佛の稱讚する所と。

○佛眼御修法一七箇日略支度

五寶。金、銀、瑠璃、眞珠、水精、

五香。沈、白檀、蘇陸、鬱金、龍腦、

五穀。稻穀、大

(三) 零 芥の字か

(三) 芥子袋 芥子を入れて洗ひし袋なり。

(三) 爐桶 往古は爐の底に桶を置くるなり。其上に土を以て塗るなり。

麥、小麥、大豆、胡麻、

藥種。白朮、人參、黃精根、遠志、枸杞、或は木蘭甘草、伏(三)零、赤箭、

石菖蒲、天門冬、

蘇。蜜。 (三) 芥子袋。 壇一面。 (四) 爐桶を加ふ。

脇机二前。

燈臺四本。

禮盤一脚。

壇敷布一端。

佛供覆布二丈。

幕一帖。

閻伽桶二口。

閻伽折敷二枚。

壇供米。

御明油。

長積一合。

供所雜具。

阿闍梨。

伴僧。

承仕。

驅仕。

供。 淨衣。 白色。

見丁等

右注進すること件の如し。

久安二年十二月 日

行事 大法師

阿闍梨沙門とよと成

五寶増。

但し瑠璃を以て琥珀に替ふ。

敬。 同息災 調。 同増益

五香増。

鬱金、蘇合、龍腦、桂心、青木、或は白檀、蘇合、鬱金、蘇陸、沈、麝香之を用ふ。

敬。

楓香、百和香、丁子、調。 沈、丁子、安息、或は

五穀増。

敬。 此の三法は但し調伏は胡麻を除いて小豆を入る。

藥種増。

黃精根、地黃、枸杞、芍藥、桂心、或は天門冬、

敬。

相思子、芍藥、天門冬、檳榔子、木蘭、或は豆蔻、伏苓、石菖蒲、人參、

調。

射干、或は牛黃、人參、鬼臼、

名香増。

敬。 白、調。 安息、或は丁子、紫檀、

淨衣増。

敬。 赤、調。 鈍白、

但し北斗法藥の次に命木。

御斗に隨ふべし、命穀。 御年に隨ふべし。壇敷布一段の次に臘燭布一段を入

れ書くべし。 已上の二事之を書き入るべきか。壇供米は十石五斗なり。臘燭供を加ふ、夜別に三斗。御明油一斗二升

六合。臘燭油を加ふ、  
夜別にて三合。

已上普通なり。

○北斗供七箇日支度

名香 沈、白檀、安息、

蘇。蜜。壇一面。三尺二寸

燈臺(一)四本。脇机一

(二)四 或は二に  
作る。  
(三)前 或は脚に  
作る。

(三)前。半疊一枚。

壇供米三石五斗。

或は五石の内、  
一石五斗。蠟燭

御明油三升五合。

合は蠟燭  
の料。

壇敷料布一段。

蠟燭の料布二丈。上紙三帖。若しは五帖、若しは七帖、施  
主の歳に随ふべきなり。

闕伽桶一口。

約を  
加ふ。

闕伽盤一枚。長横一合。

本房ならば之を  
略すべきか。 火鉢一口。

ば之を略す  
べきか。

阿闍梨。

承仕一人。

駝仕一人供常の如し。淨衣白色。

右注進すること件の如し。

年月

○御加持發願變染王  
に付く。

至心發願 唯願大日

本尊界會

金剛愛染

三十七尊

諸大薩埵

兩部界會

諸尊聖衆

外金剛部

護法天等

各各還念

慈悲本誓

加持護念

護持法王

護持法王

消除不祥

消除災難

惡靈邪氣

三世怨敵

執着怨心

摧破微塵

天變恠異

惡夢(三)惡想

世間所有

諸不吉祥

皆悉消除

年月日時

一時(三)厄難

怖畏急難

非時中天

(三)惡想 又は天  
言に作る。  
(四)厄難 或は惡  
事に作る。

(二)降伏 或は解  
脱又は消除に作る

惡人怨念 厭魅呪咀

未然解脫

悉皆(二)降伏

三密加持

薰入玉體

玉體安穩 增長寶壽

恒受快樂

無邊御願

決定成就

決定圓滿

私の様、佛眼に付く。

至心發願 唯願大日

本尊聖者

金剛吉祥

佛眼佛母

諸大眷屬

兩部界會 諸尊聖衆

外金剛部

護法天等

各各還念

慈悲本誓

加持護念 護持仙院

消除不祥

消除災難

惡靈邪氣

三世怨敵

執着怨心 作障難者

諸不吉祥

皆悉解脫

天變恠異

惡夢謠言

年月日時 一切惡相

怖畏急難

惡人怨念

厭魅呪咀

未然解脫

三密加持 薰入玉體

玉體安穩

增長寶壽

恒受快樂

無邊御願

決定成就 決定圓滿。

(三)說あり 十二  
妙藥の出生の事な  
り。  
(三)眞言三 大呪  
と小呪とコロク  
の眞言の三なり。

○藥師 息災、増益の法なり、堂莊嚴等あり、但し  
大御堂は息災法に付て之を修せしむ云云。

○十二上願薄伽梵 日光月光諸眷屬

○象師說○壺 ○印 勸請の印、(三)說あり

○眞言二大小

○振鈴の次に

印の別行、 ○本尊 二菩薩 (二)神將印右は

若し大法の時は先づ智拳印、兼て(三)件の印言了て、阿闍より三十七尊を盡せ。

○本尊加持 小呪 ○印は勸請の印 ○定印大呪、觀あり ○散念誦 佛眼、

大日、本尊三、日光、月光、八字、無能勝、十二神、一字、○伴僧大呪、若し

○護摩 ○火 ○本 ○諸(卅七尊に菩薩を) ○後火(三説あり) ○世天

日光 阿彌底耶ハラハヤソハカ。 月光 戰茶羅ハラハヤソハカ。

二菩薩の印は胎藏の印を用ふべし。

○勸請の印 内縛して兩掌を透開くことなく、二大指を並べ立てよ、掌内を壺と觀じて、十二大願の藥ありと思ふべし、大呪十二返を讀むべし、他のためには、兩大指を少しき開いて、此の藥を與ふと、自のためにも此の如く觀すべきなり。

○藥師増益に之を修す若しは息災。東寺の金堂の藥師佛光の七佛に付く、是れ七佛藥師か。十二上願薄伽梵 日光月光諸薩埵古説

○藥師瑠璃光如來 日月(五)大士諸眷屬今案 觀想せよ、心前に梵字あり、變じて淨瑠

(二)神將 右の手金拳にして人指鉤を作す、總印なり、總小呪を用ふ、唯クピラソワカ是れなり。

(三)件の印言上の本尊加持の諸印は是れなり。説あり云云口訣に云く其の意を得ずと。

(五)大士 或は薩埵に作る。

璃世界となる、其の上に大宮殿あり、七寶を以て莊嚴せり、其の中に大曼荼羅壇あり、壇の中に梵字あり、月輪となる、輪の中に衆字あり、變じて八葉の蓮花となる、花臺に水字あり、變じて藥壺となる、藥壺變じて藥師如來となる、光明映徹して相好圓滿せり、殊に十二の大願を發して濁世の衆生を化度す、日光・月光等の諸大菩薩、及び十二の神將、七千の藥叉と前後に圍繞す。

○振鈴の次に ○大日印言 ○次に本尊印 ○法界定印 ○眞言

曩謨婆誑縛帝佩殺紫野變魯吠女里也鉢羅婆羅惹野怛他藥多野羅喝帝三藐三沒駄野怛爾也他唵佩殺爾曳佩殺爾曳佩殺紫野三沒薩帝娑婆賀。

○大御堂藥師大呪、二様に讀ましめ御す。東寺へイテヨリヤ、天台へイルリヤ、

○次に日光菩薩二風・二空・頭柱へ圓かに合し、餘唵嚕褒爾庾多莎呵。

○月光菩薩右手空風相捻して持花の勢の如くし、餘の三指は立て、少歸命戰拏羅鉢羅婆野縛莎母。

○次に八供養印明大法の時三 ○次に次の作法は常の如し。 ○讚 四智 ○南

無藥師如來三反 ○四攝の次に之を加ふ。

本尊印言は前の如し。番僧大呪前の如し。



(一)阿彌陀之  
法を敬愛に修せば  
慈悲の義なり。  
(二)本尊等云云  
勸請の句

(三)獨結云云許  
受に云く、横の五  
結の上に横に獨古  
を立て、横は平古  
利は差別、横は自  
なり。堅は利他の義

(四)八供養印明  
大法の時此にて  
具に三十六尊の印  
明を用ゆ、然らざ  
る時は八供養の印  
明計りなり。  
(五)外縛二中蓮葉

許受到云く、此  
の邊註は定印大呪  
の如きには用ゐ  
ず、二中蓮葉形  
印に大呪を用ゆと  
いふ。  
(二)無量壽 許受  
に一佛の梵號を  
二義に取り別くる  
なり。

(三)本尊加持云云  
振鈴の次八供養  
の前を云ふ。  
(四)正念誦云云  
許受到云く正念誦  
以前の本尊加持を  
いふか。  
(五)獨古印 外縛  
二中蓮葉印なり。

○(一)阿彌陀敬愛に之 觀音勢至諸薩埵

○(二)本尊界會彌陀尊 觀音勢至諸薩埵  
面前に於て安樂世界を觀ぜよ、瑠璃を以て地と爲す、中に八功德水あり、其の海中に於て龕字を觀ぜよ、大光明を放ちて色紅頗梨の如し、遍ねく十方世界を照せり、其の中の有情此の光に遇へば、悉く罪障消滅せざるはなし、是の字變じて微妙の開敷紅蓮花となり、獨結を莖となす、即ち其の花變じて無量壽如來となる、寶蓮花の上に在し、滿月輪の中に處し、五智の寶冠を着して奢摩他の印に住せり、身は紅頗梨色にして結跏趺座し、頂上より無量の光明を放ち、恒沙の世界を照せり、乃至觀音勢至等の諸大菩薩、及び蓮花部の聖衆前後に圍繞す云云。

○振鈴の次に大日印言 ○次に本尊印 定印。香隆 寺説。 ○眞言 大呪 ○次に觀音蓮華部心印 唵阿盧力迦莎呵。 ○種子 唵 ○三 蓮花 ○次に勢至未敷蓮花印 唵髻々索莎呵。 ○種字 唵 ○三 未開蓮花 ○次に八供養印明 ○次に次の作法は常の如し ○讚 四智 南無阿里耶彌陀婆耶三反 ○四攝の次に之を加ふ。 ○本尊印言は前の如し。 或は(五)外縛二中蓮葉形にす。

○又の印外縛二中唵縛日羅達麼訖哩 ○又の印言外縛二中唵阿密哩他帝際賀羅叫。 ○正念誦小呪 ○番僧 大呪

無量壽は五佛内の壽命等の祈に之を修す。阿彌陀は偏へに極樂に付て之を修す。勝定房云く、決定往生の眞言は説所なし、唐土に幡とび來れり、件の幡に此の眞言はかかれたりと云云。又た或る記に、攝津の國、勝尾に飛び來れる幡に小呪を書けりと。  
(三)本尊加持の時は、獨古の印を結んでは大呪を誦すべし、定印を結んでは小呪を誦すべきなり。(四)正念誦の時は、定印を結んでは大呪を誦すべし、(五)獨古印を結んでは小呪を誦すべきなり。

○佛眼法 息災に之を行ずるには、金剛界に依て之を修すべし、香は沈檀、安息を用ふ。

心・柳・鼻・牛・の直目に、一日の中に於て食せずして誦すること一千八返を滿せば、所有る心願、時に應じて便ち遂げ、大悉地を獲ん。是れ瑜祇經説の取意。  
或は云く、若し餘尊の眞言を持して成就せずんば、當さに此の尊像の前に於て、此の眞言を加へて之を持誦すれば、必ず成就することを得ん。

(一) 金剛云云 勸請の句。

(二) 三層等 或は「八大菩薩聖衆」に作る。

(三) 本尊云云 發願の句なり。

(四) 七寶云云 道場觀なり。

(五) 穴 或は頂に作る。

(六) 擬設沙 恒河沙なり。

○(一) 金剛吉祥佛眼尊 (二) 三層蓮臺諸聖衆勸請に句を加ふるなり ○(三) 本尊聖者 金剛吉祥佛眼佛母 諸大眷屬發願に句を加ふるなり ○道場觀中御室御記印眞言常の如し 佛眼種盧字又は蓮字。

三佛眼  を用ふ。

七寶の宮殿の中に大曼荼羅壇あり、壇の中に龕字あり、三層八葉の蓮花となる、花臺に梵字あり、淨月輪となる、月輪の中にミ字あり、變じて佛頂眼となる、佛頂眼變じて佛眼佛母となる、大白蓮華に住し、身は白月の暉ヒカリの如し、兩目微咲して二手を齊ひとに柱め、奢摩他に入るが如し、一切の支分よりヒ擬設沙佛キヤウセヤを出生す、一一の佛皆な本所出生を禮敬したてまつる。當前の蓮葉の上に一切佛頂輪王在す、定印を結び八輻の金輪を持せり、次に右に旋て、七曜使者を布す、次に第二の花院に頂輪王の前に當て金剛薩埵あり、次第に右に旋て八大菩薩あり、第三の院の右に旋て八大明王あり、輪壇の四隅に内供養、外院の四方に四攝、四隅に外四供養等、皆な師子冠を戴き、各の本標幟を執れり。

○振鈴の次に大日印明金剛界 ○佛眼印明常の如し ○金輪印内縛して二中を立て合せ圓形の如くし、二風を屈し、二中指の上節を捻し、二大を並べ立て

歸命 ボロン

○八大菩薩金剛合掌 歸命迦娑囉縛他尾摩底尾枳羅他陀囉摩他但尼羅佐他三々賀娑縛賀胎藏にあり

○八大明王持地印、金剛部の如し 忿歸命吽吽吽吽吽吽吽吽吽吽胎藏にあり

○七曜惣呪印。虚合して二大指を立てよ、佛三昧耶の印に入るなり。歸命藥羅醯入縛里也鉢羅鉢多孺底羅摩耶莎呵。胎藏にあり

或は八大菩薩、八大明王の印言は七卷抄の如し。○次に八供養・四攝・印明は常の如し。或は略説、振鈴の次に大日印明、本尊印明、八供養印明許り之を用ふべし。

○讚 四智 ○禮佛 南無佛眼佛母三反 本尊印明は瑜祇經の如し。

○又た小呪の印あり。(一) 尊勝空の印の様に、頭指まろらかにかがめて、笑眼形の如くするなり。 香隆寺僧正の説。想へ三業の所作皆な悉く成就し、現當の所願齊しく悉地を成す。

○或る説は正念誦に小呪を用ふ。 ○散念誦 大日 佛眼 同じく小呪 大勝金剛 頂輪王 囊莫三曼多タラ 金剛薩埵 サトバ 我觀音 不動

(一) 尊勝空の印、業障除の印なり、即ち虚合の業障除の印なり。

○降三世 ○金剛吉祥成就一切明 ○妙吉祥破諸宿曜明 ○成就一切明 ○一字金輪  
眞言。此の眞言の中、相計りて卷數を書くべきなり、皆な之を書くべからず。

或る説。念誦 大日台 本尊、頂輪、吉祥明、八大菩薩、八大明王破障

不動、三世、成就明、  
伴僧三方の偈了てより一字金佛眼眞言に至るまで之を讀む、打金の後ち一字明。或る  
説に、振鈴已前に大日五字明を誦す云。

○護摩段 ○火天 ○本尊 ○諸尊萬太ラ諸尊に之を行す、所有の金輪  
八大菩薩、八大明王、七曜等なり。 ○北斗七星段後火天段  
を略して  
此の段を行 觀ぜよ、爐中の七字或は變じて北斗七星本命屋中  
心なり。となると。

次に啓白

至心奉啓 北斗七星 貪狼巨門 祿存文曲 廉貞武曲 破軍星

○令爲某甲 灾厄解脱 壽命延長 得見百秋 今作護摩 唯願垂哀

降臨此處 納受護摩 擁護某甲 悉地從心

○次に鈎召印を以て之を召請し、招北斗眞言を用ひ、七星を召請すと想へ。 ○次に  
北斗七星の眞言を用ひて之を供養す。 ○次に發遣召請に  
准ず ○世天壇は常の如し。

○令爲某甲今  
爲某甲となすべし

○一字云云 勸

請の句。轉輪王 或は

照尊に作る。妙高山云云

道場觀なり。一本に臺

に作る。輻輳ハ下、括  
弧内の文字、異本  
に之なし。

○餘の七に作る。  
○一本に「聖衆  
四方に」とあり。

○金輪息災に之を修す、若しは增  
益、行者面を東に向へよ。 ○一字金輪轉輪王 八大佛頂諸轉輪。

○妙高山の頂に龕字あり、變じて大寶の蓮花となる、其の上に列字あり、七寶の宮  
殿となる、殿の中に龕字あり、變じて八葉の白蓮花となる、花臺に在字あり、變じて  
八輻の金剛輪となる、ハ下、輻輳皆な鋒銳れり、其の色は檀金の如し、過聚塵數の日、金  
剛は極めて堅固を表し、顯福智滿にして利なるは無戲論を表し、光は一切智、貪瞋癡  
を除破し、諸の妄執を斷壞することを表す、斯の智輪遍ねく虚空に周し、故に諸佛盡  
く輪内に入る、即ち此の「輪變じて一字頂輪王となる、形色素月の如く、輪盤をもて法  
身を飭る、五佛の寶冠を戴き大智拳印を結ぶ、熾盛日輪に住し師子座に處す、故に無  
量の光明十方刹土を照す、當前の葉上に佛眼尊在す、ハ下、一一の葉上に、右に繞て輪王  
の七寶金輪、象、馬、珠、  
女、主、兵主藏を布烈す、乃至十佛刹微塵數の諸尊ハ下、  
圍繞す。

○振鈴の次に大日印明 ○本尊印明 ○八供養印明 ○次に次は常の如し。○讚 四  
智 ○南無一字金輪三反 ○南無諸大轉輪四攝の次に之  
を加ふべし。

○本尊印智拳印を外  
向へよ 眞言 勃鳴唵歸命の句なし、或は  
歸命ハカあり。

○勝身印 堅固金剛合掌して即ち中指並べ立て、申べて、青蓮葉の如くし、 唵歩欠。○伴僧、振鈴より後、後鈴に至るまで本尊真言、一字金を打たず、是れ北院の御説、本尊真言には歸命の句はなし。長者僧正歸命の句を具し、御加持の時、伴僧に讀ましめ給ふ云云。尋ね奉るべきことか。 軌に纒かに奇特の身を現ずるに 諸の聖衆皆な没して 勝絶不共なるを顯す 唯だ佛一體の故に文。

若し本尊の像あらば 室内に西に面して安し 瑜伽者東に面し 初めて道場に入る毎に

佛常に世に住したまふと想ひ 五輪を以て地に着き 教の如く歸命し禮せよ。

中御室の御記。○一字 ○印 智拳印 ○眞 杵

○又た勝身三昧耶印。軌に云く、金剛合掌して即ち中指を並べ立て、由ほし青蓮葉の如くし、頭指を屈して各の中指の上節に安け。軌の金剛合掌は師説には指を又へず ○眞 唵僕欠 ○種 杵

○三 金輪

○尊勝 息災に之 尊勝佛頂大轉輪 八大佛頂諸轉輪

(一) 尊勝云云 勸請の句。

(二) 尊勝か。 或はいふ

(三) 六箇云云 貞記に云く、五淨居天に善住天子を加ふ。

觀想せよ、五大所成の宮殿の中に大圓明月輪あり、三胎を以て界道となし、寶瓶を以て分齊とせり、其の中央の大蓮華臺上に十字あり、法界の窠塔婆となる、窠塔婆變じて大日如來となる、五智の寶冠を戴き、輪鬘をもて法身を嚴り、法界印に住して結跏趺坐し、淨月輪に處す、七師子の座なり、左の圓明中に濫字あり、白傘蓋佛頂となる、右の圓明中に悉字あり、最勝佛頂となる、中の圓明の前に訶唎字あり、變じて金剛鉤蓮花上に鉤を安するなり。となる、鉤變じて尊勝佛頂となる、首に五佛冠を戴き、手に金剛鉤を執り、頂背に圓光あり、身に遍して車輪の如し、暉曜奕赫として三摩地に住す、中後の圓明中に怛嚩吽字あり、放光佛頂となる、尊勝の左の圓明中の咎字あり、勝佛頂となる、(二) 尊の右の圓明の中に吒嚩吽字あり、廣生佛頂となる、光聚の右の圓明中に吽字あり、無邊聲佛頂となる、光聚の左の圓明中に輪嚩吽字あり、發生佛頂となる、下左邊の半月輪中に斛字あり、降三世となる、右邊の三角光中に憾字あり、不動尊となる、前に香爐あり、像の上に寶蓋あり、兩邊に六箇の飛天あり、各の香花を執る云云。

私に云く、(三) 六箇の飛天の事。(三) 善無畏軌には、首陀會天。(四) 菩提場所説五卷。五佛頂經四卷、奇特佛頂等には六淨居天は被説なり。

(三) 善無畏軌、口に  
 云く異本に喜を  
 善といふ人も喜無  
 畏といふ人も喜無  
 八家録に依れば、喜  
 勝佛頂眞言修瑜伽  
 仁一行二卷喜無畏  
 へり之を指すかとい  
 喜無畏軌に首陀會  
 天といふなり不  
 (四) 善提云云、不  
 空の譯、曰下佛頂の眞  
 (五) 曰下佛頂の眞  
 對首原文梵字、今  
 へたり文字を以て替

一六  
 ○振鈴の次に大日印明。○白傘蓋佛頂惠の拳、風を立て、定喃。藍。悉怛多鉢怛羅合那瑟尼ニニヤツワニカ引。合灑娑囉合賀。引。  
 ○勝佛頂大惠、センヤヨク、ウシユニニツワニカ。合灑娑囉合賀。  
 ○最勝佛頂輪印、シヒヤヨク、ウシユニニツワニカ。合灑娑囉合賀。引。  
 ○除業佛頂内縛して惠の、ウシユニニツワニカ。合灑娑囉合賀。引。  
 ○火聚佛頂内三古、チリムニニツワニカ。合灑娑囉合賀。引。  
 ○廣生佛頂内五古、チリムニニツワニカ。合灑娑囉合賀。引。  
 ○發生佛頂入業印、チリムニニツワニカ。合灑娑囉合賀。引。  
 ○無量音聲佛頂商住、チリムニニツワニカ。合灑娑囉合賀。引。  
 ○次に不動刀印唵阿左羅羯拏戰拏娑駄耶吽發吒。○次に降三世印は當の、ウシユニニツワニカ唵吽惡吽。○  
 八供養印明。○次に次は常の如し。○讚。四智。  
 ○南無尊勝佛頂三反、チリムニニツワニカ。  
 ○本尊印二手合掌して二頭指を屈し甲相背け、二大指。○尊勝陀羅尼。  
 ○又の印内縛して右の頭、チリムニニツワニカ。喃。訶嘛尾枳羅拏半祖烏瑟尼灑娑縛賀。○伴僧。尊勝陀羅尼。

(一) 普賢 勸請の  
 句。  
 (二) 觀想せよ云云  
 道場觀。  
 (三) 字 其の中に  
 結里字ありの誤か

(五) 本尊印 許受  
 に云く、二風を鈎  
 結して此の間に命  
 根を觀じて結び留  
 めて常住ならしめ  
 此の觀をなして言  
 を誦す可し。道場觀  
 (六) 壇上 道場觀

一七  
 ○普賢延命増益に之。○普賢延命大薩埵。四大天王諸眷屬。  
(三) 觀想せよ、須彌山の頂に梵字あり、變じて七寶の宮殿となる、其の中に(三)字あり、  
 變じて八葉の蓮花となる、臺上に四の哦字あり、四大象となる、象の上に數字あり、  
 八葉の蓮花となる、上に欲字あり、變じて金剛甲冑となる、而して轉じて金剛壽命菩  
 薩の身となる、五佛の寶冠を着け、二十臂を具足して諸印十六は十六大菩薩、  
 四手は四攝三マヤを操持す。  
 ○振鈴の次に大日印明。○本尊印明或は四天王印明七卷抄の。○次に八供養印明。○次  
 に次は常の如し。○讚。金剛薩埵或は四智、次  
 に金剛サタ。  
 ○南無普賢延命三反、北院の御室、四智讚の次に  
 金剛サタ之を誦せしむ。  
 ○本尊印二手拳にして頭、指を相鈎せよ。唵縛日羅瑜勢娑縛賀。  
 中御室御記、壇上に梵字あり、變じて八葉の蓮花となる、臺上に欲字あり、變じ  
 て甲冑となる、甲冑變じて本尊となる、身色黄金にして十二臂を具し、諸器械を執持  
 す、若し人念持すれば、過現の所有る惡業を消滅し、更に福德壽命を増長す。  
 ○種 變。○三摩。甲冑印。軌の言の如く亦た然なり。○圖像の作法、四象の上

に蓮花あり、花の上の畫像、一面二十臂なり。(二)印は胎藏遍智院大安樂不空身なり、是れ高野真觀寺の様云云。  
○陵空とは空に登るなり、佛位(三)摩形花(三)像供養法、飲食道なり、日月虧るの時、成就の法を修する、此の時に當る、短を何ふ魔羅便を得ず云云。

○愛染王敬愛に之を修す。 ○(三)金剛愛染大明王 三十七尊諸薩埵

須彌山の頂に梵字あり、變じて七寶の宮殿となる、宮殿の中に壇場あり、其の上に梵字あり、變じて八葉の蓮花となる、花臺上に梵字あり、淨月輪となる、月輪の中に梵字あり、窠塔婆となる、窠塔婆變じて大日如來となる、大日如來の心月輪の中に梵字あり、五臍杵となる、杵變じて愛染明王となる、身色日暉の如くにして熾盛輪日輪に住し、三目威怒にして視る、首髻に師字冠あつて、利毛忿怒形にして頂に五臍鈎を安す、五色の花鬘を垂れ天帶耳てみみを覆ふ、左手に鈴を持し右手に五峰杵を執る、儀形は薩埵の如し、衆生界に安立す。次に左手に金剛弓、右手に金剛箭を執つて、衆星を射るが如くし、能く大染法を成す、左の下手に彼を持し、右の蓮は打つ勢の如くするに、一切惡心の衆、速かに滅すること疑あることなし、諸の花鬘の索を以て絞結し、以て身を嚴り、結跏趺坐を作し、赤色の蓮に住せり、蓮の下に寶瓶あり、兩の畔わきに諸寶を

(二)印は胎藏遍智院大安樂不空身なり、是れ高野真觀寺の様云云。  
胎藏遍智院大安樂不空身  
知院に大藥不空尊  
あり、但し胎藏大  
第の遍知院には大  
安樂不空身なく、金  
剛界次第に之の身  
あり。  
(三)像 朱書に縁  
の字に作る。  
(三)金剛云云 勸  
請の句

吐けり、乃至三十七尊並に無量の眷屬、圍繞し恭敬す。

○振鈴の次に大日印明 ○本尊印明 ○羯磨會三十六尊印明 ○次に次は常の如し。

○南無金剛愛染三反

○本尊印内縛して二中を立て交へよ 唵麼賀羅誑囉曰路瑟泥灑囉曰羅薩埵弱吽鏝殺。 ○又の印外五

古 吽穢枳吽惹

○伴僧は吽々吽吽弱の眞言なり。廣澤流には伴僧の念誦に、大眞言を用ひず、然りと雖、北院御室之を用ひ御すなり。

△中御室御記 ○愛染王 ○印外五臍 ○眞 吽長吒枳吽惹 ○種 吽引 ○三 五臍。

○(二)八字文殊息災に之を修す、但四種法之あり。 ○(三)三世覺母八字尊 八大文殊諸聖衆

壇中に戴字あり、變じて八葉の蓮花となる、花臺に梵字あり、淨月輪となる、輪の中に梵字あり、變じて利劍となる、利劍變じて大聖文殊となる、身色黄金にして大光明を放ち、師子王の座に乘じ、智慧の劍を操持せり、左に青蓮花を執る、花臺に智杵を立てたり、首髻に八智の尊あつて、暉光十方に遍く、對行(三)仁目の如し、第二院の請召

(二)八字云云 許  
受に悉速疾の故に  
は悉速疾の故に  
傳流及び保壽院方  
の諸尊散念誦の中  
に皆之を加ふ。  
(三)三世云云 勸  
請の句  
(三)仁目 傍註に  
云く、仁目、是れ中  
日熾盛の義なり。

童子等、八大文殊次第に之を廻り皆な面を中尊に向へ、教を奉<sup>うけたま</sup>つる勢の如くして、蓮華上に坐し、各の師子に乗ず、圓輪の外の四角中に四大明王あり、第三院の四攝十六大天等、各の本方に住す、乃至無量の聖衆恭敬し圍繞す。

○振鈴の次に大日印明 ○本尊印明 ○或は ○次に八大文殊印明 ○次に八供養印明 ○次に次は常の如し。 ○南無八字文殊三反

○本尊印内縛して二空を並べ立てよ。 唵惡尾羅羅<sup>アケビラム</sup>叫<sup>キヤシヤラクタン</sup>使者洛曇 ○伴僧 八字文殊真言

○聖觀音息災に之を修す。 大聖慈悲觀世音 蓮華部中諸聖衆

壇の中に龕字あり、八葉の蓮花となる、寶鬘を具す、其の上に龕字あり、淨月輪となる、月輪中に薩字あり、黄金色にして無量光明を具す、其の字變じて蓮花となる、蓮花變じて觀自在菩薩となる、身色黄金にして光明赫奕たり、輕毅の衣を被、赤色の裙を着す、左手を臍に當て未敷蓮を執り、右手を胸に當て開花の勢を作す、頭冠に瓔珞あり、首に無量壽佛を戴く、及び蓮華部の聖衆前後に圍繞す。

○振鈴の次に大日印明 ○本尊印明 ○次に八供養印明 ○次に次は常の如し。 ○南

○本尊印 許受に云く、童子の口に印なり、二大を以て三度も嚼む勢を作す、即ち除障の義なり。 ○大聖慈悲觀世音 蓮華部中諸聖衆 請の句、又此の文字を或は本尊聖者に作る。 ○蓮花 赤色未敷蓮、獨古を以て龕となす。

無聖觀自在。三反

○本尊印内縛して右の大指を出して之を立て、左の大指を掌に入れよ。 唵阿嚧力迦娑婆母。 ○伴僧 本尊真言は前の如し。 御加持呪前に同じ。

○千手息災に之を修す、若しは敬愛、行者面を西に向へよ。 千手千眼觀世音 蓮華部中諸聖衆

○妙高山の頂に八葉の大蓮花を想へ、蓮花の上に於て八大金剛柱あり、寶樓閣となる、蓮花臺の中に龕字を想へ、字より大光明を流出して遍ねく十方世界を照すに、所有る受苦の衆生、此の光に照觸せられて皆な解脱を得。又た大光明中より紅色の蓮華を踊出す、蓮華變じて千手千眼觀自在菩薩となる、相好圓滿し威儀具足す、十波羅蜜及び八供養等の菩薩、各の本位に住す。又た樓閣の四隅に於て白衣・大白衣・多羅・毘俱胝等の四菩薩あり、各の無量の蓮華部の聖衆と前後に圍繞す。

○振鈴の次に大日印明 ○本尊印明 ○次に八供養印明 ○次に次は常の如し。 ○南無千手大聖。三反

○本尊印二手金剛合掌して指し手背を曲げ、合掌して相離して、忍・願・二度 陀羅尼小呪 唵囉日囉

○千手云云 勸請の句。 ○妙高山云云 道場觀。

○唵等 原本梵字、對譯文字は諸家眞言集所載による。

二達磨訶哩。 ○伴僧 千手陀羅尼

(一) 大聖馬頭云云  
勸請の句。  
(二) 觀想云云 道  
場觀。

○馬頭息災に之を修す、或は調伏

(二) 大聖馬頭觀世音

蓮花部中諸聖衆

○觀想せよ、壇の中に梵字あり、變じて蓮花座となる、座の上にも字あり、字變じて白馬頭となる、白馬頭變じて賀邪訶里縛明王となる、其の身、非黃非赤にして、日の初めて出づる色の如し、白蓮花を以て而も瓔珞となし、其の身を莊嚴す、光燄猛威にして赫奕として鬚の如し、指甲長く利にして、雙牙上さまに出づ、首鬘は師子の項の毛の如し、猛吼して怒るの狀を作す、此れは是れ蓮花部忿怒持明王なり、猶ほし轉輪王の如くにして寶馬四州に巡履して、一切の時、一切の處に於て其の心息まず、諸菩薩の大精進力亦た復た是の如し、所以に是の如くの威猛の勢を得、生死の重障中に於て身命を顧みず、多く摧伏せらるゝは、正しく白淨の大悲心のためなり、故に白蓮花を用て而も其の身を嚴るなり、乃至蓮花部の聖衆前後に圍繞す。

○振鈴の次に大日印明 ○本尊印明 ○次に八供養印明 ○次に次は常の如し。 ○南無賀野訶哩婆尊三反

(一) 二大指云云  
此の二大指と二頭  
指との間を馬口と  
觀するなり。

(二) 哈已下 原本  
梵字、今對譯文字  
は胎青龍軌所載に  
よる。

(三) 大聖云云 勸  
請の句。

(四) 大海中云云 勸  
道場觀。

(五) 軍持と云ひ、  
口無きを賢瓶とい  
ふ。此の中に大悲  
の乳水を盛り衆生  
の熱惱を除く。

(六) 右を揚げ云云  
右の指は左の上  
にあるといふ義、  
唯普通の金剛合掌  
なり。

○本尊印 二手虚合して二頭、二無名屈して掌に入れ、各の相

眞言

歸命(三) 哈種呼(キナク) 佉那野、 咩惹薩

ハ二吒野娑囉合賀。 ○伴僧 唵阿密里都納囉縛佉發吒娑婆賀。

○十一面 息災に之

(三) 大聖慈悲十一面

蓮花部中諸聖衆

○大海中に須彌山あり、四寶の所成たり、山上に寶樓閣あり、其の中に曼荼羅壇場あり、壇中には八葉の蓮花あり、其の上に淨月輪あり、月輪の上に九字あり、變じて(五)軍持となる、變じて十一面觀自在菩薩の身となる、四臂を具足す、右の第一手には念珠を把り、第二手は施無畏にし、左の第一手には蓮花を持し、第二手には軍持を執る。十面とは當前の三面は寂靜の相、右邊の三面は威怒の相、左邊の三面は利牙出現の相、後の一面は怒笑の容、最上の一面は如來の相、頭冠に各の化佛あり、種種の瓔珞を以て其の身を莊嚴す、蓮花部の聖衆及び護世天威德天等、悉く圍繞す。

○振鈴の次に大日印明 ○本尊印明 ○次に八供養印明 ○次に次は常の如し。 ○南無十一面尊三反

○本尊印 二手を以て(六)右を揚げ左を押し、外に  
相反へ合掌し印を以て頂上に置く。

唵那羅那羅地里度嚩度嚩壹知縛知者餘



者歟鉢羅者歟鉢羅者歟矩蘇銘矩蘇摩囉囉壹里弭里止里致惹羅摩跋囊也跋羅摩秋跋  
但囉摩訶迦嚕尼迦娑囉。

○心眞言 唵嚕鷄入囉囉訖哩。 ○又た小呪 唵摩訶迦盧尼迦也莎哥。 ○伴僧  
大呪

○准胆 息災に之を修す、行者面を東に向へよ。 准胆佛母大悲尊 如來部中諸聖衆  
○觀想せよ大海中に蓮花あり、難陀・拔難陀・二龍共に蓮花の莖を扶く、花臺上に阿字

あり、淨月輪となる、輪中に拇字あり、變じて寶瓶となる、寶瓶變じて准胆佛母とな  
る、身黃白色にして種種の莊嚴あり、輕殺の衣を着け白き螺を劍とせり、面に三目、  
身に十八臂あり、上の二手は説法の相に作り、右の二手は施無畏にし、第三手は劍を  
把り、第四手は數珠を把り、第五手は微若布羅迦にはなし、西國にあり、第六手は鉞を把  
り、第七手は鉞を把り、第八手は跋折羅を把り、第九手は寶蓋を把る。左の第二手  
は如意寶幢を把り、第三手は蓮花を把り、第四手は澡罐を把り、第五手は索を把り、  
第六手は輪を把り、第七手は螺を把り、第八手は寶瓶を把り、第九手は般若波羅蜜を

(一)心眞言 小眞言には前印を用ゆるも今は何とも見えず。又此の小眞言は原本梵字の對譯文字は次の如く集經一諸家眞言集に出づ。  
(二)准胆云云 勸請の句。  
(三)觀想せよ云云 道場觀なり。

(四)鉞 或はいふ鉞の誤りか。  
(五)澡罐 ミツカメ、即ち澡瓶なり

(一)娜慕等 原本梵字、對譯文字は准胆軌(金剛智譯)の載による。

(二)大聖云云 勸請の句。  
(三)觀想せよ云云 道場觀。

把り、矜愍の眼を作りて行者を看たまふ、威儀具足し相好圓滿せり、乃至八供・四攝等の菩薩、恭敬し圍繞す。

○振鈴以後大日印明 ○本尊印明 ○次に八供養印明 ○次に次は常の如し。 ○南無佛母准胆三反

○本尊印 内縛三古印、二空 ○又の印 二手外縛して二風二空 五處を加持し頂に散す。(一)娜慕等

△中御室御記 ○准胆印 二手を以て外に向へ相又へ、二頭・二大母指を並べ直ぐ立てよ。  
○密印三指印 ○拇種子 ○五指三摩耶形 ○眞言 娜慕颯哆南三藐三勃陀俱胆南但姪他

唵左歟祖囉准胆娑囉賀。 小呪 唵者禮主禮准胆娑囉賀。

○不空絹索 息災に之を修す、大聖不空絹索尊 蓮花部中諸聖衆  
○觀想せよ、樓閣中に八葉の大蓮花臺あり、花臺上に月輪あり、月輪中に謨字あり、

變じて絹索となる、絹索變じて不空絹索觀世音菩薩となる、首に花冠を戴く、冠中に阿彌陀佛あり、三面四臂にして遍身肉色なり、右手に念珠を持し、次手は寶瓶を持し

(二) 珞 或はいふ環の字か。

左手は蓮花を持す、次手は絹索を持し鹿皮を以て袈裟となし、七寶を以て衣服とせり、珠瓔(一)珞釧をもて種種に莊嚴し、赤蓮花に坐して大光明を放てり、及び蓮花部の諸尊乃至無量の仙衆、前後に圍繞す。

○振鈴の次に大日印明 ○本尊印明 ○次に八供養印明 ○次に次は常の如し。 ○南無不空絹索。三反

○本尊印 二手蓮合し、進力禪智を縛し、右手の禪度を左手の虎口の中に入れよ。

唵阿謨伽波娜摩訶捨矩嚩駄羯羅灑野鉢羅吠捨

野摩訶跋輪跋底野麼縛嚩拏矩吠囉沒羅憾摩吠囉駄羅波羅矩嚩三摩瑱吽此の印明は千手軌に出づ。

○伴僧同じく此の呪を用ふ。 ○伴僧或は唵鉢頭摩陀羅羅惹伽惹野迥主嚩主嚩娑囉賀三十卷經第二を用ふ、海僧正此の眞言を用ふ云云。然れば小野の方之を用ふるか。

○小呪 唵阿謨伽毗闍耶吽吽不空絹索心呪王經上卷に出づ。何事を作すに随ても、若し此の呪を誦せば、悉く皆な成就す。

○如意輪息災に之を修す。 大聖如意輪觀世音 蓮花部中諸聖衆

(三) 大聖云云 勸請の句

(三) 觀想せよ 道場觀

觀想せよ、心前に咒字あり、字變じて七寶の宮殿樓閣となる、珠瓔環珞を垂る、四面に階道あり、寶樹而も行烈す、其の壇場の中に衆字あり、變じて紅蓮花となる、花臺上に咒字あり變じて滿月輪となる、上に衆字、左右に平平の字あり、三字變じて金剛寶となる、金剛寶變じて如意輪觀音と爲る、身色黄金にして(二)六臂を具足す、冠中に自在王あり、説法の相に住す、千の光明を流出し六道四生を照す、右の第一手思惟、有情を愍念する相なり、第二手に如意寶を持す、一切の願を滿せんがためなり、第三手に念珠を持す、傍生の苦を度せんがためなり、左の第一手は光明山を按す、成就して傾動なし、第二手に蓮花を持す、能く諸の非法を淨む、第三手に輪を持す、能く無上の法を轉す、六臂廣博にして體は能く六道に遊び、大悲方便を以て諸の有情の苦を斷す、八大觀音及び蓮花部の無量の聖衆、前後に圍繞す。

(二) 六臂 六道能化の相

○振鈴の次に大日印明 ○本尊印明 ○次に八供養 ○次に次は常の如し。 ○南無大聖如意輪。三反

○根本印 虚心合掌して忍願蓮葉形 曩謨羅怛曩怛囉夜野曩莫阿里也嚩路枳帝濕嚩羅野胃地

薩怛縛野摩訶薩怛囉野摩訶迦嚩拏野怛囉也他唵斫羯羅韎底振跡摩尼摩訶鉢鉢銘嚩嚩底瑟姪入嚩囉阿羯羅灑野吽發吒莎奇。

○心印 唯だ前印の戒方 唵鉢娜迷振跡廢坭入縛權呼。 ○心中心印 二羽外縛して進力を  
並べ、戒方を又た舒べ、 唵囉羅那鉢娜銘呼。 ○伴僧 大呪  
檀・惠を交へ堅てよ。

(一) 大聖云云 勸

(二) 壇中云云 道

(三) 鉢曇摩花 白

○白衣觀音 息災に之を修す、宿曜撰災 (一) 大聖白衣觀世音 蓮花部中諸聖衆

(二) 壇中に梵字あり、變じて月輪となる、月輪の中に梵字あり、變じて蓮花臺となる、蓮花臺上に伴字あり、變じて鉢曇摩花となる、鉢曇摩花變じて白衣觀自在菩薩となる、首に天冠を戴き、身に素衣を着け、左手に念珠を執り右手に印を持し、足は白蓮花を踏む、光明赫奕たり、乃至無量の聖衆前後に圍繞す。

○振鈴の次に大日印明 ○本尊印明 ○次に八供養印明 ○次に次は常の如し。 ○南無白衣觀音三反

○本尊印 二手内縛して二頭指蓮葉形に作れ。 唵濕吠帝濕吠帝半拏羅縛悉爾莎母。 ○伴僧 同じく此の呪を用ふ、或は十一面儀軌真言。

(四) 大聖云云 勸

○不動 調伏に之を修す、若しは息災。 (四) 大聖不動威怒王 四大八大諸忿怒

(一) 壇中云云 道

(二) 壇中に系字あり、變じて瑟瑟の座となる、座の上に憾輪の字あり、變じて智劍となる、智劍變じて不動明王となる、身色青黒にして童子肥滿の形なり、頂に七結の髪あり、七覺分を表す、左に一辨髪を垂る、二子の慈悲を顯す、右手に利劍を執りて三毒の惑を斷す、左手に羂索を執り難調者を繫縛す、遍身に迦樓羅炎を現す、煩惱の惡龍を噉食することを顯す、寶盤山に坐したまへり、淨菩提心の傾動なきことを表す、左右に二童子あり、右を於迦羅と名く、恭敬小心の者なり、左を制多迦と名く、難共語惡性の者なり、乃至四大明王、十二大天、無量の眷屬前後に圍繞す。

○振鈴以後大日印明 ○本尊印明 ○八供養印明 ○禮佛 南無阿利耶阿左羅曩拏。  
三反 南無嚩囉遜婆尼 南無バザラ軍荼利 南無バザラ瑣鬘特迦 南無バザラ夜叉

本尊加持の時、先づ智拳印並に大日真言を以て四所を加持す。

○根本印 二羽内に相刃へ、輪々各の環の如くし、二空を水の側り 火界呪

○次に本尊印明 左手空を以て地水の甲を捻し、左の膝の上に右手を置き、左の如くして、右の手の中に差し入れて、右の手を抽きて胸の右方に置き、真言三反

或は○次の印にて逆三反順三反。○次に心・額・喉・頂を加持し、眞言各の一反して本の如くし、左の手の中に差し入るゝなり。慈救呪、或は先づ逆順加持して後にさゝげ持して、三反誦して四處を加持する様あり。

○伴僧 慈救呪 不動を一壇修する時も調伏ならば、伴僧ハラミタラ尼、息災の時はたゞの念誦なり。

(二)降伏三世云云  
勸請の句。

○○降三世調伏に之を修す。

(二)降伏三世大明王

四大八大諸忿怒

(三)須彌山の頂に五峰樓閣あり、樓閣の中に八葉の白蓮花あり、蓮花の上に卍字あり、變じて五粘金剛杵となる、杵變じて降三世明王となる、四面正は青色、右は黄、八臂二羽を結び心に當て、惠の手は五粘、箭、劍、を持し定の上に鈴、次に弓、次に索、身色青黒にして火光體に遍す、左足は自在天を踏み右足は烏摩后を踏む、乃至金剛部の諸尊、無量の眷屬圍繞す。

○振鈴の次に大日印明

○本尊印明

○八供養印明

○次に次は常の如し。

曇謨バザラツバニ、三反 曇謨アリヤア遮ラ曇ダ、曇謨バザラ軍ダリ、曇謨バザラ琰鬘特迦、曇謨バザラ夜乞及。

○本尊印常の如し。 唵、ツ、パ、ユ、フ、ウ、ン、キ、ヤリ、コ、フ、バ、ギ、ハ、ン、バ、ザ、ラ 解引婆誠呪囉曰羅合畔發吒。

○○軍荼利調伏に之を修す。

(二)大聖軍荼利大明王

四大八大諸忿怒

(三)壇上に寶樓閣あり、寶樓閣の中に梵字あり、兩邊に卍字あり、變じて三胎杵となる、三胎杵變じて軍荼利明王となる、大悲方便を以て大忿怒形を現す、四面四臂なり、右手に金剛杵を執り、左手は滿願の印、二手羯磨の印を作す、身に威光熾盛を佩び、淨月輪中に住す、青蓮花色なる瑟瑟の盤石に坐す、正面は慈、右面は忿怒、左面は大唵の眷東を作り、後面は微怒して之を開口す。方に卍字を觀せよ、是れ降三世法身の種子、南方に卍字を觀ぜよ、是れ忿怒金剛藏法身の種子、西方に卍字を觀せよ、是れ金剛軍童子法身の種子、北方に梵字を觀せよ、是れ金剛羯拏法身の種子、皆な無量の眷屬を具し、恭敬し圍繞す。

○振鈴の次に大日印明

○本尊印明

○八供養印明

○次に次は常の如し。

曇謨バザラ軍荼利、曇謨アリヤア遮ラ曇ダ、曇謨バザラツバニ、曇謨バザラ琰鬘特迦曇謨バザラ耶乞及。

(二)大聖云云 勸請の句。  
(三)壇上云云 道場觀。

國譯要尊法

(二) 仰許受に云く印の字か。

○根本印智、惠度の甲を押し、餘は三帖の形の如くして、惠或は云く、左右の大小相捻し(二) 仰ぐなり。唵アミ囉蜜哩帝アミウツンハツタ發吒。

○又た云く檀、惠相交へて掌に入れ、戒、方、を並べ屈して押す間、忍、願、を並べ申べ、進力を屈して鈎の如く忍願の初節の後に柱め、三股金剛杵の如くし、戒、禪、智、を並べ申べて、戒、方、の背を押し、に處す。曩謨羅怛那怛羅野耶曩莫室旃摩訶囉折羅具嚩駄也唵戶嚩戶嚩底瑟吒底瑟吒摩駄摩駄訶曩訶曩阿弭哩帝頤吒。

(三) 琰鬘云云勸請の句。

(三) 寶樓閣云云道場觀。

○○大威徳調伏に之を修す。 琰鬘特迦威怒王 四大八大諸忿怒

寶樓閣中に大曼荼羅壇あり、壇の中に象字あり、變じて如意棒となる、如意棒變じて焰曼徳迦明王の身となる、六首・六臂・六足を具して六趣を淨め、六度を滿し、六通を成す、青の水牛に乗じ種種の器材を持し、鬪體を以て瓔珞頭冠となし、虎皮を裙となす、其の身は長大にして無量由旬、遍身に火焰あり、洞燃として劫燒の如く、四方を顧視して師子奮迅の如し、乃至無量の忿怒の眷屬前後に圍繞す。

○振鈴の次に大日印明 ○本尊印明 ○八供養印明 ○次に次は常の如し。

曩謨バザラ琰鬘特迦三反 曩謨アリヤ遮ラ曩タ、曩謨バザラソバニ、曩謨バ

ザラ軍荼利、曩謨バザラヤ乞及、

○根本印内縛して二火を竪て合せよ、口説は二大、右、左を押す。 大呪常の 或は唵アツクン惡咩アツクンを用ふ。

○心印二手内に相及へて拳を作り、二中指を直く竪て頭シ之を合せ舒べ、二頭指を屈す、三或即ち成す、口説は、前印の二風を屈して、中指の背に付けて少し付けず。 唵キリ訶哩瑟室キリシユチ

嚩尾訖哩多、娜曩咩、薩囉設咄囉、娜捨也、薩擔婆也、薩擔婆也娑發吒娑囉賀。

○心中心印前の心印の如く、二頭指を直く竪てよ、即ち成す、惡夢の時 唵シユチ瑟致唎迦囉嚩跋シユチリキヤラハ欠娑囉賀。

○○金剛藥及調伏に之を修す。 金剛夜叉大明王 四大八大諸忿怒

壇中に蓮花あり、花臺上に字あり、變じて金剛牙となる、金剛牙變じて金剛藥叉となる、五眼忿怒形にして三面・六臂あり、左の第一手に鈴を執り、次に弓、次に輪なり、右の第一手に五帖を執り、次に箭、次に劍なり、三首に馬王の髻あり、瓔珞をもて其の身を莊る。威猛暴惡にして火燄熾盛なり、乃至金剛部の眷屬前後に圍繞す。

○振鈴の次に大日印明 ○本尊印明 ○八供養印明 ○次に次は常の如し。

曩謨バザラヤ乞及、三反 曩謨アリヤ遮ラ曩タ、曩謨バザラソハカ、曩謨バザラ

(二) 金剛云云勸請の句。  
(三) 壇中云云道場觀。

軍荼利、曇謨巴薩瑤特迦。

○根本印戒・方・忍・願・の指を内に相契へて齒となし、檀・惠・を曲げての如くし、進・力・及び禪・智・は由ほし笑眼の形の如くせよ。

唵摩賀藥叉囉日囉薩怛

囉弱吽鍍斛跋羅吠捨吽。此の印言は瑜祇經に出づ。

△中御室御記に云く金剛藥叉 ○(一)印(二)外縛して頭指少指を開き立て口の二頭にて鈎せよ。 ○真(三)唵摩賀引藥乞叉合

囉日羅、薩怛囉(二)同落の反吽、鍍斛引跋羅(二)吠捨吽。 ○種(一) 〇三 五牘。

△同じさ御記に、○種子 〇(一) 或は𑖑字 ○三昧耶形 五牘印言は瑜祇經の如し、五牘印は是れ師の秘説なり。

△大御室御記 金剛藥叉印瑜祇經の如し、或は金剛界三摩耶會の、牙菩薩の印なり云云。

(一) 鈎の如く、の形は、笑眼の形は、禪智は並べ立て進力に屈して、禪智の端に着け、各の兩指の間、眼形の如き景なり。(二) 耶會の牙菩薩の印なり。(三) 唵等原本梵字、對譯文字は瑜祇經所載による。

〇〇北斗息災三時に之を修す、金剛界に付て行ぜし。

○供物の事。發願の時には、十六杯佛供、十一杯螞蟻同時に之を備ふ。次の日より十六杯佛供等は、日中に之を備ふ、十一杯螞蟻は初夜の時之を備ふ。指尾法圖の様如きは、火を付くる次第、朱の付くる記の如くんば、鍍茶は之を用ひず。命穀は五穀を加ふ、木は乳木之を用ふ、命木少きは百八、乳木はヌルテ等なり。藥種は始めの時許り之を供す、少きが故なり。茅草を爐縁の下に之を敷く、近來は之を用

(一) 十六杯、佛供四方に各四なり。(二) 鍍茶云云。護摩には用ひず。只摩には錢を用ふ。(三) 命穀云云。命穀若し護摩の五穀外ならば加ふこと

(一) 散杖云云。草を束めて結んで用ふること。

(二) 一字金輪云云。勸請の句。

(三) 本尊聖者云云。發願の句。

(四) 道場觀云云。道場觀なり。

(五) 傍に云く、七卷抄に云く、振鈴等印言。次に事供等印言。次に事供文。金。又は頂に作る。

ひす。(一) 散杖は束草を用ふる事、本法なり。次には柳枝、葉をつけながら之を用ふべし。而も近來は梅の木を削て之を用ふ。

〇〇一字金輪頂輪王 北斗七星諸曜宿(一)之を加ふべし。 本尊聖者 一字金輪 北斗七星諸曜宿等(二)の如し。

道場觀は金剛界次第の如く觀じ了れ、大日如來心月輪中に、(三)字あり、八幅の金輪となる、大日如來の舉體金輪なり、金輪變じて金輪佛頂となる、其の後邊の左右に七の荷葉座あり、座上に各の(四)字あり、星形となる、星形變じて北斗七星となる、前に荷葉座あり、座上に土星あり、次に日・月・火・水・木・金・羅計・十二宮・廿八宿・並に諸眷屬等、重重に周匝し圍繞す。

○次に大虛空藏以下常の如し。 ○(五)次に振鈴 ○次に承仕螞蟻に火を付く。 ○次に

に大日 ○頂輪王 ○北斗 ○次に羯磨會卅六尊 ○次に四印會一印會 ○次に

前供 ○讚 ○四智 ○普供 ○三方 ○祈願 ○禮佛(四)之を加ふ。 南無一字(六)金輪一反

南無北斗七星三反 南無諸曜宿等一反

○本尊加持 ○大日 ○頂輪王 ○北斗 ○正念誦 大日、頂輪王、北斗、 ○本尊

(一) 供物云云壇上に取り備ふることを。第一云云の護摩なり。北斗の摩六段にして自觀をば金輪段に行ず壇木の積ね様は火天段常の如し。北斗壇三支横、後火天段六支横、世上天段六支横、以上三段十六支横、十五支乳木は十五支。

加持前の ○次に散念誦 佛眼、大日、頂輪王、白衣、北斗、本命星、當年星、本命曜、生月宮、本命宿、諸曜、諸宿、星息災、

○次に念誦了て護摩し、(一)供物を取り置き、大日頂輪王、北斗印言、

○(二)第一火天段は常の如し。○第二金輪段香隆寺次第の如し、召請には頂輪王印言、供養眞言に同じ。第三北斗段同次第の如し、召請には北斗眞言、供養眞言に同じ。○第四段諸尊段同次第の如し。○第五後火天 ○第六施天段常の如し。

護摩段段には必ずしも三摩耶形を用ひざるなり。

○伴僧 三方の次に佛眼 ○振鈴の次に北斗眞言ササタ等 ○金打の次に一字 ○御加持眞言ササタシナウ

○北斗印 二手の中指、大指を相捻して互にクサシ、二本立て合せ、二小指を各の開き立て、五星印と名く、是れ祕印なり。 唵頻多而曇野伴惹惹野染

普他摩娑縛弼曇羅訖山婆縛都、娑縛賀。  
△大北斗法成就院大僧正、白河院の御時、始めて之を行ぜらる、中壇は北斗の御修法の如し、本命星殊に之を供し護摩するなり、餘の六壇には六星各の殊に之を供すること北斗供の如し、眞言も各各の壇、各の一星づゝ呪遍を倍すべし、中壇の左右に各の三壇なり、七壇みな北に向ふ、若し便宜なくんば體に隨ふべし、小壇は振鈴の後ち各

の之を行ず、小壇には振鈴を用ひず、七壇みな三時に之を行ず、小壇は打鳴、火舎の蓋、小壇は錢を用ひざるなり、護摩壇は阿闍梨別して之れなし、大阿闍梨兼ねて之を行ず、中壇の萬太羅は木像にして之を造る、六小壇の萬太羅は繪像にして之を圖す。

○(一)北斗供 ○供米三石五斗 ○(二)油三升五合中品の支度は二石一斗二升五合、下品は有るに隨ふなり。 ○供物の圖樣

十一杯蠟燭は指尾法の圖の如くなり、火を付くる次第は朱に付くる説の如し。金輪佛供は二杯或は四杯、大二白飯、小豆汁二杯、菓子二杯、命殺二杯、或は之を略す。錢は圖位の如く十一本之を立つ。或は只だ二本之を立つ。後説吉し常の事なり。燈臺二本

一時三時、體に隨ふべし。急用の事には、若し三時ならば、錢蠟燭は初夜の時許りなり。後夜は粥、日中は白飯二杯或は四杯、大二汁二杯、菓子二杯、常の行法の如し、但し略の時には大佛供二杯許りなり。餘の小佛供・汁・菓子を用ひず。或は小佛供を略して

汁・菓子を用ふ云云。一時の時は初夜の時に、日中に佛供之を居え加ふ。

○(三)本尊聖者 一字金輪 北斗七星 諸曜宿等前後は常の如し。

心前に列字あり、七寶莊嚴の宮殿となる、殿内の中央に莊嚴せる壇あり、壇の中央

(一) 傍に云く、本法は交飯なり、若し叶はずんば例の飯なり。  
(二) 油云云 授受記に云く壇供米なり油にあらず。

(三) 本尊聖者云云 發願の句、道場觀なり。  
(四) 心前云云

に森字あり、寶蓮花となる、蓮花上に水字あり、金輪となる、金輪變じて釋迦金輪王となる、定印に住せり、定印の上に八幅の金輪を持す、瓔珞を以て莊嚴し身體に懸けたり、金輪王を圍繞して五十六の荷葉座あり、座上ごとにで字あり、變じて星形となる、星形變じて七星・九執・十二宮神・二十八宿となる、威儀形色了了分明なり、香花燈明供養雲海、道場を周布し聖衆を供養す。

○振鈴之を用ひず。○阿伽を獻じ坐して掌を拍つ。○次に承仕蝟燭に火を付く。

○(二)金輪印虚合して二大指を以て二無名指の甲を結し、二中指・二小指を蓮葉の如くし、二頭指を少しき開に押す。或る説に、内三古印。但し口傳は、二水を以て二地の交へたる間を押すなり。互に押す。曇莫三曼多怛拉怛鉢左ラハハ。

此の印を或る説に虚合して二水背けて掌中に入れ、二大を以て之を押し、二風を以て二大の背に當て相付けず、或は二水を三空の四指の爪の前を掌内にして二處に指し合せ、餘の大指各の開き立てよと。

○北斗印言前に説くが如し。招北斗眞言を用ふるなり。○又の印を立て合す。眞言サマシナ等なり。○八供養印 ○讚 四智 ○次に天龍八部讚 之を用ふべし。○禮佛 南無一字金輪

南無北斗七星三反 南無諸曜宿等四攝の次に之を加ふ。 本尊加持 頂輪王北斗 ○正念誦

○頂輪王 ○北斗或は北斗許り。 ○本尊加持前如し。 ○散念誦以下常の如し。○解界は十八道の如し。

(二)金輪印 軍荼利印の如し。

供養法了て金打の後、承仕を召して鏡を焼かしむ、其の間に心經を讀むなり。或は法身佛を加へ

○本命供作法 多分は一時に之を行ず、金輪を用ひざるなり。

○花瓶 (二)蝟燭、茶、菓、穀、錢、(三)七八十歳の人、錢は兩方合せて七八十枚なり。

○本命星 蝟燭、茗茶、菓子、命穀、銀錢、花塗阿婆阿塗花

○本命宿 蝟、茶、菓、穀、錢、

○花瓶 先づ二肘三方壇を立て、圖の如く供物を供ふべきなり。

○蝟燭 炊き交ふ、但し大豆・小豆を加ふ、法の如く。茶汁を用ふ。 ○菓子 小瓦氣 ○穀 小瓦氣 ○錢 命木て之に懸けよ、若し命木なくんば竹枝を用ひよ、燈明二錢或は一錢、或は茶 ○燈明 常燈或は夜燈。ふたまたなる吉し、竹は速疾の用、常恒の徳あり。○燈明前に三又た之を用ふ。

國譯要章法

(二) 蝟燭云許花に云く、銀錢は花瓶の傍に竹の枝を立て懸るなり、今立盤に横に盛る一説は、八十歳の人云、七十歳の人各四十宛合せて八十なり。

(三) 黒器 漆を塗る器なり。



或は行法の時許りも體に隨ふべきなり。茶とは略説なり、具さには茗茶といふべきなり。

○壇供米二石一斗。○油二升一合是れ常の中品は一石四斗一升四合、下品は有るに隨ふ事なり。なり、公家には三石五斗三升五合。

○別に本尊なくんば北斗に向ふべし、萬太ラ大様は行者北に向ふ、便宜なくんば他方に向ふべきなり。

○本命供の中、當年星、生月宮は之を除くはいかん、本命の名なきが故に、今之を略す。加供せんと欲する者は任意たるべき事なり。

○發願 本尊聖者 三種本命 諸曜宿等。○前後は常の如し。○星は「イ」字吉し、ホ字は外金剛部通じての種字なり。○三昧耶形 星形なり。

○召請は諸曜惣印合掌して二空放し立つる印なり。を以てし、ニ各別の眞言を誦して召請すべし、或は大鈎召印明之を用ひよ。

○ニ獻座 右手の頭指を相註へ、歸命梵 ○拍掌 ○次に承仕蠟燭に火を付く、承仕なき時には自ら火を付く。ニ前供養の時、飲食燈明印よりは前に火を付くべきなり。○振鈴

(一) 各別云云 本命星の別眞言の一本を誦す、曜宿之に伴て來臨し給ふなり。  
(二) 獻座 頭指を以て中指の上節の程を押すなり。  
(三) 前供養云云

を用ひず。○讚 四智 ○次に天龍八部讚を用ふるなり。

○禮佛 南無三種本命 南無諸曜宿等 四攝の次に之を加へよ。正念誦の前に用ひず。○本尊加持は正念誦了て只だ一度なり。○七星印には、内縛して二風ニ之を立つ。眞言は各別なり。○自餘の諸曜等の印には、諸曜惣印に各別の眞言之を用ふ、合掌して二空を放し立つる印なり。○散念誦了て一字眞言を用ひず、其の代りには星息

災眞言之を用ふ。○解界は十八道の如し。  
△星供とは本命星か、當年星の一星を供するをいふなり。多分は一時に之を行ず。供物作法は 佛供二杯、若しは大小合して四杯、茶二杯、菓子二杯干菓あらば用ふべきなり。蠟燭なくんば佛供の燈明を用ふ、是れ同じき事なり。○命祈には命穀・錢二た懸けを供すべき

なり、クシには竹枝を用ふ。○供米一石四斗、油一升四合なるか。  
○發願 本尊聖者 食狼大仙 食狼大仙 此を以て准知すべし 前後は常の如し。 羅計二星をば星王といふべし。 ○種 通ず。 諸星等に ○三昧耶 星形

○禮佛 南無ラコ星王 南無諸曜宿等 發願に准じて之を知るべし。印は本命星には、内縛して二風之を立てよ、餘星には合掌して二空を立てよ。是れ諸曜惣印なり。

許受に云く、是れ承仕あらば、自行の印明は早し、火の付くるは供養の義なり、尤も飯食印の前に之れあるべし。  
(一) 之を立てて合するなり。

○炎魔天 亥の時を以て之を供すべし、公家には初夜一時に之を修す。私には三時、意に任せよ。

○幡

なり幡以下壇圖  
星燭の付く紙錢  
に其の眞言を誦す  
は各三反、但し眞言  
反之を誦す、或は七

○大佛供 聖天 ○拏吉尼 ○司命

○葉汁

○大山 ○炎王

○妃后

○五道

花塗阿燒阿塗花

○葉汁

○成就仙

○遮文茶

○司祿

○幡

○小佛供

○成就仙

○遮文茶

○司祿

○錢

或は中に幡を立つる事もあり、四角に幣を立て、幣の串に幡をかく、幡は紙を横に切て造るなり、二枚を一角に重ねかくるなり。紙錢二本、行作法は石山次第の如し。行者面を北に向ふ又た體に隨ふべし、佛供は釋迦如來に奉るなり。  
(三) 都狀の表白の次に之を用ふ、或は毎日之を讀む。  
或は發願の時許り之を讀む、願文をよむ體に高く之を讀む、或は錢之を略する事もあり。

○發願本尊界會

發願法皇 大山府君 五道大神。前後は常の如し。

○壇茶の印

人頭體なり、炎魔天の所持なり。

○水牛に乗ず

右手に人頭體を執り、左手は掌を仰げ。○振鈴を用ひず。

○讚 四智

○次に天阿蘇ヲ等 ○禮佛 南無炎魔法皇三反 四攝の次に之を加ふ。

○都狀 施主の  
出ず所願の趣  
を書き願文の如

○本尊加持 壇茶の印、(二)目鼻口あり、印説きの文は次第の如し、眞言は壽命轉、(無背の反)縛ッハタヤッハカ。魔天の印言なり、胎藏二卷儀軌に云く、教官亦た太山府君に奉ると文。古人云く、深沙の大聖なりと。

○正念誦は前の眞言なり、或は後呪をも之を用ふ。

此の法には伴僧二口を具す、三力偈の次に、金打より金剛般若をよむ、廻向金打 蠅燭の串は槍

木、毎日之を替ふ。幡を焼く事は結願の時なり。銀錢を焼く事は毎時なり。

○散念誦 佛眼、大日、釋迦、地藏、三昧耶眞言、本尊、以下常の如し。○天等の撥遣供養法には、只

だ十八道(三)撥遣 又た彈指を用ふる事もあり、の如し。蠅燭は行法以前に、承仕位に隨て兼ね

て之を立つ、行法の中、門に振鈴あるの程に、火を長くともして、阿闍梨の右邊に跪

いて、位に隨て火を付けよ。大集經に云く、地藏菩薩、閻魔王となるなり、使者は是

れ五官神なりと。○撥遣 唵縛日羅沒乞叉穆莎骨(奇)と與に三び彈指す、或は

ボキシレボク 説く、明一反、彈指一度と。

(二)目鼻口 壇茶  
印は二手合掌して  
一月に入れ、二空を  
べ立て、二風の中  
纏の上より、許受第  
三節に至る。大指各  
に云く、左右の指  
とあり、是れ兩目各  
の間に穴あり、之  
の間に穴あり、之  
の口より、大指の  
二大の上節に付て  
形あり、是れ鼻な  
り。○撥遣 三ヤボ  
ザラボキシヤボク

御本に云く法印聖靈の御筆本書を以て之を寫す、件の本は自ら故僧都御房相加へて之を賜ふの書籍と云云。而して院主阿闍梨頻りに大に望まると、仍て書寫し留め慈いに以

て之を獻せしむ。時に建曆三年四月四日なり。

延慶三年正月五日、仁和寺眞光院矢車に於て前大僧正御房に賜る御本書を寫し了る。

金剛佛子印三十三 同二十六日三校し了る。

建武五年六月十二日書寫し了る。 金剛佛子信曉廿二年

宥嚴法印に對して之を傳受したまふの砌に、此の本を賜ひ了ぬ。 寛永五年三月五日

金剛佛子寛海

寛文六年十二月十一日授く 金剛佛子靜守

文政五年の夏、東部湯嶋に於て、護國寺の庫本を以て、他をして之を書寫し了る。

龍 肝

(二) 傍に證の字あり。

同十三年正月十一日、智山亮海僧正の本(禪(二)大僧正 御本の轉寫)を以て之を校合し了る。

編者云く、右要章法は大和初瀬能滿律院の藏本を原本として國譯す、頭註は知殿師の人水授受記に由る

國譯要尊法終

國譯傳法灌頂三昧耶戒作法

國譯密教事相第一  
第二に灌頂揭載し  
よれば就て參照せし  
る。向本次第には保  
壽院の式にして爲  
す。廣方の通用と爲

(一) 傍註に云く  
經幕の左方、乾の  
角より之に入る。

(三) 此下に云く  
教授幕内に參入し  
て前机下の土器を  
取て同机上に置く  
阿闍梨、香水を土  
器に入て入れ分  
つ。乾の邊に到り  
文を弟子に授け、  
即ち抱腕に納む。  
打幣二度、教復  
幕内を出て座に復  
す。傍に云く 香  
爐を執る。香  
爐を置き如意を  
執る。

○先づ持金剛讚衆等列に立つ。 ○次に阿闍梨並に弟子、列に加る阿闍梨は與に乘り、十弟子相從ふ。

○次に讚音を發す。 ○次に色衆進行して上堂す。 ○次に阿闍梨同じく昇て幕

内に入り、高座の邊に到りて護身結界す。 ○次に高座に登る。 ○次に弟子着座す。

○次に持金剛衆行道すること三通す。 ○次に諸僧着座す。 ○次に惣禮

○次に教授、弟子を引入す。 ○次に弟子禮盤に着す。 ○次に阿闍梨護身結界す。

○次に加持香水、自身及び弟子等に灑ぐ。 ○次に不動・三世・空網・火院・等

○次に振鈴。 ○次に弟子頌文を讀む。 ○次に唄を唱へ散花す。 ○次に阿闍

梨、佛名を稱ふ。

南牟大聖毗盧遮那如來 南牟東方阿閼如來 南無南方寶生如來 南牟西方觀自在

王如來 南牟北方不空成就如來 南牟普賢金剛薩埵等、盡虛空遍法界、微塵刹土

中の、帝網重重三際一切の菩薩摩訶薩 (夫れ菩提心の戒體とは、性本白真にして廓

然凝寂なり、量、虚空に等うして不増不減なり、本より初末なく三際窮め難し、大は

國譯傳法灌頂三昧耶戒作法

乃ち無邊、細はセムカイ纖芥に過ぎたり、此を體悟る者タミをば名けて菩提心戒の根源とするなり、亦た即ち名けて阿耨多羅三藐三菩提心を發すの正因とするなり。

華嚴經に云く、初發心の時、便ち正覺を成ず。涅槃經に云く、初發し已て人天の師ニと爲りて、聲聞及び緣覺に勝出せり。大毗盧遮那經に云く、菩提心を因となし、大悲を根本となし、方便を究竟となす、況んや此の戒を受くれば、理行雙修して最上の悉地を剋證せずといふことなし、諸佛攝受して灌頂位に入て、佛種姓を紹シユで斷せざることを得んと欲はゞ、菩提心を發して清淨戒を受くべし。

先づ當さに一切の聖衆を普禮すべし。

弟子某甲等 稽首歸命して 遍虚空法界 十方の諸の如來

瑜伽惣持致 諸大菩薩衆を禮す 及び菩提心を禮す 能く福智衆を滿して

無上覺を得しむ 是の故に稽首して禮す。

禮佛の眞言に曰く 唵オン一薩縛サハバ但他嚩多タナハ引跋那バダナ滿那南迦囉彌マンナナンカラムニ

次に運心供養すべし。

弟子某甲等 十方一切の刹 所有の諸供養 花鬘燈塗香

飲食幢幡蓋を 誠心に我れ 諸佛大菩薩 及び諸の賢聖衆に奉獻す

我れ今、心を至して禮す。

普供養虚空藏眞言に曰く 唵オン誑クワン誑クワン引イン三婆嚩嚩サンパハバ囉ラ囉ラ合カフ解ケ

次に懺悔すべし。

弟子某甲等 今、一切佛 諸大菩薩衆に對して 過去世の

無始流轉の中より 及し今日に至るまで 眞如の性に愚迷して 虛妄分別

貪瞋癡の不善 三業の諸の煩惱 及び隨煩惱等クニを起し 他勝罪

及び除罪懺等クニを違犯し 佛法僧を毀謗し 三寶物を侵奪シムし 廣く無間罪を作す

こと 無量無邊劫に 數カネを憶知すべからず 自ら作し他を教シても作さしめ 見聞し及

び隨喜す 復た勝義諦の 眞實微妙の理に依て 聖、惠眼を以て 前後中の三際を觀する

とき 彼れ皆な所得なし 自心に分別を造る 虛コ空にして實教カクに不カクず 以て惠方便

(二)空 又は妄に 作る。

とせり  
 平等にして虚空の如し 悉く皆な我れ懺悔す 誓て敢へて覆藏せし 今懺する  
 より已後に  
 永く断じて復た作さじ 乃至等覺を成するまでに 終に更に違犯せし 惟だ願  
 くは十方の佛  
 一切菩薩衆 哀愍して我を加護して 我れをして罪障を滅せしめ玉へ 是の故  
 に至心に禮す。  
 懺悔滅罪の眞言に曰く 唵薩縛跋波捺賀引曩縛日囉野引娑縛日囉引  
 次に應當に三歸依を受くべし。  
 弟子某甲等 今日より以往に 諸如來 五智三身の佛に歸依し  
 金剛乘 自性眞如の法に歸依し 不退轉 大悲菩薩僧に歸依す  
 三寶に歸依し竟んぬ 終に更に 自利邪見の道に歸依せし 我れ今至心に禮す。  
 三歸依の眞言に曰く 唵歩引欠  
 次に應さに菩提心戒を受くべし。

(一)傍註に曰く  
 如意を置いて香爐  
 を執る。

弟子某甲等 諸の菩薩衆と與に 今日より以往 乃し正覺を成するに至る  
 まで誓て菩提心を發さむ  
 有情無邊誓願度 福智無邊誓願集  
 佛法無邊誓願學 如來無邊誓願事  
 無上菩提誓願成  
 今、發す所の覺心は 諸の性相 蘊界及び處等 能取所取の執を遠離せり  
 諸法は悉く無我なり 平等にして虚空の如し 自心本より不生なり 空性圓寂  
 の故に  
 諸佛菩薩 大菩提心を發したまふが如く 我れ今是の如く發す 是の故に心を  
 至して禮す。  
 菩提心戒を受くる眞言に曰く 唵胃地呬多母怛波合那野引彌  
 (二)佛子心を寂にして、當さに啓白を聽くべし。 苾芻某甲、稽首和南し、敬て、  
 金剛胎藏大毗盧遮那、及び十方三世の一切の諸佛諸大菩薩、聲聞緣覺一切の賢聖に白  
 さく、咸く願くは證明したまへ、今、娑訶世界南瞻部洲、日本國山城洲、某縣某坊某

寺の灌頂道場に有り、某甲、今、我所に於て菩提心を發し、菩薩の三聚淨戒を求受す、惟し願くは十方一切の諸佛大菩薩、一切の賢聖、佛子を加持して永く退轉せざれ、心を至して頂禮す。

(一) 傍に細註して云く、香爐を置き如意を執る。

(二) 佛子諦かに聽け、今汝がために羯磨受戒す、正まことに是れ戒を得るの時なり、心を至して羯磨を聽け、善男子諦かに聽け、汝が今、我所に於て諸菩薩の一切の學處を求受し、諸菩薩の一切の淨戒を求受せんと欲へ、謂く攝律儀戒、攝善法戒、饒益有情戒なり、是の如きの學處、是の如きの淨戒は、過去の一切菩薩已に具し、未來の一切の菩薩、當あたさに具すべし、現在の一切の菩薩今具す、是の學處に於き、是の淨戒に於て、過去の一切の菩薩已に學し、未來の一切の菩薩當あたさに學すべし、現在の一切の菩薩今學す、汝が能く受くるや不いなや。發心即ち已すでに(三)天人の師と爲て、已すでに諸佛のために護念せられ、已すでに諸菩薩のために敬念せらる、故に華嚴經に云く、初發心の菩薩、無量功德の藏を成就す、天王・龍王・夜叉王・乾達婆王・阿修羅王・迦樓羅王・緊那羅王・摩睺羅伽王・人王・梵王・諸佛法王・皆な悉く守護して、當あたさに須らく此の菩提心を保持ホウキすべし、此の心若し在れば真德まんとく自ら歸す、此の心若し然るを、心を發して戒を持たんと欲はば

(三) 天人、或は人天に作る、吉きか

相を識して護るべし、有情を攝化するに四攝の法を以てし、淨戒を受持するに十重禁を以てす。其の四攝とは所謂る布施、愛語、利行、同事なり、無始の慳貪を調伏し、及び衆生を饒益せんと欲ふがための故には、布施を行すべし、嗔恚憍慢の煩惱を調伏し、及び衆生を利益せんと欲ふが爲めの故には愛語を行すべし、衆生を饒益し及び本願を滿せんと欲ふがための故には利行を修すべし、大善知識に親近し及び善心をして間斷することなからしめんと欲ふがための故には、同事を行すべし是の如くの四法、此れ修行處。次に十重戒の相を説かん。一には菩提心を退すべからず、成佛を妨ぐるが故に。二には三寶を捨て外道に歸依すべからず、是れ邪法なるが故に。三には三寶及び三乘の教典を毀謗すべからず、佛性に背くが故に。四には甚深の大乗の經典の通解せざる處に於て疑惑を生ずべからず、凡夫の境に非るが故に。五には若し衆生有て已に菩提心を發したらむ者に、是の如きの法を説くべからず、菩提心を退して二乘に趣向して、三寶の種を斷せしむるが故に。六には未だ菩提心を發さざる者に、亦た是の如きの法を説くべからず、彼をして二乘の心を發して、本願に違せしむるが故に。七には小乗の人及び邪見の人の前に對して、輒らく深妙の大乗を説くべからず、恐くは彼れ謗を生

じて大殃を獲んが故に。八には諸の邪見等の法を發起すべからず、善根を断せしむるが故に。九には外道の前に於て、自ら我れ無上菩提の妙戒を具せりと説くべからず、彼をして嗔恨の心を以て是の如きの物を求むるに、辨得すること能はず、菩提心を退せしめ、二り俱に損あるが故に。十には但し一切衆生に於て損害する所あり、及び利益なからむは、皆な作すべからず、及び人に教へて作さしめ、作すを見ても隨喜せば、利他の法及び慈悲心に於て相ひ違背するが故に。

是の如きの四攝十禁は、菩薩修行の處なり、佛子能く教の如く當さに持して忘棄することを得ざれ、能く持するや否や、既に菩薩の淨戒を授け竟んぬ。

次に觀智蜜要禪定法門の大乘の妙旨を受くべし。無畏三藏の曰はく、前に菩薩の淨戒を受くと雖、今須らく重ねて諸佛内證無漏の清淨法戒を受けて、方さに禪門に入るべし、禪定に入り已て要らず須らく此の陀羅尼を誦すべし。陀羅尼とは究竟至極して諸佛乘法に同じ、一切智海に悟入す、是れを眞法戒と名くるなり、此の法祕密なり、輒く聞かしめざれ、若し聞かんと欲はば、先づ一陀羅尼を受けよ、曰く 唵三法要耶娑但鏝三合

此の陀羅尼を念誦すること三遍すれば、即ち戒及び餘の祕法を聞き、亦た能く一切菩薩の清淨律儀を具足せしむ、諸の大功德具さに説くべからず。

次に發心の爲めに、復た一陀羅尼を受く、曰く 唵冒引地唧多母答播合娜夜娑

此の陀羅尼復た三遍を誦せば、即ち菩提心を發して、乃至成佛までに堅固不退なり。

次に證入の爲めに復た一陀羅尼を受く、曰く 唵啞答鉢羅羅合底吠引劉迦囉胡

此の陀羅尼復た三遍を誦せば、即ち一切甚深の戒藏を得、及び一切種智を具して、速かに無上菩提を具して、一切諸佛同聲に共に説きたまふ。

次に菩薩の行位に入らんが爲めに、復た陀羅尼を受く、曰く 唵囉日羅合曼擊藍鉢羅

二吠捨銘。

此の陀羅尼、若し三遍を誦すれば、即ち一切灌頂曼荼羅位を證して、諸の祕密に於て無障礙を聽す、菩薩の灌頂の位に入て、禪門を受くるに堪へたり、已上、無漏眞法戒を授け竟んぬ。

○次に廻向 ○次に阿闍梨金剛線を加持して左臂に繫く、眞言に曰く 唵摩訶二囉日羅迦囉遮囉日哩俱唵囉日羅憾。

（二）細註に云く、打磬一度如意を置いて香爐を執り、教授聲を聞いて、幕内に參進す。阿闍梨、塗香を取ち、戒體の箱より金剛鉢を取り出し、五鉢を以て五佛眞言を（各各聲）誦し加持して、自の左臂に繫く。

○此の處に細註して云く、阿闍梨五古を執て加持して、弟子に授けて、本所に置く、塗香、花、燒香、燈明之に准す。

○此の處に細註して云く、弟子の掌中に塗る、真言に曰く、唵引穢日羅合、阿闍梨、五古を執て加持して、弟子に授けて、本所に置く、塗香、花、燒香、燈明之に准す。

○次に塗香を加持して弟子の掌中に塗る、真言に曰く、唵引穢日羅合、阿闍梨、五古を執て加持して、弟子に授けて、本所に置く、塗香、花、燒香、燈明之に准す。

○次に白花を加持して弟子に授與す、真言に曰く、唵引穢日羅合、補瑟閉合、唵、告げて言く、願くは汝、一切如來の無盡の相海を得む。

○次に香鑪を加持して弟子の雙手に薫す、真言に曰く、唵穢日羅合、吐引閉惡、告げて言く、願くは汝、一切如來無盡の大悲滋潤の妙色を得む。

○次に燈明を加持して、弟子をして視せしむ、真言に曰く、唵穢日羅合、路引計引、備翼、二合、告げて言く、願くは汝、一切如來等虚空界の智慧の光明を獲得せむ。

○次に不動の明を以て齒木を加持すること一百八遍、一を一切諸佛に奉獻し、餘は行者に與ふ。

○次に如來微笑の密語七遍を誦するに、能く一切の煩惱及び隨煩惱を破す、密語に曰く、唵跋折囉賀娑訶。

○契法を結び、觀羽を以て金剛拳に作り、已に之を嚼めば定掌を横たへ舒べて枝頭下を承け、物を承くる狀の如くす。

○次に香水を以て嚼める所を洗ふ。○次に惠の水火を以て枝中を横に握り、風地を屈して水火の根に着け、空を掌中に横へて水火の甲を押し、獨鈷杵を持する如くし、東或は北に向て之を擲げて其の相を驗せよ。外に向へば成就せず、内に向へば成就す、若し遠く却來く是れ彼の部。

○次に阿闍梨、金剛線を以て弟子の左臂に移し繫く。○次に金剛水を授與す。

唵囉日羅合、囉那羯吒。○次に弟子復座す。○次に阿闍梨、下座に着す。○次に

受者の頌文

我今勸請阿闍梨 合掌恭敬頭面禮  
當於尊者生佛想 及執金剛菩薩想  
我等歸依尊者所 求學菩提淨戒儀  
惟願闍梨哀愍攝 爲欲建立不退位  
入兩部界曼荼羅 慈悲教示令我見

國譯傳法灌頂三昧耶戒作法



國譯傳法灌頂三昧耶戒作法 終

本次第は國譯密教  
の法第一第二の斯  
事相につき第二の  
法に當りては保  
壽院の用法なり  
て廣く通用す  
可開梨散念誦に  
禮盤を降りて授  
承盤を召して授  
胎機盤を召して授  
壇前に檟一箇を置  
壇前大壇の五瓶を  
取て花を埵に置く  
本所に花を埵に置く  
の邊に五古輪等立  
所に取って左  
傍に置く  
○次に弟子等  
屏風の中央の戸を  
の内に弟子三衣  
獨古扇等を置く  
○次に赤香  
○次に三昧耶印明  
○次に三昧耶印明  
を授く  
○次に三昧耶印明  
を授く  
○次に三昧耶印明  
を授く  
○次に三昧耶印明  
を授く  
○次に三昧耶印明  
を授く  
○次に三昧耶印明  
を授く  
○次に三昧耶印明  
を授く  
○次に三昧耶印明  
を授く  
○次に三昧耶印明  
を授く  
○次に三昧耶印明  
を授く

國譯胎藏界傳法灌頂作法

○先づ阿闍梨入堂して佛を禮し、禮盤に着す。 ○次に表白神分 ○次に供養法常の如し。 ○次に大壇の五瓶を取て小壇の邊の机上に移し置く本方の角に隨て之を置く。 ○次に弟子を引いて堂の戸下に向ふ。 ○次に赤色の帛を以て首を覆ひ眼に當て繫結す一切諸の惡趣を掩閉して、能く。 ○次に三昧耶契を結ぶ金剛鍊して忍・願・密言に曰く 三摩耶薩怛鐵合 ○次に壇前に引入す戸内に香象を置き、上より過ぎ入り香氣を大鈎召印内に奉を成じ、惠・風・眞言に曰く 曩莫三曼多沒駄引喃一阿去聲 薩嚩怛囉二鉢囉二底訶諦二担他藥黨矩奢三冒地浙哩也二鉢哩布羅迦四娑嚩合賀五 ○次に弟子正しく壇前に立ち、師應さに告げて言ふべし、汝今已でに如來眷屬部中に入りぬ、我れ今、汝をして金剛智を生ぜしめむ、此の智に由るが故に、當さに一切如來最勝成就及び諸の世間・出世間の、一切の悉地を得べし、又た未入壇場の人の前に於て此の法事を説くべからず、汝若し説かば、但だに三昧耶を違失するのみに非ず、亦た自ら殃咎を招かん。

國譯胎藏界傳法灌頂作法

子をして香象を超え(象頭を以て東に先づ左足を以て之を超ゆ)胎藏界の壇前に引導す。○大鈎等 註に阿闍梨左方に立て大鈎右印明を結誦す。

○次に契中等 傍註に云く、教授五葉の標を取て中指に挿む。傍註に弟子花を授く。

○次に契中に白花を挿み、即ち此の密語を授けて曰く、唵引三昧耶薩但鏡合鉢羅引三合底車轆日羅二穀。

五八

○次に金剛解脱の密語を誦して、弟子が結ぶ所の三昧耶印を解かしむ、密語に曰く、唵引底瑟佉合轆日羅合偈哩合住反引迷引婆去嚕三舍引涅囉合妬引迷婆去囉三捺引迷引遇地瑟佉合薩囉悉地の反攝迷一鉢囉合拽車五呌引賀賀賀賀。

論に曰く、願くは金剛薩埵、常住堅固に我が心を加持したまへ、願くは我に一切悉地を授與したまへ。

○次に眼を掩ふ帛を解く、密語に曰く、唵引轆日羅合薩但囉合娑囉合延帝引備曳合祈乞菊舌半呼上 娜伽去吒曇三但答播合嚕囉引伽吒野底四薩囉惡乞菊合轆日羅合祈乞菊合遇努但囉六係引轆日羅合鉢者七。

論に曰く、金剛薩埵、親たり専ら汝がために、五眼及び無上金剛眼を開かん。

○次に擲ぐる所の花を取て、密語を誦して曰く、唵鉢羅底鉢哩恨拏但縛縵摩合二薩埵摩訶婆囉。

○即ち誦了て、所取の花を以て、弟子頂に安す。論に曰く、願くは大力の菩薩、汝を攝授したまへ。

○次に弟子をして護身せしむ。○次に四禮金剛合掌。○次に弟子を引いて小壇の前に到り、左足は花門を踏み、右足は花臺を踏み、臺上に坐せしむ。○次に弟子の頭上に寶冠を着す。○次に臂釧を興へ腕に着す。○次に種種の花・香・燈明等を以て供養す、謂く此の人、佛位に坐するが故に。○次に讚詠歌歎を以て歡喜心を生ぜしむ。○次に白拂を持して、弟子の身を拂ふ。○次に想へ、弟子の頂に剋字あり、大光焰を放ちて熾燃赫奕たり、心中に月輪あり、輪内に八葉の蓮花あり、花臺の上に剋字あり、剋字の内に窈都婆あり、應さに想ふべし、己身毗盧遮那の如しと。

○次に阿闍梨、中瓶より始め、次第に五瓶を取り、各三たび大壇を遶り了て即ち本所に置く。

五九

國譯胎藏界傳法灌頂作法

弟子傘蓋に至る時、蓮臺に坐す。

○次に即ち等 傍註に云く、教授花を以て三子の頂に安し、禮拜せしめ、其の懷中に納む。○次に阿闍梨倚子に坐す。○次に弟子蓮臺に坐す。○次に教授寶冠并に釧を取て之を着せしめ、弟子を觀じ大日に同しむ。○次に種等傍註に到り、教授戶邊に塗香、花、燒香、證明、花、阿闍梨之を捧げ、阿闍梨手に教授弟子の雙す。○次に想等傍註に、次定印を結び、觀念す。○次に阿等傍註に、先づ中瓶を取て當界の正面に



（一）字に歸命の句  
 （二）字に歸命の句  
 （三）字に歸命の句  
 （四）字に歸命の句  
 （五）字に歸命の句  
 （六）字に歸命の句  
 （七）字に歸命の句  
 （八）字に歸命の句  
 （九）字に歸命の句  
 （十）字に歸命の句  
 （十一）字に歸命の句  
 （十二）字に歸命の句  
 （十三）字に歸命の句  
 （十四）字に歸命の句  
 （十五）字に歸命の句  
 （十六）字に歸命の句  
 （十七）字に歸命の句  
 （十八）字に歸命の句  
 （十九）字に歸命の句  
 （二十）字に歸命の句

異慧を生ずること勿れ 當さに疑悔の心を離れ 世間に於て 勝行眞言道を開示すべし  
 常に是の如くの願を作し 佛の恩徳を宜べ唱へ 一切、金剛を持せば 皆まさに汝を護念すべし。  
 ○（二）次に阿闍梨、傘を持して弟子の上を覆ひ、曼荼羅を旋遠すること三廻す其の時、古の禮の文を  
 ○（三）次に壇前に至て、弟子をして慰勸に禮拜す、其の傘、身に隨て上下す。 ○（四）次に阿闍梨、諸尊を啓請して是の如くの言を作す、我れ某甲、某甲がために灌頂し畢りて、今、諸尊を付屬し、明藏を持せしむ。 是の語を作し已て傘を放つ。  
 ○（五）次に起立して曼荼羅の前に對して爲めに三昧耶を説いて、其をして堅固ならしめ告げて言く、善男子、汝應さに堅く正法を守るべし、設ひ逼迫の苦惱に遭ひ、乃至命を斷つとも、修菩提心を捨離すべからず、求法の人に於て、及び財物に於て慳慳すべからず、諸の衆生に於て少しく不利益の事も亦作すべからず、此れは是れ最上の句義なり。

の上を覆ひ胎藏界  
 壇前等傍  
 弟子をして三度  
 曼荼羅を執りて  
 ○（一）次に阿闍梨、弟子長跪合掌す。  
 ○（二）次に起等傍  
 ○（三）次に阿闍梨、弟子をして起立せしむ。  
 ○（四）次に阿闍梨、弟子をして起立せしむ。  
 ○（五）次に阿闍梨、弟子をして起立せしむ。  
 ○（六）次に阿闍梨、弟子をして起立せしむ。  
 ○（七）次に阿闍梨、弟子をして起立せしむ。  
 ○（八）次に阿闍梨、弟子をして起立せしむ。  
 ○（九）次に阿闍梨、弟子をして起立せしむ。  
 ○（十）次に阿闍梨、弟子をして起立せしむ。  
 ○（十一）次に阿闍梨、弟子をして起立せしむ。  
 ○（十二）次に阿闍梨、弟子をして起立せしむ。  
 ○（十三）次に阿闍梨、弟子をして起立せしむ。  
 ○（十四）次に阿闍梨、弟子をして起立せしむ。  
 ○（十五）次に阿闍梨、弟子をして起立せしむ。  
 ○（十六）次に阿闍梨、弟子をして起立せしむ。  
 ○（十七）次に阿闍梨、弟子をして起立せしむ。  
 ○（十八）次に阿闍梨、弟子をして起立せしむ。  
 ○（十九）次に阿闍梨、弟子をして起立せしむ。  
 ○（二十）次に阿闍梨、弟子をして起立せしむ。

汝今、已に曼荼羅阿闍梨持明藏者となりぬ、諸佛菩薩及び眞言主、一切天神已に共に知りたまふ。  
 ○（一）次に共に小壇所に還着す。 ○（二）次に阿闍梨、五鈷金剛杵を執て、弟子に授與し、偈を説いて曰く  
 此れは是れ一切佛の體性 金剛薩埵の手に住す  
 汝常に當さに 金剛薩埵堅固の禁を受持すべし  
 弟子受け已て決定要誓の密語を授けて曰く 唵引薩嚩他引嚩多悉地囉曰羅合三麼耶底瑟佉二合囉沙但囉引三駱羅耶彌四囉曰羅合薩但囉五 唵囉囉囉呼  
 論に曰く、一切如來金剛薩埵成就三摩耶、願くは我が所に住せば、我れ常に守護せむ  
 ○（三）次に弟子をして堅持し歡喜せしめんと欲ふが故に、偈を説いて曰く  
 此れ等三昧耶は 諸佛汝がために説く 守持し善く愛護して 當さに身命を保つ如くなすべし。  
 ○（四）次に弟子師教を受け已て、師の足を頂禮して白して言さく、師の教誨の如く我れ誓て修行せむ佛恩及び大師の恩を報じ奉り、敢て師命に背かず、亦た教理に違せず。

(一)次に印等傍に弟子蓮臺に還着す。  
(二)次に寶冠等以前に脱したる。  
(三)次に阿等の如く道儀に奉仕す。  
(四)小壇の五瓶を取て大壇に返し立て挿花壇に五古等を本所に置き、禮盤を脇機に置き、佛供養等備す。

(一)次に印可を授く別あり。  
(二)次に寶冠釧等を脱す。  
(三)次に弟子蓮臺を降り戶外の座に着く。  
(四)次に阿闍梨禮盤に着し後供養解界撥遣等す。  
(五)次に禮盤を降て佛を禮す。  
(六)次に出堂

國譯胎藏界傳法灌頂作法 終

國譯金剛界傳法灌頂作法

(一)細註に云く、阿闍梨散念誦して禮盤を降り、禮盤承仕を召して、禮盤を壇前に置き、佛供養等備す。  
(二)次に壇前に佛を禮し、禮盤に着す。  
(三)次に弟子を引いて堂の戸の下に向ふ。  
(四)次に赤色の帛を以て首を覆ひ、眼に當て繫結す。  
(五)次に三昧耶契を結ぶ。  
(六)次に壇前に引入す。  
(七)次に三昧耶契を結ぶ。  
(八)次に壇前に引入す。  
(九)次に壇前に引入す。  
(十)次に壇前に引入す。

○先づ阿闍梨入堂し佛を禮し禮盤に着す。 ○次に供養法常の如し。 ○次に大壇の五瓶を取て小壇の邊の机上に移し置く本方角に隨て之を置く。 ○次に弟子を引いて堂の戸の下に向ふ。 ○次に赤色の帛を以て首を覆ひ、眼に當て繫結す一切諸惡趣の門を掩閉して能く清淨の五眼を開き成就す。 ○次に三昧耶契を結ぶ金剛縛して忍・願・二度を堅て針となす。 密言に曰く 三摩耶薩怛𑖅合。 ○次に壇前に引入す戸内に香象を置き、上より過ぎ入る、香氣を蒸せしめ、手把の印を以て引入す。 ○次に壇前に引入す定・惠・内にして拳を成じ惠風扇して鈎召す。 眞言に曰く 曩莫三曼多沒駄引南一阿去急呼薩囉怛𑖅合。 ○次に弟子正しく壇前に立ち、師應さに告げて言ふべし、汝今已に如來の眷屬部中に入る、我れ今、汝をして金剛智を生せしめむ、此の智に由るが故に、當さに一切如來最勝の成就、及び諸の世間・出世間の一切の悉地を得べし、又た未入壇場の人の前に於て此の法事を説くべからず、汝若し説かば、但に三昧耶に違失するのみに非ず、亦た自ら殃咎を招かむ。

(一) 次、即ち弟子の頂上に安んずる所を授け、密語に曰く、  
 (二) 次、弟子をして護身せしむ。○次に四禮金剛合掌  
 (三) 次、弟子を引いて小壇の前に到り、左足は花門を踏み、右足は花臺を踏んで臺上に坐せしむ。  
 (四) 次、弟子の頭上に寶冠を着す。○次に臂釧を與へ腕に着す。○次に種種の花香燈明等を以て供養す、謂く此の人、佛位に坐するが故に。○次に讚詠歌歎を以て歡喜心を生ぜしむ吉慶讚、餘讚隨意。○次に白拂讚する時之を拂ふを持して弟子の身を拂ふ。○次に想へ弟子の頂に契字あり、大光焰を放ちて熾燃赫奕たり、心中に月輪あり、輪内に八葉の蓮花あり、花臺上に契字あり、契字内に空塔婆あり、想ふべし己身毗盧遮那の如くなり。

○次に金剛解脫の密語を誦して、弟子が結ぶ所の三昧耶の印を解かしむ。密語に曰く  
 唵引三昧耶薩怛釤ニハニニ合  
 底車轆日羅ニ合  
 (三) 誦し已て花を擲げしむ、花の所着の處即ち是れ本尊なり。  
 ○次に金剛解脫の密語を誦して、弟子が結ぶ所の三昧耶の印を解かしむ。密語に曰く  
 唵引三昧耶薩怛釤ニハニニ合  
 底車轆日羅ニ合  
 (三) 誦し已て花を擲げしむ、花の所着の處即ち是れ本尊なり。  
 ○次に金剛解脫の密語を誦して、弟子が結ぶ所の三昧耶の印を解かしむ。密語に曰く  
 唵引三昧耶薩怛釤ニハニニ合  
 底車轆日羅ニ合  
 (三) 誦し已て花を擲げしむ、花の所着の處即ち是れ本尊なり。  
 ○次に金剛解脫の密語を誦して、弟子が結ぶ所の三昧耶の印を解かしむ。密語に曰く  
 唵引三昧耶薩怛釤ニハニニ合  
 底車轆日羅ニ合  
 (三) 誦し已て花を擲げしむ、花の所着の處即ち是れ本尊なり。  
 ○次に金剛解脫の密語を誦して、弟子が結ぶ所の三昧耶の印を解かしむ。密語に曰く  
 唵引三昧耶薩怛釤ニハニニ合  
 底車轆日羅ニ合  
 (三) 誦し已て花を擲げしむ、花の所着の處即ち是れ本尊なり。

(一) 次、即ち弟子の頂上に安んずる所を授け、密語に曰く、  
 (二) 次、弟子をして護身せしむ。○次に四禮金剛合掌  
 (三) 次、弟子を引いて小壇の前に到り、左足は花門を踏み、右足は花臺を踏んで臺上に坐せしむ。  
 (四) 次、弟子の頭上に寶冠を着す。○次に臂釧を與へ腕に着す。○次に種種の花香燈明等を以て供養す、謂く此の人、佛位に坐するが故に。○次に讚詠歌歎を以て歡喜心を生ぜしむ吉慶讚、餘讚隨意。○次に白拂讚する時之を拂ふを持して弟子の身を拂ふ。○次に想へ弟子の頂に契字あり、大光焰を放ちて熾燃赫奕たり、心中に月輪あり、輪内に八葉の蓮花あり、花臺上に契字あり、契字内に空塔婆あり、想ふべし己身毗盧遮那の如くなり。

(一) 次、即ち弟子の頂上に安んずる所を授け、密語に曰く、  
 (二) 次、弟子をして護身せしむ。○次に四禮金剛合掌  
 (三) 次、弟子を引いて小壇の前に到り、左足は花門を踏み、右足は花臺を踏んで臺上に坐せしむ。  
 (四) 次、弟子の頭上に寶冠を着す。○次に臂釧を與へ腕に着す。○次に種種の花香燈明等を以て供養す、謂く此の人、佛位に坐するが故に。○次に讚詠歌歎を以て歡喜心を生ぜしむ吉慶讚、餘讚隨意。○次に白拂讚する時之を拂ふを持して弟子の身を拂ふ。○次に想へ弟子の頂に契字あり、大光焰を放ちて熾燃赫奕たり、心中に月輪あり、輪内に八葉の蓮花あり、花臺上に契字あり、契字内に空塔婆あり、想ふべし己身毗盧遮那の如くなり。

婆囉。  
 (一) 即ち誦し畢て、取る所の花を以て弟子の頂に安んず、論に曰く、願くは大力の菩薩、  
 汝を攝授したまへ。  
 ○次に弟子をして護身せしむ。○次に四禮金剛合掌  
 ○次に弟子を引いて小壇の前に到り、左足は花門を踏み、右足は花臺を踏んで臺上に坐せしむ。  
 ○次に弟子の頭上に寶冠を着す。○次に臂釧を與へ腕に着す。○次に種種の花香燈明等を以て供養す、謂く此の人、佛位に坐するが故に。○次に讚詠歌歎を以て歡喜心を生ぜしむ吉慶讚、餘讚隨意。○次に白拂讚する時之を拂ふを持して弟子の身を拂ふ。○次に想へ弟子の頂に契字あり、大光焰を放ちて熾燃赫奕たり、心中に月輪あり、輪内に八葉の蓮花あり、花臺上に契字あり、契字内に空塔婆あり、想ふべし己身毗盧遮那の如くなり。  
 ○次に阿闍梨、始め中瓶より次第に五瓶を取り、各三たび大壇を遶り了て即ち本所に置く。○次に五瓶の水を以て弟子の頂に灌ぐ。○次に四佛加持。

不動針の如くして心に當てよ  
 唵囉日囉合薩怛囉合地瑟訶合娑囉合唵  
 國譯金剛界傳法灌頂作法

到り、小禮して大  
壇を三たび立ち  
て行つたに、更  
又た本所に歸り、  
小壇所に歸り、  
を本所に歸り、  
に自餘の四瓶を  
て、同行隨つて、  
に同じ口杖を返  
つて、瓶に立つ  
つて、瓶に立つ  
行道の間に瓶を  
五佛三昧に瓶を  
（倒立）口杖を  
（一）瓶に瓶を  
を想へ）

寶生前印、忍願及び屈して寶

唵囉日囉二囉怛曇引合地瑟斃二娑嚩合唵怛洛

無量壽業の如くし、喉に當てよ

唵囉日囉二達摩引地瑟斃合娑嚩合唵

不空成就前印、忍願の面を掌中に合せ、

唵囉日囉二羯磨引地瑟斃合娑嚩合唵

○次に五佛灌頂

遍照尊、金剛縛して忍願を鈎形の如く

唵薩囉怛他引嚩戴引濕囉合哩耶

二毗嚩迦吽

不動前印、加持の印

唵囉日囉二薩怛囉合唵訶遮給吽

寶生前印、加持の印

唵囉日囉二囉怛曇引合唵訶遮給怛路二合

無量壽前印、加持の印

唵囉日囉二鉢娜麼二合唵訶遮給引唵囉二合

不空成就前印、加持の印

唵囉日囉二羯磨引唵訶遮給引惡

○次に四佛繫鬘、四佛皆前印を

不動 唵囉日囉二薩怛囉合唵囉引唵訶遮給引銀

寶生 唵囉日囉二囉怛曇合唵囉引唵訶遮給銀

無量壽 唵囉日囉二鉢娜麼合唵囉引唵訶遮給銀

不空成就 唵囉日囉二羯磨引唵訶遮給銀

（二）次に等に註し  
て、弟子の身上に三  
十七等を授けて先  
づ五鉢を授けて、  
を誦し、次に眞言  
を唱ふ、（三）度斯  
を唱ふ、（四）口杖  
を唱ふ、（五）口杖  
を唱ふ、（六）口杖  
を唱ふ、（七）口杖  
を唱ふ、（八）口杖  
を唱ふ、（九）口杖  
を唱ふ、（十）口杖  
を唱ふ、（十一）口  
杖を唱ふ、（十二）  
口杖を唱ふ、（十三）  
口杖を唱ふ、（十四）  
口杖を唱ふ、（十五）  
口杖を唱ふ、（十六）  
口杖を唱ふ、（十七）  
口杖を唱ふ、（十八）  
口杖を唱ふ、（十九）  
口杖を唱ふ、（二十）  
口杖を唱ふ、（二十一）  
口杖を唱ふ、（二十二）  
口杖を唱ふ、（二十三）  
口杖を唱ふ、（二十四）  
口杖を唱ふ、（二十五）  
口杖を唱ふ、（二十六）  
口杖を唱ふ、（二十七）  
口杖を唱ふ、（二十八）  
口杖を唱ふ、（二十九）  
口杖を唱ふ、（三十）  
口杖を唱ふ、（三十一）  
口杖を唱ふ、（三十二）  
口杖を唱ふ、（三十三）  
口杖を唱ふ、（三十四）  
口杖を唱ふ、（三十五）  
口杖を唱ふ、（三十六）  
口杖を唱ふ、（三十七）  
口杖を唱ふ、（三十八）  
口杖を唱ふ、（三十九）  
口杖を唱ふ、（四十）  
口杖を唱ふ、（四十一）  
口杖を唱ふ、（四十二）  
口杖を唱ふ、（四十三）  
口杖を唱ふ、（四十四）  
口杖を唱ふ、（四十五）  
口杖を唱ふ、（四十六）  
口杖を唱ふ、（四十七）  
口杖を唱ふ、（四十八）  
口杖を唱ふ、（四十九）  
口杖を唱ふ、（五十）  
口杖を唱ふ、（五十一）  
口杖を唱ふ、（五十二）  
口杖を唱ふ、（五十三）  
口杖を唱ふ、（五十四）  
口杖を唱ふ、（五十五）  
口杖を唱ふ、（五十六）  
口杖を唱ふ、（五十七）  
口杖を唱ふ、（五十八）  
口杖を唱ふ、（五十九）  
口杖を唱ふ、（六十）  
口杖を唱ふ、（六十一）  
口杖を唱ふ、（六十二）  
口杖を唱ふ、（六十三）  
口杖を唱ふ、（六十四）  
口杖を唱ふ、（六十五）  
口杖を唱ふ、（六十六）  
口杖を唱ふ、（六十七）  
口杖を唱ふ、（六十八）  
口杖を唱ふ、（六十九）  
口杖を唱ふ、（七十）  
口杖を唱ふ、（七十一）  
口杖を唱ふ、（七十二）  
口杖を唱ふ、（七十三）  
口杖を唱ふ、（七十四）  
口杖を唱ふ、（七十五）  
口杖を唱ふ、（七十六）  
口杖を唱ふ、（七十七）  
口杖を唱ふ、（七十八）  
口杖を唱ふ、（七十九）  
口杖を唱ふ、（八十）  
口杖を唱ふ、（八十一）  
口杖を唱ふ、（八十二）  
口杖を唱ふ、（八十三）  
口杖を唱ふ、（八十四）  
口杖を唱ふ、（八十五）  
口杖を唱ふ、（八十六）  
口杖を唱ふ、（八十七）  
口杖を唱ふ、（八十八）  
口杖を唱ふ、（八十九）  
口杖を唱ふ、（九十）  
口杖を唱ふ、（九十一）  
口杖を唱ふ、（九十二）  
口杖を唱ふ、（九十三）  
口杖を唱ふ、（九十四）  
口杖を唱ふ、（九十五）  
口杖を唱ふ、（九十六）  
口杖を唱ふ、（九十七）  
口杖を唱ふ、（九十八）  
口杖を唱ふ、（九十九）  
口杖を唱ふ、（百）

○次に塗香を取て弟子の胸に塗る。 ○次に觀羽を以て五鉢跋折羅を執り、其の雙  
手に授け、偈を説いて曰く

諸佛金剛灌頂儀 汝已如法灌頂竟  
爲成如來體性故 汝應受此金剛杵

此の偈を説き已て、眞言を誦して曰く 唵囉日囉二合地鉢底二但怛囉引二合避訶去者彌

三底瑟斃合囉日囉二合三摩耶薩怛銀

論に曰く、汝已に灌頂して金剛尊主を獲得し竟んぬ、此の跋折囉常に汝が心中に住せ  
む、所爲る三摩耶なり。

○次に金剛杵を收取す。 ○次に弟子の本名の上に於て金剛字を加へ、名に依て之を呼

ぶ、眞言を誦して曰く 唵囉日囉二合薩怛囉合避訶去者彌二囉日囉二合囉日囉二合囉日囉二合

三系鞞日囉引慶引

○次に字を以て金算を加持し、又た字を兩眼中に觀じて、治眼の法の如く其の  
兩目を拭ふ、偈を説いて曰く

佛子、佛汝がために 無智の膜を決除す 猶ほし世の醫王の如し 善く金算を





論に曰く、一切如來金剛薩埵、三摩耶の願を成就し、我が所に住せば、我れ常に守護せむ。

○次に弟子をして堅持し歡喜せしめんと欲するが故に、偈を説いて曰く  
此れ等三昧耶は 諸佛汝がために説く 守持し善く愛護すること 當さに身命を保つが如くすべし。

○次に弟子、師教を受け已て師の足を頂禮し白して言さく、師の教誨の如く我れ誓て修行せむ命に背かず、亦た教理に違せず。 敢て師

○次に印可を授く別あり ○次に寶冠釧等を脱す。 ○次に弟子、蓮臺を降つて堂内の座に着く。 ○次に阿闍梨禮盤に着し後供養す。 ○次に事畢れる由を白す

○次に神分 ○次に讚普供養、乃至解界撥遣等。 ○次に禮盤を降りて佛を禮す。 ○次に弟子、附屬の袈裟を着す。 ○次に列に還る。

### 國譯金剛界傳法灌頂作法 終

ち弟子をして起立せしむ。 ○次に弟子をして堅持し歡喜せしめんと欲するが故に、偈を説いて曰く  
此れ等三昧耶は 諸佛汝がために説く 守持し善く愛護すること 當さに身命を保つが如くすべし。  
○次に弟子、師教を受け已て師の足を頂禮し白して言さく、師の教誨の如く我れ誓て修行せむ命に背かず、亦た教理に違せず。 敢て師  
○次に印可を授く別あり ○次に寶冠釧等を脱す。 ○次に弟子、蓮臺を降つて堂内の座に着く。 ○次に阿闍梨禮盤に着し後供養す。 ○次に事畢れる由を白す  
○次に神分 ○次に讚普供養、乃至解界撥遣等。 ○次に禮盤を降りて佛を禮す。 ○次に弟子、附屬の袈裟を着す。 ○次に列に還る。

### 國譯七卷鈔一

- 大日 ○阿闍 ○寶生 ○無量壽 ○不空成就 ○藥師 ○阿彌陀
- 法花 ○彌勒 ○隨求

#### ○○大日

○觀想せよ、須彌山の頂き無量廣大にして四寶の成ずる所、其の上にも亦々寶珠字あり、變じて金剛界宮の光明心殿と成る、即ち八柱四門にして左右に吉祥幢あり、其の殿の五樓閣に繒綵珠網を懸く、其の中に五部壇場あり、中央の佛部輪に寶字を想へ、八葉の蓮花となる、蓮花上に肉字あり、左右に列字變じて大覺師子座と成る、其の上列字あり、淨月輪となる、月輪の中に又た寶字あり、八葉の花座と成る、座上に字あり、窶堵波五大所成となる、轉じて摩訶毗盧遮那如來と成る、首に五佛の寶冠を戴き白色の光明を放てり、如來の四邊より隨方光を放ち四佛位四邊とは、胸・左・右の肩・後なりを照せり、並に四波羅蜜、十六尊、八供養、四攝乃至賢劫の千佛、外金剛部の二十天、及び自性所

本鈔は成就院寛助大僧正の製作なり故に廣澤方諸の酒所依なり諸流に於て尊法の相異なることあるは口傳のあるに由るのみ。

○觀想 以下道場觀なり。

○字 此の次に本に有りの字あり。

成内證の眷屬各の本位に住して常恒に説法し衆生を教化す云云。此の事極めて多し、之に因て事を略す。是の如く觀じ已り、先づ左膝、次の膝を印し、次に四處を加持す。

(二) 唵云云 原本に梵字あれども今は略す、已下同じ

○眞言に曰く 唵歩引入欠 ケム ○印相智拳印 ○眞言に曰く (三) 唵囉曰羅駄都銀。

○○阿闍

(三) 壇中に八葉の蓮花あり、蓮花上に卍字あり、變じて白象となる、象の上に卍字あり、變じて淨月輪となる、月輪の中に卍字あり、八葉の蓮花となる、花臺に卍字あり、變じて五肋金剛杵となる、杵變じて阿闍佛となる、觸地の印に住す、身不動なるを得て、頂より青色の光を放ち諸魔を摧伏す、乃至四親近の菩薩及び金剛部の諸尊、各の本標幟を持して、前後に於て圍繞す。

(三) 壇中 已下道場觀なり。

○根本印 右羽開き垂れて地に觸す。 ○眞言に曰く 唵惡乞芻毗也吽 ○又た獨古印 ○眞言に曰く 唵囉曰羅枳惹曇吽

○○寶生

(二) 壇中 已下道場觀なり。

(二) 壇中に卍字あり、馬座と成る、座上 卍字あり、滿月輪と成る、月輪の中に卍字あり、八葉の蓮花と成る、花臺に卍字あり、變じて如意寶珠となる、如意寶珠變じて寶生如來と成る、頂より金色の光を放ち、如意寶珠を雨して悉く一切衆生をして所求を満足せしめたまふ、及び四親近の菩薩、寶部の諸尊恭敬し圍繞せり云云。

○根本印 右羽施願にせよ。 ○眞言に曰く 唵囉但曩三波囉怛略 ○又の印 外縛し火、寶形に作れ 眞言に曰く 唵囉曰羅枳惹囉怛略

○○無量壽

(三) 壇中 已下道場觀なり。

(三) 壇中に卍字あり、變じて孔雀座と成る、座上に卍字あり、蓮花となる、蓮花の上に卍字あり、淨月輪と成る、輪の中に卍字あり、變じて八葉の蓮花と成る、花臺に卍字あり、變じて獨牀杵と成る、杵變じて無量壽佛と成る、頂より紅願梨の光を放ち無數の世界を照せり、斯の光に遇はん者は解脱を得ることなし、乃至四親近の菩薩、及び蓮花部の聖衆、恭敬し圍繞せり云云。

○根本印 二羽仰けて相双へ進、力を堅て相背け、禪・智・其の端を横にせよ ○眞言に曰く 唵盧計涅囉羅惹訖哩 ○又の

壇中。已下道場觀なり。

印 ○真言に曰く 唵囉日羅枳惹喃訖哩

七六

○不空成就

壇中に九字あり、迦樓羅座となる、座上に八葉の蓮花となる、蓮花の上に梵字あり、淨月輪となる、月輪の中に卍字あり、變じて八葉の蓮花となる、花臺に梵字あり、變じて羯磨杵となる、羯磨杵變じて不空成就如來となる、頂より五色光を放ちて恒沙の世界を照すに、其の中の衆生一切の事業を成せざることなし、乃至四親近の菩薩、及び羯磨部の聖衆、各の本標幟を持し、恭敬し圍繞せり。

○根本印 右の羽施無  
長にせよ。 ○真言に曰く 唵阿目伽悉弟噓 ○又の印 中指を掌に入れ  
面を合せよ。 ○真言に

曰く 唵囉日羅枳惹喃噓

○藥師行法次第

先達壇場に立ちて本尊の像を安置し、増益に依て之を修す、若しは息災、時に隨ふべし云 新寫の藥師經一卷を壇中に置き、法の如く之本願經なりを書寫すべし。

○續命幡一流 長け廿九標手。或る記には二丈四尺五寸と云云。薩羅尼集經九尺と文り。蓋五尺餘許り。又た五色絹を以て中蓋となす。又の説は黃・赤・白・青・黒、但し五色を足すなり。小幡四十九流

は但し道場の四面を圍みて之を繋げよ。七層の車輪燃四十九燈を造る。經に曰く、形像七軀、一の像の是れ七佛藥師の別行なり。五色の線を以て四十九結し、病人の項に繋げよ云云。毎日放生四十九頭 但し遇を得べし。諸の衆僧を請して此の經を轉讀すと文り。或は六口、或は十四口、或は廿口、臨時に之を用ふ。四十九遍之を轉讀す。 行法常の如し、但し別護摩壇並に小壇等、隨時に之を用ふ。

○道場觀 觀想せよ、心前に梵字あり、變じて淨瑠璃世界と成る、其の上に大宮殿あり、七寶を以て莊嚴す、其の中に大曼荼羅壇あり、壇中に梵字あり、變じて月輪と成る、輪中に卍字あり、變じて八葉の蓮花となる、花臺に卍字又は卍あり、變じて三摩耶形と成る 口傳あり、或る說には五貼云云 變じて藥師如來と成る、光明映徹して相好圓滿す、殊に十大願を發して濁世の衆生を化度す、日光・月光等の諸大菩薩、及び十二神將、七千の藥叉と與に前後に圍繞せり。

○根本印 口傳あり ○真言に曰く 曩莫引婆諶囉帝、佩殺紫野 二 獎喚吠女里也、二 鉢羅 二 婆羅惹野、二 他藥多野、囉喝帝、三藐三沒駄野 二 怛憫也、二 他唵佩殺爾曳、二 佩殺爾曳佩殺紫野、二 三摩弩藥帝娑婆 二 合賀

○心呪に曰く 唵、禪殺逝、禪殺逝、禪殺社、三沒揭帝、二婆縛賀。

大陀羅尼印、内縛して兩腕稍、相去 那謨羅怛那、二侈羅二夜那、一 那謨金毗羅、和耆羅、三彌佉

羅、四安陀羅、五摩尼羅、六素藍維、七因達羅、八婆耶羅、九摩休羅、十真持羅、十一照頭羅、十二

毗伽羅、十三那謨毗舍闍瞿留、十四毗留離耶、十五鉢羅頗羅闍耶、十六怛姪他、十七唵毗舍是、

毗舍是十八毗舍闍、十九娑摩揭帝、二娑囉合賀。

又の眞言陀羅尼集經(朱)印前の 唵、一呼嘯呼嘯二戰馱去引梨、摩登祇、三 莎呬

陀羅尼集經に曰く 是の法の印呪、若し有人等、諸の罪障多く、及び諸の婦女難月産

厄あり、願くは禍を轉じて福を求めんと欲す、並に鬼神の病を患ひて差え難くんば、

五色線を以て而も呪索を作り、用て病人の項及び手足腰腹等の處に繫け、仍ほ敷へて

藥師の像一軀を作り、藥師經一卷を寫さしめ、幡一口を造り、五色を以て四十九尺と

成せ、又た四十九燈を燃し、燈を七層に作れ、形ち車輪の如し、像前に安置せよ、又

た放生四十九頭、然る後ち與めに五色の呪索を作れ、呪索を作るに法線を得ば、未だ撻

らずして即ち名香を焼いて發願し已て呪四十九遍す、香烟熏じ竟て線を撻り索に作る、

呪聲絶ること莫く撻りて索に作り、已らば印を以て之を柱せよ、更に其の索を呪する

こと四十九遍、然して後ち結するに四十九結を作り、一呪し一結し數足て即ち止む、  
應さに此の索を將て病人の身に繫く。又た藥師經を轉すること四十九遍せば、所有の  
罪障みな解脱することを得、臨産の時一も苦惱なくして即ち易生するを得、所生の孫  
子形貌端正、聰明にして智恵あり、壽命延長にして横苦に遭はず常に安穩なるを得、  
鬼神の病立ちどころに即ち除斷せん。

○日光菩薩 ○印二風・二空・頭柱へ圓に合せ、餘の六は散し舒べて旋轉せよ。 ○眞言に曰く 唵、增衰備庚多、莎呬

○種子 𑖀 ○三摩耶形 日輪

○月光菩薩 ○印右手の空・風・指相捻して持花の勢の如くし、餘の三指を立て ○眞言に曰く 曩莫

三曼多沒馱南、戰擊羅鉢羅婆野縛、莎呬。 ○種子 𑖀 ○三摩耶形 月輪

七佛藥師眞言に曰く 𑖀姪他具謎具醫尼謎貳𑖀未底未底馱頰但他揭多三摩地頰提瑟

耻帝頰帝未帝波例波跋輸但𑖀薩婆波跋那世也勃唎勃圖𑖀謎𑖀謎矩謎佛鐸器但羅鉢里輸

但𑖀曇謎尼曇謎會謎嚕謎爐尸竭𑖀薩婆哥羅蜜栗覩庚婆喇𑖀勃提蘇勃唎佛陀頰提瑟佉泥

娜曷略又視謎薩婆提婆三謎頰三謎三曼捺奴の漢𑖀覩謎薩婆佛隨菩提薩埵苦謎苦謎鉢囉

苦曼覩謎薩婆伊底隔婆達婆薩婆毗何大也薩婆薩埵難者肺闍泥肺闍泥去肺闍也謎薩婆阿

舍薛琉璃也鉢囉底婆細薩婆波跋差楊羯麗莎訶。

○七佛名號 無勝淨土善名稱吉祥王如來 妙寶淨土寶月智嚴光音自在王如來

圓滿香積淨土金色寶光妙行成就如來 無憂淨土無量最勝吉祥如來 法幢淨土法

海雷音如來 善住法海淨土法海勝惠遊戲神通如來 淨琉璃淨土藥師琉璃光如來。

○十二神將呪前の大隨羅尼を用ふ。印は右手拳に作り、人指を屈して鈎の如くせよ。

○又の眞言印は前と同じ 唵俱毗羅、莎呬

宮毗羅大將 跋折羅大將 迷企羅大將 安底羅大將 安濕羅大將 珊底羅

大將 因陀羅大將 婆異羅大將 摩呼羅大將 眞達羅大將 招度羅大將

鼻羯羅大將

○阿彌陀 ○道場觀 面前に於て安樂世界を觀せよ、瑠璃を以て地となす、中に八功德水あり、其の海中に於て衆字を觀ぜよ、大光明を放ち、色紅頗梨の如し、遍ねく十方世界を照すに、其の中の有情此の光に遇はば悉く罪障消滅せざることなし、是の字變じて微妙の開敷紅蓮花となる、獨胎を莖と爲す、即ち其の華變じて無量壽如來と成

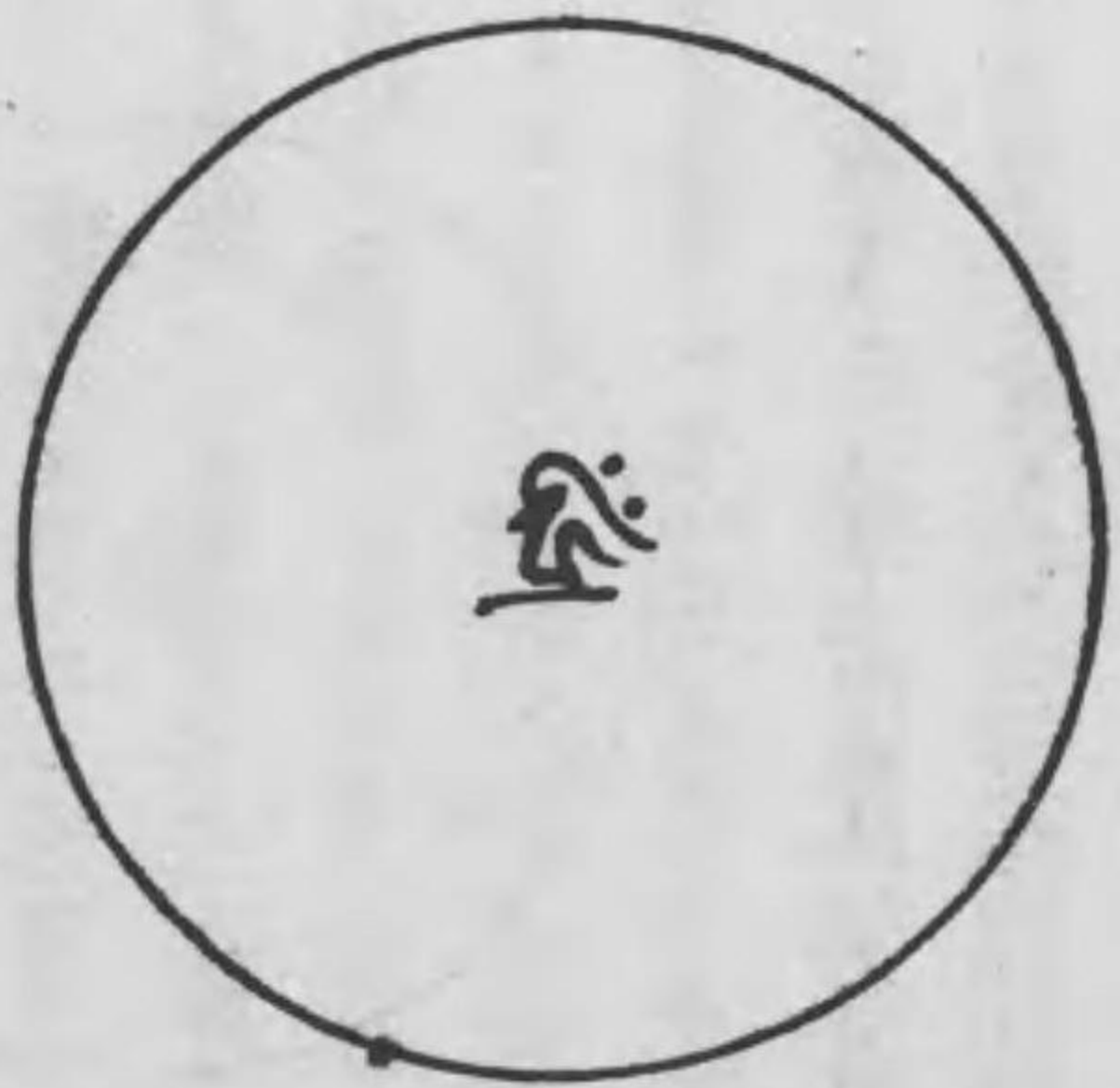
る、寶蓮花上に在し、滿月輪中に處したまふ、首に五智の寶冠を着し、奢摩他の印に住す、身は紅頗梨色にして結跏趺坐す、頂上より無量の光明を放ちて恒沙の世界を照したまふ、乃至觀音・勢至等の諸大菩薩、及び蓮花部の聖衆前後に圍繞せり云云。

正念誦の間、當さに觀念すべし、無量壽佛の相好圓滿にして壇中に在りと。亦た想へ、本尊心月輪上に祕密眞言あり、我が心月輪の上に亦た祕密眞言あり、本尊の念誦は本尊の御口より出で、我が頂より入り、我が心月輪上に烈す。我が念誦の時、我が口より出で本尊の御足の下より入り、本尊の心月輪上に烈す、是の如く想ひ續けて絶さず、一一の字より大光明を放つ、是の如く陀羅尼を念誦すること一遍、一珠、念誦の數畢て、珠を蓮花合掌に入れ、誓願すること三度し頂戴して筥に納めよ。



○次に定印を結べ。則ち觀ぜよ、身中の菩提心、皎潔圓明なること猶ほし滿月の如し、

二切の下。一本に物の字あり。



身中の菩提心猶し満月の如し月輪上に於て純哩二字を想へ字より無量の光明を流出し、一一の光明に於て極樂世界を成ず。

復た思惟を作さく、菩提心の體一切を離れ、蘊界處を離れ、及び能取所取を離れ、法無我の故に一相平等、心本不生、自性空の故に、即ち圓滿清淨なり、月輪の上に於て、純哩二字を想へ、字より無量の光明を流出し、一一の光明道に於て觀するに極樂世界を成じ聖衆圍繞す。無量

壽佛は、廣くは無量壽經の所説の如し。

・ 紇利 四字合して眞言と成る。

・ 賀字 一切法因不可得の義なり。

・ 羅字 一切法離塵の義なり。塵とは五塵亦た能取所取二種の執着に名く。

・ 伊字 自在不可得の義なり。

・ 二點 惡字の義、惡字は名けて涅槃となす、諸法本不生を覺悟するに由るが故

に、二種の執着皆な遠離し、法界清淨を證す、紇哩字を亦た云く慙の義、若し慙愧を具すれば一切の不善をなさず、即ち是れ一切無漏の善法なり、是の故に蓮花部を亦た法部と名く、此の字の加持に由て、極樂世界に於て水鳥樹林みな法音を演ぶること廣くは經所説の如し、若し人持せば此の一字の眞言能く一切の災禍疾病を除き、命終の後、當さに安樂國土の上品上生に生ずべし。

○根本陀羅尼印。外縛して中指蓮形に作れ、師説に定印と。 曩謨引羅怛曇二夜引耶、一娜莫阿去引哩野二合 引婆去 耶、二怛他引去 藥路引夜、阿囉曷二帝、三去藐三去沒駄耶、三怛儻也二他、四唵阿蜜唎合 帝、五阿蜜唎二合 妬納婆二吠、微閉の阿蜜唎二多、三去婆上吠上に准、七阿蜜唎二多藥陸、八阿蜜唎合 多悉第、九阿蜜唎二合 多帝際反、十阿蜜唎二多尾訖磧二合下羅簡、十一阿蜜唎二多尾訖磧二合 引准、多識引加寧引、十二阿蜜唎二多識譏曩、吉引底丁以迦餘、十三阿蜜唎二多囉上擊那必 合餘十四薩嚩引羅他、二娑引去 馱寧十五薩嚩羯磨、訖禮二合 捨乞灑二孕迦嚩、引娑嚩二合 賀十六 引○同じく心眞言 唵、引阿蜜唎二多、帝際賀羅吽。 ○心中眞言に曰く 阿蜜唎多吽 娑婆賀。

○決定往生淨土眞言先づ本師阿彌陀佛の尊號を念じて後、眞言を念ぜよ。 那謨三曼多跋陁南、唵、阿蜜唎覩、特婆吠娑婆賀。

天台の説に云く、我は三世諸佛金剛不壞の身胎、(其は摩訶般若畢竟空の理なり金剛界イ  
は如如の義、即ち第一義僧なり兩部已上一體三寶の義なり。

儀軌に曰く 此の無量壽如來阿羅尼を繞かに誦すること一遍すれば則ち身中の十惡  
四重五無間の罪を滅し、一切の業障悉くみな消滅す、若し苾芻・苾芻尼、根本罪を  
犯せば、誦すること七遍し已れば即時に還た戒品清淨なるを得、誦すること一萬遍を  
滿すれば、菩提心を癡妄せざる三摩地を獲得し、菩提心顯現すれば身中皎潔圓明なる  
こと猶し淨月輪の如し。命終に臨まん時は無量壽如來を見上つり、無量俱胝の菩薩衆  
圍繞し來迎して行者を安慰したまへば、則ち極樂世界の上品上生に生れ、菩薩位を證  
せん。

○梵號 阿利也彌多婆野薩但他誡多入 ○密號 清淨金剛 ○又た大悲金剛 ○又た  
壽命金剛

○觀音 蓮花印 ○眞言 唵阿盧引力迦半香娑縛賀 ○種子 唵 ○三摩耶形 蓮花

○勢至 未敷蓮花印 ○眞言 唵髻々索入莎訶 ○種子 吽 ○三摩耶形 未開敷蓮  
花

〇〇釋迦

(二)境中 已下道  
攝觀なり。  
(二)境中に高妙の座あり、四方均等なり、其の上に衆字あり、變じて八葉の蓮花と成る、  
花臺上に列字あり、淨月輪と成る、月輪中に衆字あり、寶鉢と成る、寶鉢變じて釋迦  
如來と成る、身色黄金にして三十二相八十種好を具足す、教法を流布し衆生を化度せ  
んが爲めに説法の相に住す、及び普賢・文殊・觀音・彌勒等の諸大菩薩、乃至舍利弗・須  
菩提等の諸の賢聖衆、前後に恭敬し圍繞せり。云云

○根本印 定・慧・各の五輪を舒べ、空・火・相捻し、左は心  
前に仰け、右は左の上を覆ひ相着くる勿れ。

○又たの鉢印 或は袈裟の  
角を取る。 眞言に曰く 曩莫三曼多沒駄喃、娑薩囉吃哩捨、涅槃娜曩  
薩囉達摩、囉無舒始多、鉢羅二鉢多誡誡曩、三麼、三麼、娑縛合賀。

○梵號 釋迦牟尼 ○密號 寂靜金剛

〇〇法花

儀軌に云く、但し四肘の曼荼羅を建て、乃至十二肘量、前の所説の如し、若しは廣さ

(三)法華 法花  
を誦する時、先  
づ智拳印にて十  
佛土中唯一乘法  
の二句を誦し、後  
に之を讀むは一箇  
の習なり。

(二)境中 已下道  
攝觀なり。

十二肘、高厚は十二指量なるべし、東北の隅に於て稍、墊下せしめよ、是れ大吉祥速疾成就壇なり、既に成じ已らば壇の中央に一小坑を穿ち五種寶金・銀・眞珠・珊瑚・琥珀、五藥沙賀香羅、沙梨擬哩、羯羅摩、二甘勿哩賀底。若し此の藥なくんば大唐所出の靈藥を以てせよ、赤箭・人參・伏苓・石昌蒲・天門冬等之に代ふ。、五香沈香・檀香・丁香・鬱金・龍腦香等、五穀稻穀・大麥・小麥・粟豆・白芥子等を置け。是の如きの五寶、藥等は各の少し許りを取り、小瓶子を以て盛れ、或は小瓷に之を一處に合せ盛り、地天の眞言を以て加持すること一百八遍せよ。眞言に曰く、曩莫三去滿多沒駄引南引畢里二合體可以微曳二合發二合賀引

又た如來慈護の眞言を以て加持すること一百八遍せよ。眞言に曰く、唵沒駄每引怛哩引二合、囉囉囉乞叉二合。又た無能勝明王の眞言を以て加持すること一百八遍せよ。眞言に曰く、那莫三去滿多沒駄引南引唵戶魯戶魯戰擊引理摩引路儼研以婆囉二合賀引

既に加持し已て壇中の坑内に安置し、壇築を平ならしむ、隨時を以て香花・飲食並に二闕伽を以て供養に用ふ、修行者面を東方に向け長跪し、右手を以て香藥を置く處を按し、先づ地天の偈を誦すること三遍或は十遍す。偈に曰く

汝天親護者 於諸佛導師 修行殊勝行  
淨地波羅蜜 如破魔軍衆 釋師子救世

（一）盡 一本に畫に作る。

我亦降伏魔 我盡曼荼羅

又た云く。其の壇上に天蓋を張り設け、四面に幡廿四口を懸く。又た四角に於て各の幢幡を立て、四寶瓶の底黒からざる者を安し、香水を滿ち盛り、瓶口内に於て種種の時花の枝條を雜へ挿し、壇の四門に於て兩邊に各の二の闕伽器を置き香を滿ち盛り、水中に鬱金を着れ、諸の時花を泛べて極めて香潔ならしめよ。又た四門に於て四の香爐を置き五味香を燒いて以て供養に用ふ。又た四隅に於て各の銅の燈臺を置き、蘇油を明となし、四角の外に於て各の佉陀木概を釘て、如し此の木なくんば銅を鑄て概を作り之に代ふるも亦た得と文り。

○五相成身觀 次に三摩地の印を結ぶべし、二手金剛縛して跏趺上に仰け、二頭指を以て中節を屈して相跏へ、甲相背け、二大指頭を以て頭指の甲上に於て相柱へ、閉目澄心して通達無礙心眞言七遍を誦す。唵啞答鉢羅二底吠無閉の反對迦嚩引銘

眞言を誦し已れば則ち靜慮專注して自心を尋求せよ、今我れ此心青とやせん、黃とやせん、赤とやせん、白とやせん、方とやせん圓とやせん、長とやせん短とやせん、是れ過去とやせん是れ未來とやせん、復た現世とやせん、良久しく推求して此の心を



(二)提の下、一本に心の字あり。

知るに、了に不可得なれば則ち能く空觀に通達し、我法二執も亦た不可得なれば則ち能く人空智に悟入し、法空智は則ち此の無所得の心に於て圓明を觀するに淨にして塵翳なく、秋の満月の如く身に炳現し心中に仰けり、此れは則ち是れ本源清淨大圓鏡智なり、此の觀を作し已れば則ち善(二)提真言七遍を誦す。真言に曰く、唵冒引地唧多母怛播二合娜夜引銘。

真言を誦し已て當さに圓明満月の面上に於て五鈷金剛智杵を觀じ、漸く引いて遍ねく舒ぶるに法界に普周く、淨光明を以て一切有情界を照觸するに、客塵煩惱自他清淨にして平等同一體性なり、是の觀を作し已て真言を誦す、曰く、唵底瑟怛(二)縛日羅(二)合良久く誦觀して復た漸く其の金剛杵を收斂し、己身の量の如くせよ、真言を誦して曰く、唵囉日羅(二)合怛麼(二)合句憾。

復た觀せよ、此の金剛杵轉じて普賢大菩薩の身と成る、光明皎潔にして猶し月殿の如し、五佛の冠を戴けり、天衣瓔珞をもて而も自ら莊嚴す、身頂背月輪あて、白蓮花王を以て其の座と爲す、右手に菩提心五拈金剛杵を持し心上に按し、左手に般若波羅蜜金剛鈴を持し用て勝に按し、一切の相好具足圓滿す、是の觀を作し已て復た自ら思惟す

らく、一切の有情如來藏性、普賢菩薩の身一切に遍す、故に我れ普賢及び諸の有情と無二無別なり、審かに諦觀し已て真言を誦すること七遍せよ。唵、三去滿多跋捺囉(二)合憾。

真言を誦し已て則ち普賢菩薩三昧耶の印を結べ、二手外に相又へ合して拳となし、二中指を合せ堅てよ、即ち成ず、印を以て心を印し一遍を誦し、次に頰に安き、次に喉頂に及ぼし各の一遍を誦せよ。真言に曰く、唵三去麼(二)合野娑怛麼(二)合

(二)孔の下一本に字の一字あり。  
(三)宛 充の字か

○道場觀 觀想せよ、妙高山の上に百寶莊嚴の大蓮花臺あり、花臺上に高妙の塔婆あり、七寶の所成なり、其の中に師子座あり、座上に龕字あり、變じて八葉の蓮花となる、其の上に宛字あり、淨月輪となる、月輪の中に禿字あり、變じて釋迦如來となる、光明赫奕として說法の相に住せり、傍に(三)宛あり、多寶世尊と成る、久遠の願力に依て並座し共に妙法蓮花經を演説したまふ、八葉の上、右に旋りて普賢・文殊・觀音・彌勒・藥王・妙音・常精進・無盡意等の諸大菩薩あり、又た舍利弗・目連・迦葉・須菩提等の大聲聞、及び内外八供養四攝の薩埵・四大天王、外金剛部の護法天等、前後に圍繞し、雲海を供養し虚空に(三)宛滿す。

○又の様儀軌を 寶山印を結べ二手内に又へ極めて深からしめ、 眞言に曰く 三婀左攝呼引

此の印を結ぶに加持力に由て即ち此の寶山、其の壇中に於て轉じて鷲峰山となり頗梨を地となし寶樹行烈せり、其の上に八葉の蓮花あり、中心に七寶莊嚴の高妙寶塔あり、無數の幢幡萬億の寶鈴をもて而も嚴飾し、四面皆な旃檀の香を出す、寶塔内に二佛の種子左あり、各の變じて三昧耶形となる、三昧耶形變じて多寶・釋迦と成る、久遠の願力に依て花臺に並座す、八葉の上に彌勒・文殊等の八大菩薩、中院の四隅に迦葉・須菩提等の四大聲聞あり、第二院に四攝四供並に滿月等の八大菩薩、第三院に四大天王・金剛天等あり、乃至分身の如來、寶樹下に於て座し、塵數の聖衆八方に周遍せり云云。  
○釋迦根本印定・惠・各の五輪を舒べ、空・火・を捻して左を ○或は鉢印又た口傳あり、之を尋ぬべし。 ○眞言に曰く 曩莫三曼多沒馱南、婆、薩嚩吃里捨、涅槃娜曩、薩嚩達摩、嚩始多、鉢羅鉢多誡曩、三摩、三摩、莎呬。

○多寶印定印、又た口傳あり ○眞言に曰く 曩莫薩嚩怛他引嚩帝嚩、尾涅槃目契弊、薩嚩他阿阿暗惡。

○又の眞言之を尋ぬべし無量壽命決定如來眞言に曰く定印又た口傳あり曩莫引阿跋哩加跢引欲、枳釁二合曩

尾願室者二合也、囉引逝引捺羅二合也怛他引嚩跢引也、唵引薩嚩僧去塞迦二合囉、跋哩穠詩律、達摩鼻帝、麼賀引曩也跋哩嚩引囉、引娑嚩二合賀引

此の眞言七遍を誦せば、能く壽命を延し、能く決定して天壽惡業を滅し、身心輕安なることを獲得し、諸の昏沈及び懈怠を離れ、此の妙法蓮花經を受持すれば速かに成就するを得。

○法華肝心眞言一廻を誦せば四十萬部の法華經に充る、八葉印を結べ。 曩莫三曼多勃馱喃歸命普來なり阿開阿示暗悟惡、入薩嚩勃馱一切佛、枳釁二合曩、知二合娑乞菟二合吽耶見、誡誡曩、娑嚩虛空性囉乞叉囉薩摩、正法浮陀哩迦白蓮花蘇馱覽經惹入吽迴、鏡住護歡喜嚩日羅堅囉乞叉給擁護、無相、娑婆訶決定なり

○字輪觀

普賢菩薩隨羅尼に曰く 怛爾也二合他婀上難上囉上擊上跋上底上穠上帝三難上擊上引上穠上呼之帝難擊引穠多上囉上難上擊矩捨梨六難擊素馱引哩七素馱引哩素馱引囉鉢底九母馱鉢始也二囉十薩囉馱囉泥十一阿去囉多囉十二薩嚩婆灑穠十三素阿囉多囉十四僧去伽去跋哩引乞史二帝十五僧去伽去涅逸具灑寧十六薩達呼舌之變音素跋哩引乞史二帝十七婀上契十八僧去



の印を結び普賢の行を修し則ち觀せよ、自身の中に圓明月輪あり、猶し秋月の澄淨なるが如し、仰いで心中に在り、則ち普賢陀羅尼を誦し、即ち此の陀羅尼の文字右に旋り、心月輪の上に布烈し、一一の字みな金色なり、又た一一の字の中にみな梵字あり、若し能く此の實相縁生の法門を悟れば、則ち無量三摩地無邊般若波羅蜜を證得す云云。讀經の間觀せよ、舌端に八葉の蓮花あり、花上に佛あり、結跏趺坐して猶し入定の相の如し、妙法蓮花經一一の文字、佛口より生じみな金色にして光明を具し、虚空に遍照し

伽跋誡帝十九底哩合二邊跢吠合二僧去伽去嘴里野合二鉢羅合二沒合二呼合二帝廿一薩縛僧去伽去合二三去慶合二底訖囉合二帝廿三薩縛達慶廿四素跋哩乞史合二帝廿五薩縛薩担縛合二多合二廿六矯引設里野合二帝廿七僧合二賀尾訖里合二賦上合二帝廿八阿弩合二帝廿九橫底賴橫跢引里娑囉引合二賀。又た藥王等の五種陀羅尼之を加へ誦すべし、觀想せよ我れ既に普賢菩薩の大印身と成る、即ち普賢

て一一の文字みな變じて佛身と成り、虚空に遍す云云是の觀を作す時、漸く身心輕安にして即ち定中に了了に、一切の佛の甚深の妙法を説きたまふを見ることを得、聞くことを得已て思惟すれば則ち法身真如觀法に入り、一縁一相平等なること猶し虚空の如し云云。

○讚に曰く四智讚を用ふ。又た金剛薩讚を用ふ。經を讀誦せんと欲せば、先づ密印を結び密言を誦し子細口傳にあり。次に如來壽量品を誦す、或は全一部云云品中の妙義を思惟するに、如來常に靈鷲山にありて妙法を演説し衆生を化度し、次に印を當て無量壽命決定如來の眞言七遍を誦せよと眞言は常文りの如し。

儀軌に云く 如來方廣大乘經に説く、一切衆生の身中にみな佛性ありて如來藏を具し、一切衆生無非無上菩提の法器なり、若し此の法の如く成就せんと欲せば、應當に先づ四縁を具すべし。一には善知識に親近す、即ち是れ灌頂阿闍梨なり。二には正法を聽聞すとは、即ち是れ妙法蓮花經王。三には如理作意とは、即ち是れ瑜伽觀智。四には法隨法行とは謂く奢摩多毗鉢舍那を修すれば、則ち堪任して無上菩提を證すと文り。又た云く、若し行者、六根清淨にして六千の功德を満足することを求め、法花三昧を

成就し、現世に初地に入り、決定して證無上菩提を求めんには、一七日、三七日乃至七七日なるべし、或は三箇月、儀軌に依て其の力分に隨ふべしと文リ。

勸請 歸命摩訶毘盧舍那佛 四方四智四波羅蜜 十六八供四攝智 教令輪者不動尊 大恩教主釋迦尊 證明法華多寶佛 兩部界會諸如來 外金剛部威德天

不越本誓三昧耶 降臨壇場受妙供 護持云云

(二)第一云云此に出す二十八品の頌は伴僧なき時、讀經の代りに之を翻して可なり。

(一)第一序品 方便品 歸命緣起初序品 光中能顯因果事 福德智慧至究竟 一乘實相勝義門 歸命善巧方便品 甚深難測如來智 言語道斷離心境 是故方便說三乘

第二譬喻品 信解品 歸命火宅譬喻品 舍利先授菩提記 有情不覺三界苦 佛

以三車誘令出 歸命厭悔信解品 於自劣乘而愧耻 深生渴仰難遭遇 我等皆

獲無上寶

第三藥草喻品 授記品 歸命療疾藥草品 生盲丈夫開慧眼 獲被智光如日輪 於

無上乘得善巧 歸命最初授記品 四大聲聞同記別 各隨奉事諸世尊 當來成

證菩提果 歸命化城巧喻品 佛愍勸說昔因緣 爲推止息於化城 至大涅槃爲

究竟

第四五百弟子授記品 授學・無學人記品 見寶品 歸命五百弟子品 大聲聞僧咸授決 則悟身

中如來藏 無價寶珠今覺知 歸命授學無學品 佛記阿難・羅睺羅 則表法王無

偏黨 漸攝定性及不定 歸命傳經法師品 若有未來諸有情 持此法華一句偈

佛皆與彼而授記 歸命多寶佛塔品 示現淨土集諸佛 二佛同座說是經

若暫持者爲甚難

第五提婆達多品 勸持品 安樂行品 從地踊出品 歸命提婆達多品 檀主侍仙經千歲 提婆達多授佛記

龍女得成無上覺 歸命勸持經典品 姨母耶輸蒙記別 諸大菩薩及聲聞 咸

願未法勸持此 歸命修行安樂品 說經先住安樂行 現世獲得殊勝報 於佛善

提不退轉 歸命從地踊出品 八恒菩薩願持經 如來密意而不許 爲顯踊出善

薩故

第六如來壽量品 分別功德品 隨喜功德品 法師功德品 歸命如來壽量品 佛已成道無邊劫 爲治狂子現涅槃

常住靈山而不滅 歸命分別功德品 無數微塵菩薩衆 聞佛宣說壽無量 各

起地位證菩提 歸命隨喜功德品 按量世出世間福 若聞此經一句偈 超彼速

證無上道 歸命法師功德品 若能授持此經典 於現父母所生身 獲得神通淨六根

第七常不輕菩薩品 如來神力品 妙音菩薩品 歸命不輕菩薩品 往昔難行苦行業 得聞此經增壽

命 度脫無量無邊衆 歸命如來神力品 佛現廣長妙舌相 猶預不信令淨信

見此瑞相獲菩提 歸命藥王本事品 爲求法故並三昧 燒身供養淨明佛 難

遇經王表殷重 歸命妙音菩薩品 從彼佛利來此土 而聽妙法蓮華經 既蒙法

益還本國

第八觀世音菩薩普門品 施羅尼品 普賢菩薩本事品 歸命觀音普門品 說是菩薩悲解脱 悉皆

除遣諸災難 顯現常住如幻定 歸命陀羅尼妙品 二菩薩及二天王 並羅刹女

說真言 爲護持經法師故 歸命妙莊嚴王品 藥王藥上本因緣 由斯二士善知

識 而不退失菩提道 歸命普賢勸發品 若有於此蓮花經 於三七日專持習

普賢爲現淨法身 歸命最後屬累品 如來付屬諸菩薩 當於未來末法時 流

通宣說無怪惜

〇〇彌勒

〇〇須彌山云云 道場觀なり。

〇〇須彌山の頂に龕字あり、八葉の蓮華となる、蓮華上に梵字あり、變じて七寶の宮殿となる、宮殿の中に大圓明の月輪あり、三胎を以て界道となし、率堵婆を以て分齊となす、其の中央の圓明の中に梵字或はあり、變じて率堵婆或はとなる、率堵婆變じて慈氏菩薩となる、身白肉色にして大光明を放ち、首に五佛の寶冠を戴き大慈三昧に住す、左手に蓮華を持し、蓮華上に法界塔印を置く、右手は説法の印に作り結跏趺坐す、八圓明の中に四波羅蜜並に四供養の菩薩、各の本方本位に住す、下右邊に降三世左邊に不動、上に六箇の首陀會童子あり、乃至曼荼羅の聖衆恭敬し圍繞せり。

〇根本印合掌して二風を扇し甲を合せ、二空を以て其の上に覆せよ。 曩莫三曼多沒駄喃、唵、每怛𩇑野、阿、莎奇。

〇梵號 阿利也每怛𩇑野 〇密號 迅速金剛

〇慈氏菩薩法身印軌に 地・水・二輪を以て相覆へ掌中に扇し入れ、二火輪を開いて二風輪を扇て相背け、即ち是れ慈氏菩薩法身印なり。 二空輪を扇して雙べて火の中文を押す、火開くこと一寸半許り、風輪來去せよ、

〇慈氏菩薩根本真言に曰く 納結引喇怛曩、二怛羅合夜引耶納莫娜哩合也、𩇑盧引吉底涅𩇑合二羅上引耶、二母引地薩怛𩇑合耶、二奔賀薩怛𩇑合耶、莽賀迦上嚕嚩迦上耶五怛涅他六𩇑合𩇑

二妹怛唎、二妹怛唎、合妹怛羅、莽曩洗、八妹怛羅、合二妹婆上、九妹怛嚕、合二納婆上、十莽賀、糝弄也、薩嚴、合賀。

○又た云く 又た塔を轉變して慈氏本尊の身となる、即ち此の尊の身、即ち是れ愈認者の身、是の故に三密轉じて三身となる、故に心を以て心に置き、心を以て心を觀じ實の如く自心を知る、即ち是れ母地心初發心の時、便ち正覺を成すと文り。

○又た云く 若し現世に色身を捨てずして速かに慈氏宮同會の說法を證し、大悉地を得んと欲せば、必ず此の愈認に依て念誦せば必ず無上悉地を獲んと文り。

○又た云く 毎日三昧念誦作法觀行等の事、三時とは後夜より齊時に至り、午時より未の時に至り、初夜より三更に至り、常に作し是の如く間斷することを得ずんば何れの障か生せんと文り。

○又た云く 此の法の不思議力、如意寶の如し、如意寶所言なしと雖も、所願の處に隨て必ず願に達せず、此の如來の法印亦復た是の如し、無言無相と雖も一切の法を作すに必ず成就するを得ん。此れは是れ法力不思議なるが故なりと文り。

○又た云く 慈氏菩薩とは謂く佛の四無量心、今慈を以て稱の首となす、此の慈、如

來種姓の中より生じて、能く一切世間をして佛家を斷せざらしむる故に慈氏と曰ふ。

○隨求

○須彌盧頂 已下道場觀。

○須彌盧頂に金剛峰樓閣あり、樓閣の中に大曼荼羅壇あり、其の上に師子座あり、座上に毘字あり、八葉の蓮花となる、蓮花上に刹字あり、淨月輪となる、月輪の中に卐字あり、變じて梵筭或は五帖となる、梵筭變じて隨求菩薩となる、身色黄金にして八臂を具足す、右の第一手に五帖或は五帖を持し、次の手に鋤鉞或は五帖を持し、次の手に寶劍或は五帖を持し、次の手に鉞斧鉤或は五帖を持し、左の第一手に蓮花を持す、上に金剛光炎あり、次の手に梵筭或は五帖を持し、次の手に寶幢或は五帖を持し、次の手に索或は五帖を持す、大光明を放ちて十方世界を照すに斯の光に遇ふ者は解脱を得ることなし、乃至八十俱胝の聖衆、恭敬し圍繞せり。

○根本印 左手を以て仰けて心に當て、五指を展べ、右手を以て、左手の上に覆せ相合せ平かならしむ、隨心眞言に曰く 唵跋羅跋羅、三跋羅三跋羅、印捺哩也、尾成多頼、吽引吽、魯魯左餘、娑囉合賀

○根本印第一 二手内に相双へ二中指合せ堅て、二頭指を中指の後に於て微しく屈し鉤の如くし、二小指二大指合せ堅て微しく屈せよ即ち成ず、梵に云く、縛曰羅三唐に五卍金剛杵といふ。 縛曰羅三唐 莎訶

○根本印等 朱書に云く、或る説に云く、八印とは大隨求菩薩八臂所持物の標なり、第一印を以て根本とす、伴僧陀羅尼を誦す云々と、本に夜の字あり。

○一切如來心真言印第二二手、左を覆せ右を仰けて背相ひ着け十指互に相背け、鈎し堅て斧形の如くす、即ち成ず、梵に跋羅成と云ひ唐に鉞斧といふ 唵跋羅成莎哥、

○一切如來心印真言第三二手内に相覆へ、二中指頭相注へ風して圓からしむ、梵、播捨莎哥

○一切如來金剛被甲真言印第四二手合掌して二頭指中節を屈し平ならしめ、頭指を屈め跽へ、即ち成ず、梵に渴誠と云ひ唐に鉞といふ 唵、渴誠莎哥

○一切如來灌頂真言印第五二手外に相覆へ、二無名指合せ堅て、二小指を堅て交へ、即ち成ず、梵に斫羯羅囉と云ひ、唐に輪といふ 唵、斫羯羅囉莎哥

○一切如來結界真言印第六二大指二小指の甲の上を捻し、餘指を堅て合せ、三戟刃形の如くせよ即ち成ず、梵に底哩戎囉と云ひ、唐に三帖翠といふ 唵底哩戎囉莎哥。

○一切如來中心真言印第七二手外に相覆へ、二頭指相注へ、實形の如くし二大指を並べ、即ち成ず、梵に振多摩麗捉と云ひ、唐に賣と云ふ 唵振多摩麗捉莎哥。

○一切如來隨心真言印第八左手を以て仰て當心に於て五指を展べ、右手を以て左手の上に覆せ相合せ平ならしめよ、即ち成ず、梵に摩訶尾備也、馱羅尼と云ひ、唐に大明惣持といふ 唵、摩訶尾備也馱羅尼莎哥。

○梵號 摩訶鉢羅底娑洛 ○密號 與願金剛

隨求陀羅尼經上卷に云く 若し纒かに此の陀羅尼を聞かば、所有の一切の罪障悉くみな消滅す、若し能く讀誦し受持して心に在かば、當さに知るべし是の人即ち是れ金剛

堅固の身、火も焼く能はず、刀も害する能はず、毒も中る能はず、大梵に云何んが火も焼くこと能はずと知るを得る、迦毗羅大城に於て羅睺童子母胎にある時、その母釋種の女耶輸陁囉火坑に擲げらる、是に於て羅睺羅母胎中に在て此の陀羅尼を憶念するに、其の火坑即ち變じて清冷の蓮花池と成る、何を以ての故に、此の陀羅尼は是れ一切如來加持力の故に、大梵當さに知るべし是の因縁をもて火も焼く能はずと文り。

又た云く、大梵此の大隨求陀羅尼、法に依て書寫し臂上に繋げ及び頸下に在くに、當さに知るべし是の人一切如來の加持する所、當さに知るべし是の人、一切如來藏身に等同なり、當さに知るべし是の人能く地獄趣を淨む、大梵云何んが知ることを得る、曾し苾芻あり心淨信を壞し、如來の制戒に違ふ所ありて、不與取の現前僧物、僧祇衆物四分僧物を犯す時、入れ已て用ふる後、重病に遇ひ大苦惱を受くる時、彼の苾芻救濟する者なし、大叫聲を作す、則ち其の處に於て一婆羅門優婆塞あり、其の叫聲を聞いて即ち彼の病める苾芻の所に往詣し、大悲愍を起し、即ちために此の隨求大明王陀羅尼を書して頸下に繋ぐるに苦惱みな息む、便即ち命終して無間の獄に生ず、其の苾芻の屍殞 塔中に在り、其の陀羅尼を身上に帶び、其の苾芻纒かに地獄に入るに因て

諸の受罪の者所有の苦痛悉く息停することを得、咸くみな安樂なり、阿鼻地獄の所有の猛火、此の陀羅尼の威徳力に由るが故に悉くみな消滅す、是の時焰魔の卒此の事を見已て甚だ大いに驚恠し、具さに以上の事を焰魔王に白して、伽陁を説いて曰く  
大王今當さに知るべし 此の事甚だ奇特なり 大危険の處に於て 苦惱みな休息し

衆生の諸の惡業 猛火聚消滅し 鋸解自ら停止し 利刀割く能はず

刀樹及び劍林 屠割等の諸苦 鑊湯餘の地獄の 苦惱悉く皆除こる、

焰魔是れ法王 法を以て有罪を治す 此の因縁おぼ小げに非ず 我がために疑惑を

除け

時に彼の焰魔王 無悲の獄卒より 此の如くの事を聞き已て 而も是の如くの

言を作さく

此の事甚だ奇特なり 皆業の所感に由る 汝満足城に往いて 當さに何事かあ

るやを觀すべし

獄卒教を受け已て 夜分を見る時に於て 満足城の南に至て 彼の苾芻の塔を

見

乃ち屍上を見るに 此の大明王 隨求陀羅尼を帶ぶ 而も大光明を放ちて

其の光火聚の如し 天龍及び藥叉 八部衆圍繞し 恭敬して而も供養す

時に彼の焰魔の卒 號して隨求塔と爲すと文り。

爾の時、焰魔卒還て王所に至り、具さに以上の事を焰魔王に白す、其の苾芻此の陀羅尼の威力を承けて罪障消滅し、三十三天に生ずることを得たり、因て此の天を號して  
先身隨求天子と爲すと文り。

同經下卷に云く大護陀羅尼の功能なり 若し人等、命盡きなんと欲するに、此の眞言を誦せば復た延命増壽を得、久々に命存し常に安樂大念持を獲、若し金剛杵を以て纒かに念誦し加持すれば、或は非命の患大疾ある者も解脱を得、一切の病疾みな除滅することを得、長患の病者此の眞言を誦し袈裟を加持し、角をもて彼の病人を拂へば、即便ち除差せんと文り。

國譯七卷鈔一終



# 國譯七卷鈔二

○佛眼 ○八大菩薩 ○八大明王 ○一字金輪 ○尊勝 ○八大佛頂  
 ○佛眼

二七寶 已下道  
 揚觀。

二七寶の宮殿の中に大曼荼羅壇あり、壇中に寶字あり、三層八葉の蓮花と成る、花臺に列字あり、淨月輪と成る、月輪の中に卍字又は卐又は卐あり、變じて佛頂眼又は佛眼なる、變じて佛眼佛母となる、大白蓮花に住す、身は白月暉の如く兩目微咲し、二手鬚に住せしめて奢摩他に入るが如し、一切の支分より凝誑沙佛ゴウカシヤを出生し、一一の佛みな禮敬す、本所出生の當前蓮葉の上に一切佛頂輪王タシヤ在す、定印を結び八輻の金輪を持す、次に右に旋て七曜使者、第二花院頂輪王の前に金剛薩埵あり、次第に右に旋て八大菩薩、第三院右に旋て八大明王あり、輪壇の四隅内の四供養、外院の四方四攝、四隅外の四供養等、みな師子冠を戴き各の本標幟を執る、是の如く了了分明に觀じ已れ。

○根本印 二手虚心合掌して、二頭指屈して二中指の上節に附け、眼咲形の如くし、二空各の忍・願・中節の文を 總せよ、亦た眼咲形の如くし、二小指復た微しく開いて亦た眼咲形の如くせよ、是を根本大印と名く。

二七寶 已下道  
 揚觀。  
 今は省略す。

○眞言に曰く 二七寶引婆誑 嚩唵、臨瑟泥灑、唵嚩嚩塞怖嚩、入嚩囉底瑟吒、悉駄路者寧、薩嚩賴他、薩引駄囉曳、娑嚩賀引

○心眞言に曰く 唵沒駄路左囉娑嚩賀。○梵號 勃駄嚩捨拏 ○密號 殊勝金剛 瑜祇經に云く 又た説く、一切佛眼大金剛吉祥一切母心、一切法を出生し、一切の明を成就し、能く一切の願を滿し、一切の不吉祥を除き、一切の福を生じ、一切の罪を滅して、一切有情をして見て皆な歡喜せしむ。

又た云く 若し金剛生金剛子等有りて常に此の明を持すれば、身金剛山の如く、金剛杵の如く、金剛頂峰の如く、金剛界如來の如くならんと文り。

又た云く 佛の眞身の如く、佛の擧念の如く、所作の事業みな一切佛に同じく、所出の言は便ち眞言と成り、支節を擧動するに大印契と成り、目の所視の處便ち大金剛界と成り、身所觸の處便ち大印と成る、若し常に持せば、當さに是の如きの金剛の用を得べし、若しために大阿闍梨密法印等を教授せんと欲せば、當さに須らく先づ此の明を誦すること一千遍なるべし、一切の諸佛菩薩金剛薩埵みな悉く歡喜し、一切の有情見る者父母を想ふが如く、福は輪王の如く七寶具足し、壽命長久にして千萬俱胝なり、若し

常に此の明を持せば金剛薩埵及び諸の菩薩常隨衛護して大神通を得、所作の事業みな悉く成就す、急難の中、日の昇空する如く一切の宿業重障七曜・廿八宿も破壊する能はず大安樂を得ん。若し百萬遍を持すれば大涅槃處を得んと文リ。  
又た云く 復た畫像曼拏羅の法を説かん、白淨の素縲を取り自の身量に等うして之を圖畫す、凡そ一切瑜伽中の像はみな自身の坐と等量に之を畫くと文リ。  
又た注に云く 海將阿闍梨云く、八大菩薩は理趣經の八大金剛の如し、攝一切佛頂輪王經の説の如し、又た八供養及び四攝等の標幟は金剛界の如し、七曜形別に授くと文リ。 ○七曜惣印明

○八大菩薩 △金剛手 ○種子 左手金剛慢の印に作り、右手五智杵を抽擲す。 (卷) 又の印 五貼印イ本

○眞言に曰く 曩莫三曼多沒馱南引吽引

金剛手菩薩は一切如來初發菩提心を表す、即ち是れ普賢、毘盧遮那佛從り二羽掌に觀たり五智金剛杵を受く、即ち灌頂を與ふ之を名けて金剛手と爲す、定羽金剛慢印を作るは、左道左行の有情を降伏して道に歸順せしめんが爲め、惠羽五智金剛杵を抽擲するは自他甚深の三摩地をして佛道に順じて念念に昇進し、普賢地を獲得せしむるなり

(二)爲す原本になし、異本によつて加ふ。

と文リ。

△觀自在菩薩 ○種子 止羽拘勿頭の如く觀羽を以て辨き之を開く ○又た八葉印 ○眞言に曰く 歸

命訖里 二合引入

觀自在菩薩は、一切如來の大悲を表す、六趣に隨縁して一切有情の生死の苦惱を拔濟したまふと文リ

△虚空藏菩薩 ○種子 二羽外縛して進力を反て屈し、輪ぼし寶形の如くせよ。 ○眞言に曰く 歸

命、怛囑

虚空藏菩薩は一切如來の恒沙功德福德資糧を表す、瑜伽を修する者は、此の部中に於て速かに所求を成就し、一切の伏藏皆な得、眞多摩尼寶を現すと文リ

△金剛拳菩薩 ○種子 二拳を用て合せて相捺す ○眞言に曰く 歸命、惡

金剛拳菩薩は一切如來三祕密身口意三密金剛を表す、合せ成するを名けて拳一切如來縛と爲す、是を金剛拳となす、瑜伽を修する者金剛拳三摩地に能く一切眞言教中三密の門を成就すと文リ。

△文殊師利菩薩 ○種子 二羽外縛して忍・願・立て合せ上節を屈して銀勢の如くせよ ○又た梵夾の印 ○眞言に

曰く 歸命、菴

文殊師利菩薩は一切如來般若波羅蜜多の惠劍を表す、三解脱門に住して能く真如法身常樂我淨を顯すと文リ

△纒發意轉法輪菩薩 ○種子系 ○印二羽を用て臂を申べ、前に當て、之を轉ずること輪の如くせよ。 ○又た小金剛輪印

○真言に曰く 歸命、吽

纒發意轉法輪菩薩は一切如來の四種輪を表す、若し瑜伽を修せば三摩耶を破し、或は阿闍梨非法にして師位を失ふに、此の輪壇を建立するに由て則ち本の阿闍梨位に復すと文リ。

△虚空庫菩薩 ○種子系 ○二印右の掌を仰け心前に着け、鵝脚金剛杵を持す  
歸命、唵 ○真言に曰く

三項 頃の字か

虚空庫菩薩は一切如來廣大供養の義を表す、若し虚空庫三摩地を修得すれば、一念の三項に於て身は盡虚空遍法界一切佛前に生じ、大衆會に於て以て種種雲海を供養し奉獻す、便ち諸佛より妙法を聞説し、即ち福智の資糧を満し、虚空を以て庫藏となし、諸の有情界を拯濟し利樂すと文リ。

二印 異本に「又た實印」に作る

二印 一本に化に作る。

△摧一切魔菩薩 ○種子系 ○又はん ○印二羽を用て檀・惠・進・力等の度を展べ、口の兩傍に置いて牙の如くせよ ○又た普賢三摩耶の印 ○真言に曰く 歸命、郝

摧一切魔菩薩は一切如來大悲方便を表す、外に威怒を現じ内に悲愍を懷き、加行位に住して行者を護持するに、諸障を辟除して菩提を成ず、時に摧伏天魔及び魔醜首羅一切調伏し難き者、彼等をして受記せしめ、無上菩提に到らしむる故にと文リ。

○八大明王 △步擲明王 ○種子系或はん ○印三昧金剛杵の契を結び、印を以て心に於け。 ○真言に曰く  
唵、纒哩二合 屈臨三合 部臨四合 素臨五合 儒臨六合 虎 ○又の印虛掌、二頭を掌に入れ、二大を以て之を押せ。

△降三世明王 ○種子系 ○印二羽臂を交へ、金剛拳にして檀・惠・相鈎し進・力を堅つる是れなり。 真言に曰く 唵 遜婆囉、遜婆囉縛曰羅吽、發吽。

△大威德明王 ○種子系 ○或はん ○印二羽内に相双へ拳に作り、忍・願・直く堅て相合せよ、即ち成ず。 ○真言に曰く  
唵、訖哩合 瑟窒合 嚩合 尾訖哩合 多娜合 囉合 二吽合 薩囉合 設咄囉合 娜引合 捨也合、薩擔合 婆也合、娑發吒合 娑發吒合、娑縛賀合 或は三字密言を用ふ。

△大咲明王 ○種子系 或はん 又はん ○印神・智・進・力・忍・願・等内に相双へ、右、左を押し、戒・方・を堅て頭相柱へ、檀・惠・相押す。

○真言に曰く 唵翳門惹隣吽 又た云く 唵縛日羅阿吒賀娑吽發吒

△大金剛輪 ○種子素 或はマ ○印 二手各の金剛拳に作り、進力・檀・ ○真言に曰く 唵

縛日羅 二合 唵 二合

△馬頭明王 ○種子素 或はネ 又はネ ○印 二羽合掌して進力・を屈し戒方を掌内に於て甲

に想へ、諸の作障の者、一切諸魔を辟除するに、此の印を以て退散馳走すと ○真言に曰く 唵 一賀耶紇里勝吽吽、發吒

△阿波羅爾多明王 ○種子素 又たネ ○印 二羽合掌して進力・を屈し戒方を掌内に於て甲

に想へ、諸の作障の者、一切諸魔を辟除するに、此の印を以て退散馳走すと ○真言に曰く 唵 一賀耶紇里勝吽吽、發吒

△無動金剛 ○種子素 又たネ ○印 二羽合掌して進力・を屈し戒方を掌内に於て甲

に想へ、諸の作障の者、一切諸魔を辟除するに、此の印を以て退散馳走すと ○真言に曰く 唵 一賀耶紇里勝吽吽、發吒

○一字金輪

○妙高山の頂に素字あり、變じて大寶蓮花となる、其の上に列字あり、七寶の宮殿となる、殿中に素字あり、變じて八葉の白蓮花となる、花臺に勃嚙唵字あり、變じて八輻金剛輪となる、輻輳皆な鋒鋭り其の色檀金の如く聚塵數の日に過ぐ、金剛は極堅を

○妙高山 已下  
道場觀。

表し、圓は福智の滿を顯し、利は無戲論を表し、光は一切智を表す、貪・瞋・癡を除破し諸の妄執を斷壞す、斯の智輪虚空に遍周す、故に諸佛盡く輪内に入る、即ち此の輪變じて一字頂輪王と成る、形色素月の如く輪蓋をもて法身を傍り、五佛の寶冠を戴き大智拳の印を結び、熾盛日輪に住し師子座に處し、無量の光明を放ちて十方刹土を照す。當前の葉上に佛眼尊あり、及び一一の葉上右に繞りて輪王の七寶 金輪・象・馬・珠・女・兵・主・藏 を布烈す、乃至十佛刹微塵數の諸尊圍繞せり。

○根本印 中・小名をもて拇頭指を握り大の背を柱ふ、金剛拳乃ち成ず。 ○真言に曰く 勃嚙唵

右左の頭指の一部を握り、面を心に當つ、是を智拳印と名く。 三密緣かに相應すれば 自身本尊に同じ 能く佛智に遍入して 成佛猶ほ難か

らす 若し此の瑜伽を修するに 設ひ現に無量の 極重の諸の罪障を造るとも 必ず

能く惡趣を超え 尅疾に菩提を證せん 此の最上 甚深微密の義を顯さんために 故に此の大印

に住す ○勝身三摩耶印 堅固金剛合掌して即ち中指を並べ堅て由し青蓮葉の

如し、頭指を屈して各の中指の背の上節に安せよ。

當さに知るべし印相の義 大指を結跏となし 中指は佛身を像かたどれり 名小を光焰となし

二掌は日月輪 腕は師子座を表す 是の故に如來 勝身三摩耶と名く 當さに此の密語の 唵オン歩ボツ欠ツツを誦すべし 此は毘盧遮那 佛の三字密言

共に一字にして異なることなし 適印密言を以てすれば 印心鏡智と成り 速かに菩提心を獲

金剛堅固の體 額を印し應當に知るべし 平等性智と成り 速かに灌頂地を獲 福聚身を莊嚴す 密語をもて口を印する時 妙觀察智と成り 即ち能く法輪を轉じて

佛の智慧身を得 密言を誦して頂を印せば 成所作智と成り 佛變化身を證す 能く難調を伏する者 此の印密言に由て 自身を加持するに 法界體性智

毘盧遮那佛 虚空法界身と成る。 又た云く 又た本部中の 無能勝明王は 密言を用ひて自身の 五處を印すること前法の如し

八指右、左を押し 掌内各の交へ合せ 大指開いて微しく屈し 少しく頭指の側を離し

此の心密言の 唵オン短ダン呼フを誦す 此の加持を作すに由て 一切の時處に於て 魔冤も侵す能はず 虎狼諸の毒虫 惡心の人・非人 盡く能く凌屈し能ふことなし

如來初めて成佛したまひ 菩提樹下に於て 此の印密言を以て 天魔の軍を摧壞したまふ。 又た云く 次に念誦の時を明さんと方所あることなし 瑜伽教王の中 如來讚稱したまふ所 時

當さに知るべし 四時或は三時 二時乃し一に至るまで 無間一切の時、間あらしめず

三といは謂く晨・午・昏 夜半を加へて四と成す 二時といは謂く晨・暮 一時は暇を得るに隨ふ

初より乃し終に至るまで みな此の儀軌に依れ 或は壇淨室なくんば 隨處に

念誦すべし

先づ當さに覽字を 淨身及び淨處に觀ずべし 字を頂上に安し 智火を發して 梵燒するに

身處灰燼なく 清淨なること虚空の如し 纔かに此の三昧に住せば 百劫に重 罪を積むとも

一念に頓に蕩除せん。

又た云く 復た次に又た 極略念誦の儀を開演せん 瑜伽を修する者の爲めに

好んで多法を樂はず

或る衆は世務に迫られ 廣法闕くることを恐るゝに由て 先づ智拳印を結び

即ち勝身加持し

次に供養儀を陳べ 即便ち念誦を作せば 亦た闕少する所なし 若し更に極め

て駆り迫り

時分を間闕せんを恐るれば 但だ智拳印を作り 本尊の密言を誦すること 七

遍或は三遍し

即ち行住坐に任せ 随意に念誦を作せ 若し珠を執り數を記する 一百八未滿 ならば

中間に語るべからず 若し語るを要せば當さに 覽字を舌上に觀すべし 縦ひ

語るも間と爲さず

或は唯だ勝身 大三摩耶印を結べば 便ち念誦することも亦た得 支分みな闕

けず

何が故に此の二印 獨り用ひて具法を成ずる 纔かに智拳を結ぶを以て 能く

諸の如來を攝し

住處に入て隨順す 勝身三摩耶 適此の印を結ぶ時 一切の印已に成す

十方三世の佛 所説の密印 盡く此の印中に在り 又た一切如來

同一に聚り密合し 此の一法身を成じ 更に二相あることなく 諸佛みな隨喜し

菩薩咸な敬奉し 天・龍・人・非人 攝伏して而も歸命す 是の如くの義に由るが

故に

諸印の助を待たず 一をもて一切印を成す 若し常の念誦の如きは 當さに廣

儀軌に依るべし。

又た云く

又た伽他の義を思ふに 一切虚空の如し 虚空亦た無相なり 諸法相應の故に  
一切に舒適し 此の四句の偈を誦せば 所觀の彼彼の境 皆な空を照して亦空  
なり

空體を勝解するに由て 自ら本心を徹見するに 皎潔にして満月の如し 能取  
所取を離れ

自性の光明 菩提の體堅固なることを成す。

二禁 一本に楚  
に作る。

末法中一字心呪經に曰く 斯の轉輪王如來頂髻の法は、能く他法をして速かに即ち毀  
壞せしめ、能く自法をして速かに成就するを得せしむ、一切菩薩共に讚歎する所、念  
誦の處、四方五百驛内に於て一切の惡鬼みな自ら馳散し、一切の呪師其の本法を行す  
るに、此の呪を聞いて皆な悉く摧壞し、一切の諸天所有の神通みな悉く退失すと文り。  
又た云く 若し有人、諸の毒藥を食せば、孔雀の尾を取て呪十萬遍を誦せば、二禁毒  
及び諸の惡病みな除差することを得と文り。

○本部母佛眼印 金剛合掌して二頭指を並べ肩甲を合せ、大指を並べ立て、各の頭指の側を押し、心に當  
て七迴を誦し、四處或は五處を印し、然る後頂上に散す、處ごとに各一迴を誦す、密言に  
曰 歸命勃駄南、唵勃駄嚩捨拏莎哥

部母加持に由て 本尊並に眷屬 皆な共に喜び愛念す 瑜伽者たとひ  
違犯闕法等あるも 矜愍して過を見ず 亦た他を違逼せず 諸の密語を持する  
者

若し此の法を作さず 微しく闕少することを得ず 恐くは三摩耶を犯さん。

〇〇尊勝

二觀想せよ、五大所成の宮殿の中に大圓明月輪あり、三肘を以て界道となし、寶瓶を  
以て分齊となす、其の中央の大蓮花臺上にま字あり、法界率都婆となる、率都婆變じ  
て大日如來となる、五智の寶冠を戴き輪蓋をもて法身を嚴り、法界印に住して結跏趺  
坐して淨月輪の七師子座に處す、左の圓明の中にま字あり、白傘蓋佛頂となる、右の  
圓明の中に例字あり、最勝佛頂となる、中の圓明の前に訶咩字あり、變じて金剛鉤蓮花  
鉤を安  
くなりとなる、鉤變じて尊勝佛頂となる、首に五佛冠を戴き、手に金剛鉤を執り、項背

二觀想 已下道  
揚觀。

に圓光あり、遍身車輪の如し、暉曜奕赫として三摩地に住す、中の後圓明の中に怛陵字あり、放光佛頂となる、尊勝の右圓明の中に苦字あり、勝佛頂となる、尊勝の右圓明の中に吒嚕呼あり、廣生佛頂となる、光聚の右圓明の中に意字あり、無邊聲佛頂となる、光聚の左圓明の中に室嚕咩字あり發生佛頂となる、下左邊半月輪の中に字あり降三世となる、右邊の三角光の中に字あり、不動尊となる、前に香爐あり、像の上に寶蓋あり、兩邊に六箇の飛天あり、各の香花を執る云云。

(二)朱書に(施羅尼七通を誦す(異本)とあり。

○根本印二手合掌して二頭指を屈し甲背け、二大指を(二)尊勝陀羅尼 曩謨引婆引誑縛帝但願引路引二積也二鉢囉二合底尾始瑟吒二合野沒馱引野婆去誑囉帝但備也二合他唵尾戌馱野尾戌引馱野婆上婆身婆三去滿跢引縛婆薩婆頗二合羅拏誑底誑賀曩婆囉二合婆引縛尾秫弟阿上鼻誑左觀給引素誑跢縛羅縛左曩阿密唎二合哆去鼻囉屬摩賀曼但羅二合跋乃阿引賀羅阿賀羅引阿引去庚散馱羅拏戌引馱野戌引馱野誑々曩尾秫弟瑟拏泥灑尾惹野尾秫弟婆賀婆二合囉濕茗二合散祖彌帝薩囉但他誑哆引囉路引伽囉婆上吒播二合羅加哆引跋哩布羅拏囉縛但他引誑哆紇哩二合娜野引地瑟姪二合曩地瑟耻哆摩賀母捺捺二合縛曰羅三合迦野僧伽多上曩尾秫弟薩囉去縛羅拏身播野訥哩藥二合底跋哩尾秫弟鉢囉二合底囉囉羅多二合野阿引去欲秫弟三摩野引地

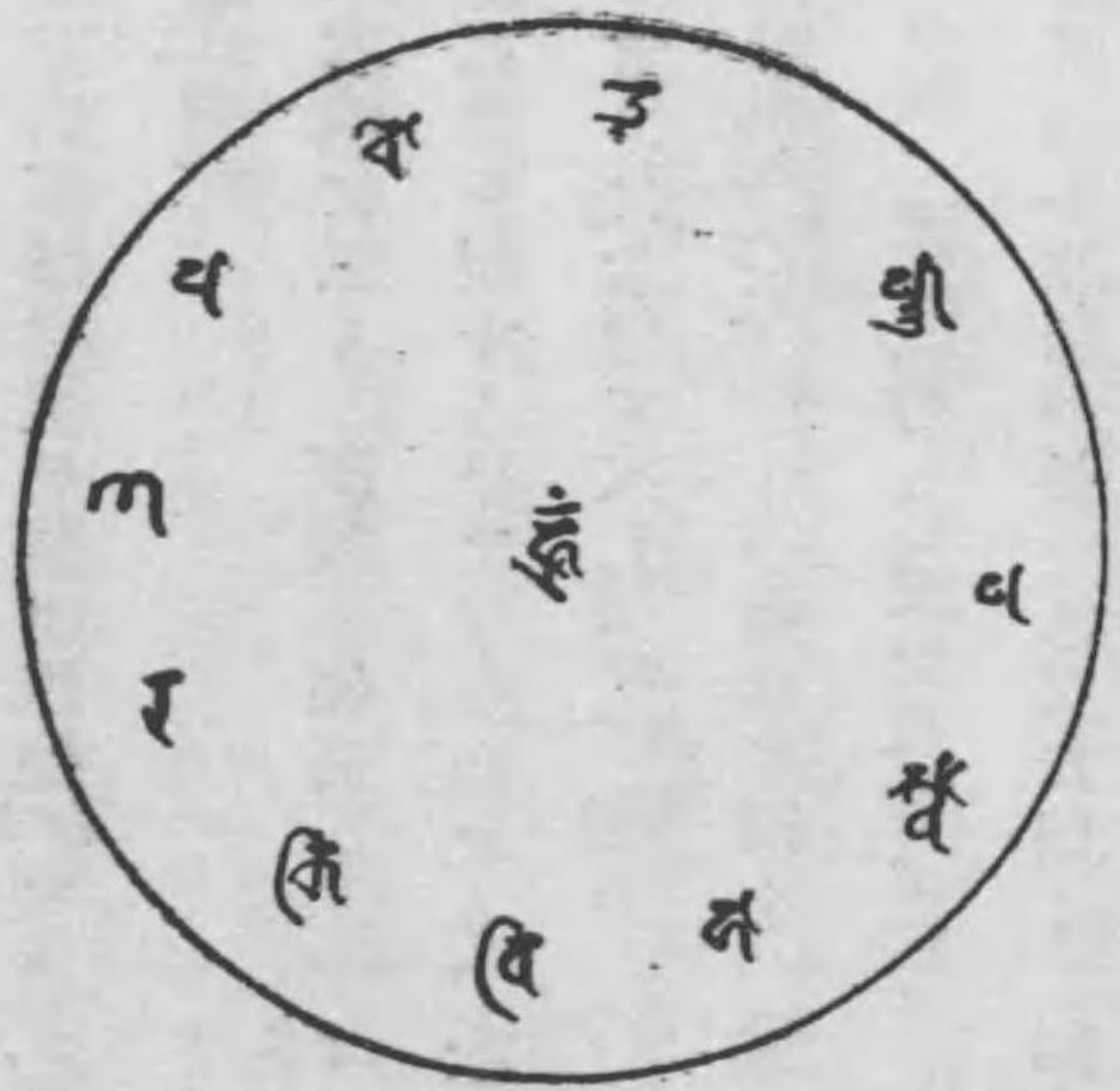
瑟耻二合帝婆拏婆拏摩賀婆拏但闍哆引去部引多句引致跋哩秫弟尾婆普二合吒沒地秫弟惹野惹野尾惹野尾惹野婆二合羅婆二合羅薩囉沒馱引地瑟耻二合多秫弟縛曰里二合縛曰羅二合藥陸囉曰覽二合婆引囉親慶慶設哩覽薩囉囉囉二合難引上左迦引野跋哩尾秫弟薩囉誑底跋哩秫弟薩囉但他藥哆引室者二合銘三去慶引濕縛二合婆琰親薩囉但他引藥哆三去慶引濕囉二合婆引去地瑟耻二合帝沒地野二合沒地野二合尾沒地野二合尾沒地野二合冒引馱野冒引馱野尾冒馱野尾冒馱野三滿跢跋哩秫弟薩囉但他二合藥多紇里二合娜野地瑟姪二合曩地瑟耻二合多摩賀引母捺哩二合婆囉二合賀。

不空軌に云く 所誦の聲高からず下からず、緩ならず、急ならず、一心に緣じて毘盧遮那佛を觀するに了了分明なり、七遍を誦し已て印を頂上に散せよ、菩提子念珠を取り當さに念誦すべし云云。

○印内縛して右の頭指を鈎せよ ○眞言に曰く 曩莫三曼多沒馱引喃引訶唎二合尾枳羅拏、半祖烏瑟尼二合灑、娑囉賀。○又た眞言に曰く 唵阿密哩多誑惹囉底莎哥 ○心眞言に曰く 唵阿密利多波瑟莎哥 ○又た曰く 歸命訶唎半祖烏瑟尼灑莎哥 ○又の印惠手拳に爲り其の風輪を擧げて少しく之を屈せよ。眞言は常の如し。



○字輪説



無畏の軌に云く 左右の二手の無名指及び二小指を以て相叉へて掌中に入れ、右、左を押す、次に二中指を直く堅て頭相着け、其の二大指相並べて屈し、無名指の中節の側文を押す、又た二頭指を以て中指の側に當て、中節の文の上を屈して相柱へよ即ち成す。

○真言に曰く 娜摩三漫多勃駄喃唵入囉囉入囉囉揖下是れ翻音注 瑪拏妙翻運 二合妬那瑟膩沙上字專法の反 度度底底娜那餅。

先づ此の印を結び此の真言七遍を誦し、根本印と名くと文り。然して後ち尊勝根本真言を誦せよ、此の印

大師の御筆之を圖す。



不空軌の圖



攝一切佛頂圖



法三圖樣

朱は香隆寺



先づ像を畫くべし、吉善の好月の時日を選び取り、晨朝に起きて畫く。好月とは正・二・三・四・五・六・七なり、二月此を最上の好月となす。其の好日とは、日月蝕の時及び地動の時、鬼宿の日、此を上好勝日となす、或は白月の十五日を以れ、或は廿三日等を取れ、已に日月時節の擇び取らば即ち畫師を喚び沐浴して三昧耶を與へ、或は三摩耶

灌頂を興へ、出入する毎に洗浴して衣を換へ、三白食を食し雜穢食等をせず、亦た價を還さず、其の畫く物は白墨或は好細の布絹等の物、中畫は法の如く之を畫け。

又た云く 復た次に我れ今、修尊勝眞言法を略説せん。毎月十五日自ら本尊を觀じ心誦す、或は人を遣はして一千八遍を誦し滿せば、能く一切の災殃を除き長壽にして福を増せん、或は毎日三時本尊を心上圓明中に觀じ、或は己身を觀じて本尊と爲し、心上の圓明中に於て尊勝眞言を旋轉し安布す、字形の如く一一の字本法に隨ふ、時に臨んで本色相應の放光、みな變成して曼荼羅の聖衆となる、即ち是れ己身、尊勝佛頂法界曼荼羅の體となると文り。

又た云く 我今尊勝陀羅尼法を略説せん。即ち是れ一切の障を除き、一切の地獄、傍生等の身を滅する故に、尊勝佛頂の義と號す、是の故に如來善住天子となり、説くに七遍畜生の身を除く、即ち此の修瑜祇者、事法に同じからず、若し一念の頃に於て無生を證し五智を轉じて五分を成し三密を悟る、即ち三身初發心の時、便ち百六十種心を越え三無數劫の行を度り、普現色身三摩耶を證す、是れ初發心の時便ち正覺を成すと文り。

又た云く 淨と不淨と、但だし發菩提心を淨となす、内外縁合すれば時日を擇ばすと文り  
又た云く 一切佛頂心を最も勝とするが故に、一切佛頂の中、尊勝佛頂能く一切煩惱の業障を除く、故に號して尊勝佛頂心となす、亦た除障佛頂と名くと文り。

又た云く 如法に持誦すれば必ず無生悉地を獲。悉地に三種あり。下悉地とは長生不死仙の中王と爲る、或は世間一切の勝事巧妙にして住壽萬歲なり。中悉地とは、轉輪聖王と爲り住壽一劫。上悉地とは五地已上八地已來の菩薩の身を證し、一念の間に十佛刹微塵數の佛世界を過ぎ、一一の佛前に承事し供養し衆生を化度すと爲す、是の如く説くを有相悉地となす。其の無相悉地とは、前の三種の悉地を下悉地となす、若し無相の中悉地とは、或は本尊の身を得、若しは應化の身乃至十地位菩薩の身を得るを、號して中悉地と曰ふ。其上悉地とは三業即ち是れ三密、三密即ち是れ三身、三身即ち是れ大毘盧遮那如來智、若し是の如くの毘盧遮那の身を得、若しは法界普現の色身を證せば、同一法界、同一體性一心の外に更に一物として得べきものなし、諸佛虚空相に立てば虚空も亦た無相心虚空に同ず、故に修瑜祇者も亦た同じく一體にして、一念の頃に二三の妄執を越え、三僧祇の行を度り、初發心の時便ち正覺を成ず、即ち是れ

悉地の身なり、此れは是れ無相悉地の中、最上悉地の法なりと文リ。

○種子三摩耶形等の異説

○大日 種子 言或は歩嚙呼三を用ふ。 又た契又は想 ○三摩耶形 塔 ○印智拳印 或は法界定印 ○真

○尊勝佛頂 摧碎佛頂、除蓋障、除業、除障々、捨除々、除業 ○種子訶咻 まき ○三摩耶形 金剛鈎、善無畏軌、蓮花鈎、佛頂經 ○印明 常の如し ○梵號 尾柁羅拏烏瑟尼沙 シユニシヤ ○密號 除摩金剛。

善無畏の軌に云く 蓮花臺上に結跏趺坐し白肉色なり、兩手齊下にして禪定に入るが如くし、掌中に蓮花を承け、蓮花上に於て金剛鈎・五智寶冠あり。

○廣生佛頂 極廣生、高佛頂 ○種子吒嚙呼 ○三摩耶形 蓮花上に如意寶或は因古、或は三 ○

印内五趾、右手縛折羅を持し、左手は掌を掲ぐ云云 ○真言に曰く 歸命喃、吒嚙呼、那瑟尼灑、娑婆賀

○梵號 契利、不、不、不、不 ○密號 難觀金剛。

善無畏の軌に云く 三 右手に縛折羅を持し、左手は掲げて五智寶冠を掌にす。

○最勝佛頂 ○種子施系 ○三摩耶形 金輪 ○印轉法輪印 ○真言に曰く 歸命喃、

○廣生佛頂 冠頭に朱書して地藏といふ。

○無邊聲佛頂 冠頭に朱書に慈氏といふ。

施、糸尾惹欲、那瑟尼灑、娑婆賀。 ○梵號 尾惹欲瑟尼灑 ○密號 最勝金剛  
善無畏の軌に云く 頭に五智冠を戴き種種に莊嚴す、背の圓光及び通身の光狀車輪の如く種種の光色を具す。右手に蓮花を持す、蓮花上に於て八輻の寶輪を安す、蓮花上に結跏趺坐し左手は掌を掲げたり。

○無邊聲佛頂 ○種子呼 ○三摩耶形 螺貝 ○印商估印 ○真言に曰く 歸命喃、

呼惹欲、那瑟尼灑娑婆賀。 ○梵號 契利、不、不、不、不 ○密號 妙響金剛。

善無畏の軌に云く 右手に蓮花を持す、蓮花臺上に商估を畫く、左手は彌房の上に當て五佛冠を揚掌す。

○光聚佛頂 ○種子怛陵 ○三摩耶形佛頂印 ○印合掌し地水を月火の峰に入れ、風を以て火の甲に著け空、火の側を押す

○真言に曰く 歸命喃、怛陵、帝孺羅施、那瑟尼灑、娑婆賀。 ○梵號 帝孺羅施、不、不、不、不 ○密號 神通金剛。

善無畏の軌に云く 左手に蓮花を執り、花臺上に佛頂の印を畫き、五智の寶冠を戴いて、三 左手掌を揚ぐ。(朱)小野の圖に云く、左手に蓮花を執り、花上に印を安す、謂く、内

○發生佛頂 ○種子輸嚙呼 ○三摩耶形 一股 或は寶珠 ○印八葉の印 ○真言に

○光聚佛頂 冠頭に朱書に虚空藏とあり。

○無邊聲佛頂 冠頭に朱書に慈氏といふ。

○印 朱註に云く、印上に大光焰を放つと。  
○發生佛頂 (五)朱書に云く、普賢と。

曰く 歸命喃、輪嚕吽、鄔瑟尼灑、娑縛賀。○梵號 ニヤハシマヤハシ ヲ ○密號  
破魔金剛。

善無畏の軌に云く 左手に開蓮花を持し、右手は右膝の上にし半跏趺坐す。

○(一)白傘蓋佛頂  
冠頭朱書に云く、  
金剛手と。

○(二)白傘蓋佛頂 ○種子嚩 ○三摩耶形 傘蓋 ○印 恵・風を整て柄となし、定掌を  
開いて蓋の如くせよ。 ○真言に

曰く 歸命喃、嚩、悉怛多、鉢怛羅、鄔瑟尼灑、娑縛賀。○梵號 悉怛多鉢怛羅烏瑟  
尼灑 ○密號 異相金剛。

善無畏の軌に云く 首に五智冠あつて左手に蓮花を持す、蓮花に白傘蓋を安置す、右

手は掌を揚げて半跏坐し、身光頭光は五色にして車輪の如し。(朱)或る圖に云く、黄色の右  
手を舒べ赤蓮に坐す、左手は蓮花を取り、花上に傘蓋を置く。

○(三)勝佛頂 冠頭  
朱書に云く、文殊  
と。

○(三)勝佛頂 ○種子苦 ○三摩耶形 劔 ○印 大惠刀印 ○真言に曰く 歸命喃、  
苦惹欲、鄔瑟尼灑、娑婆賀。○梵號 マヤハシマヤハシ ○密號 大尊金剛亦是無比金剛。

善無畏の軌に云く 左手に劔を持し右手は揚げて五智冠を掌す。

已上八佛頂三摩耶形は皆蓮花上に置く。

○香。 沈 白檀 紫檀 煎香 安悉 丁子 薰陸 甘松 霍香 苓陵 乳頭香 健

怛羅娑香 龍腦香 荳蔻 堅木香。 ○乳木 栢。

國譯七卷鈔二終

# 國譯七卷鈔三

- 准脰
- 聖觀音
- 千手
- 馬頭
- 十一面
- 不空羅素
- 如意輪
- 白衣
- 多羅菩薩
- 毗俱胝
- 葉衣
- 大勢至

## ○准脰

○觀想せよ、大海の中に蓮華あり、難陀・拔難陀の二龍王共に蓮華の莖を扶け、花臺上に對字あり、淨月輪となる、輪中に沒字或は捨あり、變じて賢瓶或は甲冑あり、變じて准提佛母となる、身黃白色にして種種に莊嚴し、輕殺衣を着、白螺を劍となす、面に三目あり、身に十八臂を具す、上の二手は説法の相に作り、右の二手は施無畏、第三手には劍を把る、第四手には數珠を把り、第五手には微若布羅迦漢には子滿果と言ふ、此間には無く、西國にあを把り、第六手には鉞を把り、第七手には鈎を把り、第八手には跛折羅を把り、第九手には寶鬘を把る。左の第二手に如意寶幢を把り、第三手には蓮華を把り、第四手には深罐キウクワンを把り、第五手には索を把り、第六手には輪を把り、第七手には螺を把り、

○觀想云云 已下道場觀

○娜慕云云 原本梵字對譯文字は准既軌による

○大根本契 註に云く此は辟除魔鬼の印言なり、眞言に云くオンクログタ

第八手には賢瓶を把り、第九手は般若波羅蜜夾を把る、怜愍の眼を作して行者を見る、威儀具足し相好圓滿せり、乃至八供四攝等の菩薩恭敬し圍繞せり。

○根本印二地・二水・を交へて掌に入れ、二風を扇 又の印二手外縛して二風・二空を並べよ 眞言に曰く二ナ慕 慕ボサ 颯サ 南ナム 一イチ 去キョ、三藐三勃陀サムミヤクサンボクダ 去キョ 俱脰南クニナム 二相姪ニサンニヤ 反他ハンニヤ 三唵サン 四左餘シヤレイ 五祖餘ソレイ 六准泥ンニ 七莎囉ニ 會ケイ 訶



○大根本契 左手の頭指・無名指・小指を以て頭指・無名指・小指の甲上を捻し、右手亦た左手の如くし相捻し、二中指頭相柱へ、大輪眞言を誦せば、一切の諸法速かにみな成就す云云。

## ○字輪觀

○梵號 阿利耶沒駄、婆伽縛底 ○密號 最勝金剛。

○獨行法に曰く 三藏の口傳密意を授けて云く、若し苾芻・苾芻尼・優婆・優婆耶・童男・童女、命終り盡きなんと欲するに、宿殃の大横小横を問はず、但し命盡を去ること三七日あて此法に遇ふことを得れば、閻羅王勅し幽冥の所に命じて更に延壽を與へ、終るべから命を却け増壽を得、一灌頂ごとに二十一年の壽命を増し、復た壽命の長短に於て悉く自ら能く知る。

○又た云く 若し已過の父母及び已過の男女を見るを得んと欲し、之を見ることを得て兼ねて生受を知らんと欲して、二七日内に法に依て念誦せば皆な知見することを得。

○又た云く 若し大旱ならんに、中夜に於て安悉香を焼くべし、印を結び五方の龍に勅せば速に降雨せしむ、若し三日にして雨降らずんば即ち沈香を須ひて五箇の龍を尅せ、各長け九寸、隨方の五色を各壇上に安じ、更に一七日法に依て念誦せば、即ち降雨することを得ん、若し晴れんことを須ひたらむには、即ち面を仰げ天に向ひ、陀羅尼八十遍を誦せ即ち晴れん、獨行法に曰く

若し人、惣じて福祿官位なくんば、但た二七日中至心に念誦し、縁の部に隨て功の如

く法に依れ、即ち福祿官位を得ること意の所樂に隨はん。

○又た云く 若し怨家に遇はゞ、横に口舌を爲すに、毎夜三時本尊に向ひ、眞言百八遍を誦じ其の名字を稱せば、即ち怨結を解いて親しきこと父母の如くならん。

○金智の釋、大明陀羅尼經に云く 若し此の陀羅尼を受持し讀誦すること九十萬遍に滿せば、無量劫より來たの五無間等の一切の諸罪悉く滅して餘すなく、所在の生處みな諸佛菩薩に値遇するを得、所有の資具、意に隨て充足し、無量の百生常に出家たるを得ん、若し是れ在家にして戒行を修持し堅固不退ならば、速かに無上菩提を成就するを得ん。

○不空所譯の經に云く 又たの法、若し人、鬼魅の所着を被り、或は復た病者の身、遠處に有て自ら來ること能はず、或は念誦の人又た彼に往かずば、楊柳の枝或は華を取て加持すること一百八遍し、人をして將さに病人の所に往かしめ、枝を以て病人を拂へ、或は華を以て病人をして見せしめ、或は華を以て病人を打てば、鬼魅即ち去て病者除差せん。

○又の法、若し人、癰腫を患ひ及び諸の毒蟲に囓まるれば、檀香の汁を取り土に和し

て沈となし、眞言七遍を誦して瘡上に塗れば即ち癒えん。

○又の法。若し女人、男女なくんば牛黄を以て樺皮の上に於て、此の眞言を書し帶せしめば、久しからずして當さに男女あるべし。

日照所譯經の除睡眞言に曰く 吉帝伊帝彌帝毗伽那羶帝波陀莎

右初めに誦し、香泥を以て地に塗り、安息香を焼き、一百八遍を誦し訖て後讀誦する時、先づ七遍を誦せ、其の睡永く無く力強記を并足せん。

聰明呪一萬遍を誦す。寐帝寐帝憂帝憂帝莎

○大明陀羅尼念誦法門に云く 前の塗飾に依り、即ち天蓋を張り四面に幡を懸く、若し本尊七俱胆佛母の形像あらば、曼陀羅中に安置し面を西に向へよ、若し本尊なくんば諸佛の像舍利及び大乘の經典を有け、供養みな得んと文り。

○又た云く 若し不二の法門を求めば、應さに兩臂を觀すべし、若し四無量を求めば當さに四臂を觀すべし、若し六通を求めば當さに六臂を觀すべし、若し八聖道を求めば當さに八臂を觀すべし、若し十波羅蜜圓滿十地を求めば應さに十臂を觀すべし、若し、如來普遍廣地を求めば、應さに十二臂を觀すべし、十八不共法を求めば應さに十

八臂を觀すべし、即ち畫像法の如きの觀なり、若し三十二相を求めば當さに三十二臂を觀すべし、若し八萬四千の法門を求めば應さに八十四臂を觀すべし。

○又た云く 若し清淨の處に瞿摩泥を以て地に塗り、而も四肘方の曼荼羅を作れ云云。

○七俱胆大明陀羅尼經に云く 若し一切成就成就の事を知ることを得んと欲せば、即ち燒香し發願啓白せよ、聖者願くは疑心を決せよ、若し右に轉ずれば即ち成就すると知れ、左ならば即ち成就なり。

○又た云く 若し夫、婦を樂まざれば淨瓶を取て淨香水を盛り、別に淨處に置き、瞿摩夷を以て曼荼羅に塗作し一百八遍を念ぜよ、是の如く七瓶みな此法を作し、淨處に於て香花を以て道場となし、瓶内の香水を取て洗浴すれば、即ち愛樂することも亦た得、孕婦ありて夫を樂はざるも亦た前法の如くせよ。

○又た云く 若し聰明なることを求めんと欲せば、石菖蒲牛黄を取り各半兩搗いて末と作し、蘇を以て佛前の曼荼羅に和し、五千遍を念誦して之を服せば即ち聰明ならん。又た云く 復た一法あり、若し乞食せば將さに常に此の陀羅尼を持せんに、惡人、惡狗等の類の侵害する所とならず、乞食するも易く得ん。



〇〇聖觀音

(二)壇中云云道  
揚觀

(二)壇中に卍字あり、八葉の蓮華と成り寶鬘藥を具す、其の上に卍字あり、淨月輪と成る、月輪の中に卍字通八葉卍字金剛界あり、黄金色にして無量の光明を具す、其の字變じて蓮華或は獨古となる。蓮花變じて觀自在菩薩となる、身色黄金にして光明赫奕たり、輕穀の衣を被、赤色の裙を着け、左手は臍に當て、未敷蓮を執り、右手は胸に當て、開花の勢に作る、頭冠瓔珞あり、首に無量壽佛を戴く、及び蓮花部の聖衆前後に圍繞せり。

〇根本印 二手を以て内に相双へ、右の大 眞言に曰く 唵阿引嚕力迦去半音娑縛二合賀引  
拇指を翹て立てよ、即ち成ず。 無量壽軌に云く 其の印、二手を以て外に相双へ、二頭指相拄 眞言に曰く 唵縛日羅達慶カウラ紇里カウラ

〇梵號 阿里也、縛路枳帝、濕縛羅。 〇密號 正法金剛亦た本淨金剛

儀軌に曰く 瑜伽を修する者、應さに觀想すべし、自身の眉間に卍字を量れ、赤金色にして變じて白毫相となる、腦交縫内に於て卍字を置き、白色光にして其の腦中に滿つ、頂上に於て卍字を置き、赤色光を作る、分焰上に制ひり、佛頂上に於て應さに卍字を想ふべし、白色光なり、光法界を照せり、自の右足掌に於て卍字を置き、左足掌に卍字

(二)若 異本に無し。

を置き、即ち觀ぜよ自心菩提心を成ず、一切我を離れ、蘊處界能取所取を離れ、法に於て平等にして自心を了知するに、本來不生空無自性なり。 觀せよ、本尊の心上に圓滿寂靜月輪あり、輪中(二)若右旋して陀羅尼の字を安布せよ、其の字みな白色光を放ち、法界に遍周す、其の光還り來て行者の頂に入る、修瑜伽者の心月輪の中に於て前に准じて右旋して布烈し了了分明なり、其の字復た光明を旋す、前に准じて觀を作せ、是の如く觀じ已て、修瑜伽者自身本尊觀自在菩薩の身と等しく差別なく、彼の鏡と像との如く不一不異なり。

觀自在菩薩說自心陀羅尼經に曰く 但し淨心にして一十萬遍を誦せば、一切の障礙みな清淨なることを得。若し二十萬遍を誦すれば、能く過去・現在の所有る五無間の重罪を滅す、若し三十萬遍を誦すれば、一切の福德聚みな集りて身にあり、衆人畏敬し之を愛すること母の如く、一切の悉地みな成就するを得、百萬遍を誦すれば觀自在を見たとまつるを得。

又た云く 觀自在菩薩前に日日三時別に三千遍を誦し三箇月を滿せば、所求の一切の意願みな満足することを得。

大日經疏第五に云く 觀自在とは是れ蓮華部の主、謂く如來究竟して十緣生句を觀察して此の普眼蓮花となるを得、故に觀自在と名く、如來の行に約する故に菩薩と名く、頂に無量壽を現ずるは此の行の極果を明す、即ち是れ如來普門の方便智なり、此



の像及び菩薩の身、皆な現法樂に住し、熙怡微笑するの容を作す、觀自在の身色淨月の如く、或は商佉の如し、即ち是れ上妙の螺貝、或は軍那花の如し、其の花は西方に出づ、亦た甚だ鮮白なり、當さに此の三譬を三想ふに言く其の光鮮かに潤徹し、白中の上たるなり。

(二) 籠の字、異本に籠に作る。

〇〇千手

(一) 妙高山の頂に八葉の蓮華を想へ、大蓮華上に於て八大金剛柱あり、寶樓閣を成ず、蓮花臺の中に寶字或はを想へ、字より大光明を流出して遍ねく十方世界を照し、所有る受苦の衆生此の光に照觸するに皆な解脱を得。又大光明の中より紅色の蓮花或は如を踊出するに、蓮華變じて千手千眼觀自在菩薩となる、相好圓滿し威儀具足す、十波羅蜜及び八供養等の菩薩各、本位に住せり。又た樓閣の四隅に於て白衣・大白衣・多羅・毘俱胝等の四菩薩あり、各の無量の蓮花部の聖衆と與に前後に圍繞せり云云。

○根本印 二手金剛合掌して稍、手背を曲げ合掌して相離し、忍願二度を以て相合せ、檀・惠・禪・智・四度折り開き、各の直く堅てよ、即ち成ず。 陀羅尼に曰く

南無葛羅怛那、哆羅夜耶南無阿唎耶、二婆盧羯帝憐鉢羅耶、三菩提薩陲婆耶、四摩訶薩陲婆耶、五摩訶迦囉尼迦耶、六唵、薩囉羅羅罰曳、數怛那怛寫、九南無悉吉埵伊蒙、阿唎耶、十婆嚧吉帝、室佛楞駄婆、十一南無那羅謹埤、十二醯喇摩囉哆沙咩、十三薩婆阿他、豆輪朋、十四阿遊孕、十五薩婆善哆那、摩婆婆伽、十六摩訶持豆、十七怛姪他、十八阿婆嚧醯、十九嚧迦帝、二十迦囉帝、廿一夷醯唎、廿二摩訶菩提薩埵、廿三薩婆薩婆、廿四摩羅摩羅、廿五摩摩醯唎駄孕、廿六俱嚧俱嚧羯囉、廿七度嚧度嚧罰闍耶帝、廿八摩訶罰闍耶帝、廿九陀羅陀羅、卅地唎尼、卅一

(二) 妙高山 已下 道場觀。

室佛羅耶、卅二遮羅遮囉、卅三摩羅罰摩羅、卅四穆帝囉、卅五伊薩移薩、室那室那、卅七  
 阿囉參佛羅舍利、卅八罰沙罰參、卅九佛羅舍耶、四十呼嘯呼嘯摩羅、四十一呼嘯囉喇、四十二  
 娑囉娑囉、四十三悉喇悉喇、四十四蘇嘯蘇嘯、四十五菩提夜菩提夜、四十六菩提夜菩提夜、四十七  
 彌帝喇夜、四十八那羅謹埠、十九他喇瑟尼那、五十波夜摩那、五十一娑縛賀、五十二悉陀夜、  
 五十三娑婆訶、五十四摩訶、悉陀夜、五十五悉陀喻藝、五十六室囉囉夜、五十七娑囉訶、五十八  
 那羅謹埠、五十九娑婆訶、六十摩羅那囉、六十一悉羅僧、阿穆法耶、六十二娑婆訶、六十三  
 婆摩阿悉陀夜、六十四娑婆訶、六十五者吉羅阿悉陀夜、六十六娑囉訶、六十七娑摩羯悉陀夜、  
 六十八娑婆訶、六十九那羅謹埠、囉伽羅耶、七十娑囉訶、七十一摩婆利勝羯囉夜、七十二娑  
 婆訶、七十三南無曷羅怛那哆、羅夜耶七十四南無阿喇耶、七十五娑囉吉帝、七十六囉囉囉夜  
 七十七娑婆賀。儀軌に曰く、此の陀羅尼七遍を誦し已て頂上に印を散し、根本印を結  
 ぶに由て此の陀羅尼を誦せば、能く四種成就の事を作す。一には息災、二には増益、  
 三には降伏、四には敬愛、鈎召等、所有る希望の世間・出世間の果報みな満願するを  
 得、本教中説かざる所の成就法を作すには、蓮花部中の法を用ひ、此の像前に對へば必  
 ず成就を獲ると作す云々

眞言に曰く 唵縛日羅<sup>オムバクニ</sup>合達<sup>ニカウ</sup>摩訶<sup>マカ</sup>理<sup>リ</sup>合<sup>カウ</sup> ○梵號 沙賀沙羅布惹阿梨耶<sup>サカサラホセアラヤ</sup>縛囉<sup>バク</sup>枳帝<sup>シテ</sup>濕婆<sup>シバ</sup>羅<sup>ラ</sup>

○密號 大悲金剛

- |     |      |      |     |     |                 |      |     |     |
|-----|------|------|-----|-----|-----------------|------|-----|-----|
| 四十手 | 如意珠  | 絹索   | 寶鉢  | 寶劍  | 合掌 <sup>ニ</sup> | 跋折羅  | 金剛杵 | 施無  |
| 畏   | 日精摩尼 | 月精摩尼 | 寶弓  | 寶箭  | 楊柳枝             | 白拂   | 胡瓶  | 榜桃  |
|     | 鉞斧   | 玉環   | 白蓮華 | 青蓮華 | 寶鏡              | 紫蓮華  | 寶篋  | 五色雲 |
|     | 鐺持   | 紅蓮華  | 戟鞘  | 寶螺  | 鬘體              | 數珠   | 寶鐸  | 寶印  |
|     | 錫杖   | 化佛   | 化宮殿 | 寶經  | 金輪              | 頂上化佛 | 蒲桃  | 俱尸鐵 |
- 法三胎藏記に云く 千手千眼觀自在通身黃色にして二十七面あり、正面の邊各の一面、  
 次に上七面、次に上七面、次に上五面、次に上五面、下三面、各の三目あり、左邊の一面は  
 齒を現じ二牙上さまに出づ、右邊の面は齒を出し微笑形を爲す、千掌各の一眼あり、  
 然して四十二手種種の器械を執持す、右手には青蓮、次の兩手は合掌、次の二手は定印、  
 次に鉢、次に三胎、次に寶印、次に蒲桃、次に梵篋印、次に劔、次に鏡、次に月、次  
 に錫杖、次に施願、次に珠數、次に胡瓶、次に箭、次に五色雲、次に開白蓮花、次に  
 鬘體、次に鈎、次に化佛、左手開敷紅蓮、次に經篋、次に一胎杵、次に三胎鈴、次に

索、次に緑珠、次に商估、次に鉞斧、次に輪、次に三叉、次に玉環、次に深瓶、次に弓、次に榜桃、次に開紫蓮、次に柳枝、次に白拂、次に日、次に宮殿、結脚して寶蓮花に坐し、頂下瓔珞内に白珠鬘瓔珞を繫着す、外に青珠鬘あり鬻に至る云云。儀軌に曰く、清淨の伽藍及び舍利塔の前に於て精室を修治し、壇場を塗拭し周廻して幡を懸く、上に天蓋を施す、壇の西面に於て千手千眼の觀自在菩薩の像を安し、持誦者壇に於て像に對して茅薦を敷いて座となすと文リ。

〇〇馬頭

(一) 觀想せよ、壇中に寶字あり、變じて蓮花座となる、座上に寶字或は是ありあり、字變じて白馬の頭となる、白馬の頭變じて賀耶訖里縛明王となる、其の身黃にも非ず赤にも非ず、日の初めて出づる色の如し、白蓮華を以て瓔珞となして其の身を莊嚴す、火燄猛威赫奕として鬘の如し、指の甲長利に雙牙上まに出づ、首髪は師子の項の毛の如し、極吼怒の狀を作る、此れは是れ蓮華部忿怒持明王なり、猶ほし轉輪王の如し、寶馬四洲に巡履し一切時、一切處に於て其の心息まず、諸菩薩の大精進力も亦復た是の如し、是の如くの威猛の勢を得る所以は、生死重障の中に於て身命を顧みず、摧伏せらるゝ者

(二) 觀想せよ、已下道場觀。

多し、正しく白淨の大悲心となす、故に白蓮華を用ひて而も其の身を嚴るなり、乃至蓮花部の聖衆前後に圍繞せり云云。

胎藏の圖に曰く、肉色三面二臂にして印を結び、右足を立つるなり。後の本に云く、一面四臂にして、二手は印を結び、右手には三股鈎を持し、左手には未開の蓮花を持し、赤蓮花に坐す。

文殊八字軌に云く、東北の角に馬頭明王を書け、三面あり、八臂各の器仗を執れり、左の一手には蓮花を執り、一手には瓶を執り、一手には棒を執り、當心の二手は印契を結ぶ、右手上の手には鉞斧オノを執り、一手には數珠を執り、一手には索を執る、輪王の坐は蓮花中にあり。

○根本印各二相背け、二大指を並べて微しく屈し三、著くる勿れ、眞言に曰く、歸命三、唵三、野、吽惹薩叵二、吽野、娑嚩二、賀。

護摩儀軌馬頭眞言に曰く、印は前、唵オム、阿密哩ニ、都、納囉ニ、縛吽發吒半、娑嚩賀、不空絹索經に云く、馬頭觀世音印虛合して二頭指を屈して掌中に入れ、背相着けし、眞言に曰く、唵一度嚩二、哆嚩囉三、鉢頭二、米四、弭暮祇、反吽、五、此の印三昧、諸法中に於て最も奇勝となす、○梵號、阿里也賀耶囉

(一) 各の此の下、或はは甲の脱字するか、(二) 屈しの下、或はは「頭指を」の三字脱するか、(三) 唵云云、原本梵字、對譯文字は胎青龍軌所出による。

哩嚩 ○密號 迅疾金剛亦た取食金剛

集經第六に云く 其の菩薩の身長佛長短正さに人の一想へ四面あり、中の菩薩の面極めて端正ならしめ慈悲の顔を作す、顔色赤白、頭髮純青なり、左邊一面は一曠怒黒色の面を作す、狗牙上みさまに出下頭髮髪聳え立てり、火焰色の如し。右邊の一面は大嗔顔を作す、赤白端正にして菩薩の面に似たり、頭髮純青、三面の頭上に各の天冠を戴き、及び耳瑠を着けたり、其の天冠上の一化佛あり、結跏趺坐す、中面の頂上は碧馬頭に作る、仍ほ口を合せしむ、菩薩の頸下に寶の瓔珞を着け、項背の圓光數重の色に作り、左手臂を屈して乳前に當て紅蓮華を把る、其の蓮花菩薩の頭と齊しうして左膊に臨む、其の華臺上に一化佛を作る、緋の袈裟を着け結跏趺坐す、項背に光あり、右手は掌を仰け五指申べ、臂肘平に屈し、其の手掌眞陀摩尼唐に如意珠といふなりを撃ぐ、其の珠圍圓にして白色に如作す、赤色の光焰其の珠を圍繞す、其の右手に於て正しく珠下に當て種種の寶を雨らす、其の左膊の上に弊耶迦羅者摩唐に虎皮といふを着ること祇支を着るが如し、右腋下に當て皮を掩ひ帯を結び、更に虎皮を用て其の跨上に纏ひ、外臂は劍を以てし天衣裙等皆な餘處の如し、菩薩を畫くの法は、菩薩をして端身ならしむる如く、正しく

紅蓮花上に立ち空に寶傘を懸け菩薩の頭を蓋ふ、其の上空中に種種の天音樂の具を畫作し、兩邊の空中に須陀會天儼踏し供養すと文り。

〇十一面

(一)大海 已下道場觀。  
(二)此に脱字あるか。

(一)大海の中に須彌山あり、四寶所成なり、山の上に寶樓閣あり、其の中に曼荼羅の壇場あり、壇の中に八葉の蓮花あり、其の上に淨月輪あり、月輪の上に卍字或は卍あり、變じて軍持或は開敷蓮華となる、變じて十一面觀自在菩薩の身となる、四臂を具足す、右第一の手には念珠を把り、第二の手は施無畏、左の第一手には蓮花を持し、第二手には軍持を執る。十一面とは當前の三面は寂靜の相、右邊の三面は威怒の相、左邊の三面は利牙出現の相、後の一面は怒笑の容、最上の一面は如來の相なり、頭冠に各の化佛あり、種種の瓔珞を以て其の身を莊嚴す、蓮花部の聖衆及び護世大威徳天等悉く圍繞せり。

○根本印二手右、左を押し外に相刃へ合掌し、印を以て頂上 曩謨羅怛曩怛羅夜也、一曩謨阿哩夜訖シヤニ 曩二娑譏羅、吠路者曩尾隄ニカラン 也但他引曩多引夜、羅訶ニ 帝三藐三沒馱引也、曩莫薩嚩怛他藥帝毘庾、二羅訶帝毘藥、二三藐三沒第毘藥、二曩莫阿引哩夜合 囉路

積帝、濕躡合避也、冒地薩怛嚩引也、摩訶薩怛嚩引也、摩訶迦引嚩尼迦引也、怛儻也、  
他。

唵、娜羅娜羅、地理地理、度嚩度嚩、壹知嚩知、者隸者隸鉢羅者隸鉢羅者隸矩蘇銘、  
矩蘇摩、嚩隸、壹哩、弭哩止哩止哩、致惹羅摩、跋曩也、跋羅摩秣駄、薩怛嚩、摩訶  
迦嚩尼迦、娑嚩賀

(二) 唵云云 原本  
梵字、對譯文字は  
諸家眞言集に出づ  
といふ。

○心眞言 (一) 唵嚩鷄入嚩囉訖哩 或は眞言を以て小呪に用ふ。 唵命三身の摩訶大な  
迦嚩尼悲な迦也種な莎哥速疾の義

不空絹索經第四に曰く 十一面觀世音の印は、頭指・無名・小指を以て大母指を掘し拳  
に作り、拳面相合せ、面目熙怡して大悲心を發す印なり。

眞言に曰く 唵譚麟婆娑泥婆羅臬娜合綰野吽。此の印三昧能く一切明を祐け成就し、  
法として障碍する所なし云云 ○梵號 阿利也翳迦娜奢母佉 ○密號 變異金剛。

(三) 指 一本に相  
に作る。又の一本  
になし。

集經第一に云く 二中指を直く豎て、頭指を直く豎て、二頭指を直く豎て相去ること四寸  
半、二大指を並べ直く豎て、二無名相去ること一寸八分、二小指直く豎て相去ること五  
寸、頭指來去し呪七遍し、已て頭指を漸屈して掌に入れ禮拜す、奉請の作法亦た前に説

くが如し。

呪に曰く 唵阿囉力、二莎訶三

集經第四に云く (朱) 玄井所譯の經の像と 白梅檀を用て十一面觀世音菩薩の像を作れ、長け佛  
集經の像と略同じきか。

(一) 一肘 玄井の  
經に曰く一探手  
半。

(二) 一肘若し人肘量ならば二肘一探、若し得ずんば一尺三尺に之を作るも亦た得、十一  
面を作り當前の三面は菩薩の面に作り、左の(三)相三面は當さに瞋面に作るべし、右の  
相三面は菩薩の面に似たり、狗牙上さまに出づ、後に一面あり、當さに笑面に作るべ  
し、其の頂上の面は當さに佛面に作るべし。其の十一面各の花冠を戴く、其の花冠の

中に各の一阿彌陀佛を安す、其の像の左手には一澡罐を把り、其の澡罐の口に一蓮花  
を挿む、右臂は垂下し、其の右手を展べ、以て瓔珞を串く、施無畏の手、其の像の身

上に瓔珞を刻出し種種に莊嚴せりと文り 又た曰く 牛黃を用ひて草葉に置き像前に在  
け、心印を用ひ呪八千遍して煖水を和し身を浴するに、諸の惡事みな除くる。

又た曰く 他方の怨賊來て境を侵さんと欲せば、此の像の面を以て彼の賊の來る所に  
向へ、種種の香花食供に烟支を取り、大さ大豆の如し、呪を誦すること千八遍し已て、

像の左相の瞋面上に塗れ、賊をして前進すること能はざらしめむ。

又た曰く、人自ら身に障難あることを知らば、種種の妙香を相和し像に塗り、復た香水を以て其の像を洗浴し畢り還た水を收め取り、像に對ひ水を呪すること百八遍して自身の體に浴し已れ、障難悉く消滅せん。

儀軌に曰く、白月十四日或は十五日に、爲めに我れ一日一夜食はず、清齋念誦せば四萬劫の生死を超ゆ、一切の有情纒かに我名を稱念せば、百千俱胝那庾多の如來の名號に超稱し、皆な不退轉なることを得、一切の病患を離れ一切の天死災橫を免れ、身口意の不善の行を遠離す、若し能く教に依り觀行に相應し作意せば、佛・菩薩掌中にあるが如しと文り、軌に云く時に觀世音菩薩無量の持明仙が與めに圍繞せられ世尊の所に往詣す、佛所に至り已て頭面禮足し、右に世尊を遶ること三通して一面に退き坐し、佛に白して言さく、世尊、我れ心密語を有てり十一面と名く、十一俱胝の如來同じく共に宣説したまへり、我今之を説かん。一切の有情を利益し安樂にし、能く一切の疾病を除き諸の不吉祥夢を止め、及び非命を制す、不淨信の者は淨信ならしめ、能く一切の障、尾曩夜迦を除いて心に希望する所皆な悉く稱遂せん、故に我れ天世・魔世・梵世を見ず、沙門・婆羅門衆に於て此の心陀羅尼を以て加持し救護し攝受せば、息災吉祥にし

て治罰を免れ、刀杖毒藥を離る、故に若し能越の者ありといは、其の處あることなし、唯だ宿業不決定心受持の者をば除く、此の眞言は一切如來稱讚し護念し一切如來隨喜したまふ、世尊、我念ずらく、過去殊伽沙等數の劫を過ぎて後ち如來あり、名けて百蓮華眼髻無障礙力光王如來と曰ふ、我れ爾の時に有て大仙人たり、彼の如來より此の心密語を授けらる、纒かに授け得已て十方の一切如來前に現じたまふ、一切の如來を見上るを得るが故に便ち無生法忍を獲得す。此の眞言は是の如く大功德藏なり、若し善男子・善女人有て、淨信心懇重心を以て憶念作意するに、現世に十種の勝利を得。何等をか十となす、一には諸の疾病を離る、二には一切の如來攝授す、三には任運に金銀・財寶・諸の穀麥等を獲得す、四には一切の冤敵沮壞すること能はず、五には國王・王子王宮に在て先<sup>さき</sup>ちて言ひ慰問す、六には毒藥・蟲毒・寒熱等の病に中らず、皆な身に着かず、七には一切の刀杖箭害する能はず、八には水溺する能はず、九には火燒くこと能はず、十には非命中天ならず。又た四種の功德を獲。一には命終に臨まん時に如來を見上ることを得、二には三惡趣に生ぜず、三には非命終せず、四には此の世界より極樂國土に生ずることを得と文り。

(二)契 或は契に作る。

(二)西 異本に西に向へに作る。

軌に曰く 復た次に密語とは、月蝕の時に於て蘇一兩を取り銀の器に置き、像の前に對ひて密語七遍を誦するに、自(二)契及與(二)他(二)の一切の疾病みな除愈することを得、況んや能く初蝕より及び月復た盈滿するに至るまで念誦を絶さずば悉地を獲んと文り。  
軌に曰く 復た濕縛縛訶の密言を以て水を加持すること七遍して地に灑ぎ、夜は應さに息災護摩を作すべし、面を北に向へ心中密言を用ふる一百八遍と曰ふ。唵侯引欠。地を取ることに意に隨て大小、或は九肘十三肘或は十六肘、深く掘て膝に刺れ、其の地中を除けば過患平治す、地分九分となし、中央に於て七寶・五穀・藥等を置き好き時日に印密言を以て加持し、則ち應さに十方界を結すべし。  
軌に曰く 道場中に於て全身舍利塔、東面に本尊の像を安し、像面を(二)西にし、應さに先の行法を習ふべしと文り。  
軌に曰く 觀自在菩薩通増益の法、護摩の時、觀自在・大勢至を迎請し、義成就大威德者は爐の東邊に於て安置し、並に持明仙一切藥及び吉祥天は爐の南邊に置くべし。又た爐の北邊に於て佛並に諸の不退轉の菩薩・梵王並に訶利底母を安し、求増益成就者を應當に供養すべしと文り。

(二)觀想せよ 已下道場觀。

〇〇不空絹索

(二)觀想せよ、樓閣の中に八葉の大蓮華臺あり、花臺の上に月輪あり、月輪の中に護字鉢或は鉢あり、變じて絹索或は蓮華となる、絹索變じて不空絹索觀世音菩薩と成る、首に花冠を戴く、冠中に阿彌陀佛あり、三面四臂にして通身肉色なり、右の手に念珠を持し、次の手に寶瓶を持し、左の手に蓮華を持し、次の手に絹索を持し、鹿皮を以て袈裟となし、七寶を以て衣服となし、珠瓔環釧をもて種種に莊嚴して赤蓮華に坐し大光明を放てり、及び蓮花部の諸尊乃至無量の仙衆、前後に圍繞せり。

(三)〇根本印二手蓮花合掌して、進・力・禪・智・金剛縛し、右手の禪度を左手の虎口の中に入れよ。眞言に曰く 唵、阿謨伽云 跋娜摩二合引捨矩嚧合駄、羯羅灑野、鉢羅二合吠捨野、三摩賀跋輪上跋底丁以の二合野麼囉嚧拏、上矩吠引前囉五沒囉憾摩二合吠灑駄囉、二合跋娜麼二合矩囉、三去摩琰引吽

義淨譯經第三卷に曰く 根本印二手虛掌にして二頭指を屈して中指の側上第一節の文に當て、其の二大姆指相並べて平に押す、此の印能く一切佛菩提の法門を攝め亦た能く觀世音菩薩を請召するに來て護念を加ふ、印眞言

唵旃暮伽上弭短喇弭跢二綫縵鞞路迦耶唎三室同上履野特二合婆同上比瑟耻鞞四暮伽頭合米五者羅散者羅六吽吽七

(三)根本印 朱註に云く千手の軌之に出すと。



不空陀羅尼自在王の呪同經同卷に云くに出づ南謨囉哆那怛羅夜耶南謨阿唎耶阿彌哆婆耶怛他樂多耶南謨阿唎耶跋囉訶帝失筏羅耶菩提薩埵耶摩訶薩埵耶摩訶迦囉尼迦耶怛跌他唵阿暮伽鉢羅底喝多鉢鉢泮吒娑婆訶

是の如くの所説は、不空陀羅尼自在王の呪、即ち是れ一切秘密神呪の主なり、若し人ありて能く此の神呪を誦して之を成就せば、即ち能く一切の神呪に通達す、但し是の呪は諸の所有の事業みな圓滿することを得と文り。

○隨作事成就真言不空羅素心呪王經上卷に出づ唵、阿暮伽、毘闍耶、泮泮吒

隨て何事を作すにも、若し此の呪を誦せば、悉くみな成就す。

○秘密小心真言世經第二卷に出づ唵、一鉢頭摩陀羅、三阿暮伽惹野泥、三主嚕主嚕、四莎母

○心真言 唵、阿暮伽、鉢羅底喝多、鉢泮吒。三卷經上卷成就畫像積法分第四

に曰く、聖觀自在菩薩の形像を畫け、其の身黃白にして首に華冠を戴き、紺髪を分けて兩肩に被り、前後慈顏和悅して百千光を放つ、清淨殊勝にして面に三目あり、純白の纒を以て肩臆に交絡し、鬘泥耶鹿王の皮を以て肩を覆ひ、莊飾の帶を以て其の腰に繋く、尊者の四臂、左邊の上手には蓮花を執持し、下手には深瓶を執持し、右邊の上手

(二) 唵云云 原本は梵字、對譯文字は不空羅素自在王呪經上卷に出づ。(三) 鉢頭摩陀羅 原本には鉢頭とあり。今所譯本に隨ふ。

(二) 頂 一本に頂上に作る。

は施無畏、下手には數珠を執る、皆な珍寶を以て而も嚴飾す、身には天衣を着け、蓮華上に立つ、大威徳あり、瓔珞端長にして交へて膊を垂下し、耳瑠臂印及び環釧皆な寶飾なり、之の(二)頂に無量壽佛を畫作し、其の項内に於て種種の華を畫け。

中卷に曰く 若し狂横及び諸の灾厄、或星は惡相を現じ、若しは王難闘諍飢饉の事あらば、應さに牛乳を以て鹽に和し之を呪すること一遍一燒す、是の如く呪を誦し或は一日或は三日すれば、一切の惡事即ち自ら銷滅せん。

下卷に曰く 若し信者有て呪を以て方便して而も之を調伏するに能く菩薩種種の神變を現じ、所作吉祥善巧方便すれば無病長壽にして諸の煩惱を滅し、五無間業を離れ、復た能く厄難灾障を消滅し、能く疫病を除き及び能く呪起死屍鬼魔鬼及び惡徵祥毒藥瘡痔瘻等を除く、寒遠陀鬼・影鬼・小兒鬼は呪力に由るが故に害をなす能はず、復た色力を得て富貴自在にして身心を安樂にし、智慧聰明にして大威徳あり、衆人敬愛し面貌端正なり、若し尊者聖觀自在菩薩不空羅素心呪王法を成就することを得れば、即ち是の如く無量の功徳を得、所求皆な得。玄井所譯の一卷經に曰く闍那彌多所譯の經所出の圖像大都之に同じ應さに復た觀自在菩薩を畫作せよ、大自在天に似て頂に鬘髻あり、首に花冠を冠り、鬘

涅邪皮を左肩上に被、自餘の身分瓔珞環釧をもて而も莊嚴となす。

義淨所譯經第一卷に曰く、不空羼索觀世音菩薩の前に法の如くにして坐し、燒香供養し菩薩の面を瞻て誦すること七遍或は一百八遍せよ、世尊當さに知るべし、是の人現世には則ち二十稱歎の功德勝利を得。何をか二十と名くる。一には身に衆病なし、若し業病あらば速かに除差せしむ。二には身膚細軟にして姝婉好し。三には恒に衆人のために愛敬せらる。四には六根常に定り財寶自然なり乃至經文を見るべし。二十には當生の處には四無碍心を具す。世尊又た八法あり、何をか名けて八とする。一には命終に臨まん時、觀世音菩薩自ら身を變現して沙門の相と作り、善く二權導師として將さに佛刹に詣せん。二には命終に臨まん時、體疼痛せず、去住自在にして禪定に入るが如し乃至經文を見るべし。八には命終に臨まん時、佛刹に生ぜんと願するに、願に隨ひて諸佛の淨土に往生して、蓮花化生して常に諸佛菩薩を親たてまつり、恒に退轉せず。

○如意寶珠真言印あり 唵旃暮伽摩拏摩拏摩訶摩拏三鉢頭麼麼拏四莎母五

當さに不空圓滿六波羅蜜の事業、不空示現一切諸佛菩薩神通解脫曼荼羅業、不空淨治五無間業を獲べしと文り。

(二)權 一本に催に作る。

又た曰く、眞金色の身、顔貌熙怡にして左手を胸に當て、金蓮華を執り、右手は珠を拈り、結跏趺坐す、一切莊嚴の身、故に種種奇特光明ありと文り。

第三卷に曰く、不空羼索觀音變じて大梵天の身相と作る云云

第五卷に曰く、金或は銀を以て不空羼索觀世音菩薩の身を鑄よ、長け八指量手に取て

兩把の三面兩臂なり、正面は慈悲、左面は大嗔怒にして目を怒らし口を張る、右面微嗔して眉を嘖め口を合せ、首に寶冠を戴く、冠に化佛あり、左手に羼索を執り、右手は掌を揚ぐ、七寶の瓔珞・環・釧・天衣をもて而も之を莊嚴し、蓮華座に坐す。

第八卷に曰く、純金をもて像を造れ、三面六臂なり、正面は熙怡、左面は眉を嘖め目を怒らし口を張る、狗牙上さまに出づ、右の面は眉を嘖め目を怒らし口を合せ、首に寶冠を戴く、冠に化佛あり、一手には蓮花を執り、一手には羼索を執り、一手には三叉戟を把り、一手には瓶を執り、一手は施無畏にし、一手は掌を揚げ結跏趺坐して蓮華座に坐す、其の座の山上の天、諸の衣服・寶瓔・環釧をもて種種に像を莊嚴す、腹内の空には白栴檀香の末、龍腦香の末を以て佛舍利に和して像の腹中に内れよ、是の像を作らば無量の菩提善根を成ずることを得、何に況んや廣大に是の法を具修せば、而も最

上にして大成就を得、是の人當さに八十八殊伽沙俱胆那庚多百千の如來を見上ることを得、恭敬供養して諸の善根を種うるに、十惡五逆四重の罪を除滅せん。

義淨譯經第八に曰く 一面三目十八臂、身真金色にして結跏趺坐す、面貌熙怡にして首に寶冠を戴く、冠に化佛有り、二手は胸に當て、合掌し、二手は臍に當て、倒垂合掌し、二大指を以て掌中に雙べ屈し、二手心下に腕を合せ、左手の五指各の散して微しく屈し蒙開蓮華にす、右手の大指中指の頭と相捻し、其の頭指・無名指・小指各の散して微しく二手を屈し、臍下に羂索の印を結び、一手には三刃戟を把り、一手には寶幢を把り、一手には開蓮華を持し、一手には不空梵甲を執り、一手には羂索を把り、一手には金剛鉤を執り、一手は施無畏にす、花盤鹿皮の衣を被、七寶の瓔珞、天の諸の衣服・珠・銀釧をもて而も之を莊飾し、身に光焰を佩びたり。

第十六に曰く 銀の蓮華を作り、一肘の鏡を以て蓮華臺となし、而も寶珠花鬘をもて四椽を莊嚴し、法の如く銀にて一尺二寸の不空羂索觀世音菩薩を造れ、一面三目、身に四臂あり、一手には三戟を執り、一手には羂索を持し、一手には蓮花を執り、一手には如意珠を掌にす、結跏趺坐し首に寶冠を戴く、冠に化佛の像あり、腹内空にして

舍利百粒、龍腦香・白旃檀香を腹中に内る、花冠・瓔珞・耳瑠・銀釧、天の諸の衣服をもて種種に莊嚴し、鏡を心上に置くと文り。

第二十二に曰く 不空王觀世音菩薩の身量、横量十六指數、三面六臂なり、正中の四面は慈悲熙怡にして大梵天の面如し、眉間に一眼あて首に天冠を戴く、冠に化佛あり、左面目を怒らし畏るべし、眉間に一眼、鬚髮聳え堅ち首に月冠を戴く、冠に化佛あり、右面は眉を嘖め目を怒らし狗牙上さまに出づ、極大に畏るべし、眉間に一眼、鬚髮月冠前の如し、一手には羂索を持し、一手には蓮花を執り、一手には三刃戟を持し、一手には鉞斧を執り、一手には如意寶珠を把ると文り。

第三十に曰く 不空羂索觀世音菩薩身色相好、大梵天の如し、面に三目あり、首に寶冠を戴く、冠に化佛あり、身に四臂あり、一手には三刃戟を執り、一手には羂索を把り、一手には蓮華を執り、一手は掌を揚げて半跏趺坐すと文り。

法三胎記に曰く 四手三面にして三目あり、右邊の面は青色、左邊の面は綠黑色なりと文り。

興福寺南圓堂の像は一面三目八臂と云。執物威儀等尋ぬべし、彼の像に圖するか。

○観想せよ 巳  
下道場觀。

○如意輪

○観想せよ、心前に梵字あり、字變じて七寶の宮殿樓閣と成る、珠寶瓔珞を垂れたり、四面に階道あり、寶樹而も行烈す、其の壇場の中に龕字あり、變じて紅蓮花と成る、花臺上に梵字あり、變じて滿月輪と成る、上に龕字、左右に季季字あり、三字變じて金剛寶と爲る、金剛寶變じて如意輪觀音となる、身色黄金にして六臂を具足す、冠中に自在王あり、説法の相に住す、千の光明を流出して六道四生を照す、右の第一手は思惟、有情を愍念する相なり、第二手には如意寶を持つ、一切の願を満さんが爲めなり、第三には念珠を持つ、傍生の苦を度せんが爲めなり、左の第一手には光明山を按ず、成就して傾動することなし、第二には蓮花を持つ、能く諸の非法を淨む、第三手には輪を持つ、能く無上の法を轉ず、六臂廣く博げ體は能く六道に遊ぶ、大悲方便を以て諸の有情の苦を斷ず、八大觀音及び蓮花部の無量の聖衆前後に圍繞せりと云云

○根本印 掌を平にして心に當て、忍・願・蓮葉の如くし、進力摩尼の狀にして、密言に曰く 曩謨、羅怛曩、二合羅夜引野、曩莫阿去哩也引 囉路引 枳帝、濕囉引野引地薩怛縛引二合野、摩訶引薩怛縛引二合野、摩訶引迦引嚩提迦引野怛囉也他、引唵、斫羯羅合鉢囉舌無底、十振摩引摩

尼、十一摩訶引鉢娜銘、二合嚩囉底瑟陀、二合入縛合擗、十三阿去羯囉灑合野、十四唵發吒、薩囉引二合賀引十五

○次に○結心秘密願の根本印に依て戒・方・檀・惠を結ぶ、名けて本心印となす、一切の諸の願、唵鉢娜迷、合振摩泥入縛合擗

○次に隨心印を結ぶ 二手堅固縛にし、の形にせよ、禪・智・を並べ申べて、戒・方・亦た舒べ直くせよ、檀・惠を相交へて堅てよ、此の心中心 唵囉羅娜、鉢娜銘、二合野、合野、○梵號 阿里也振摩泥 ○密號 持寶金剛字輪觀



○字輪觀なり。

○結一本に縛に作る。

二儀軌に曰く

先づ其の弟子を擇べ 族姓にして敬法の者 多人に敬愛せられ智慧あて勇進し  
決定して毗離耶し 覺惠あて常に捨てず 孝を父母に盡し 三寶を淨信し  
樂つて菩提の行を修し 四無量心に於て 刹那も間あることなく 常に大乘の  
法を樂ふ。

又た云く

行人西に面つて 自在王を漫提せよ 次に餘方の佛を禮し上れ 五輪を以て地  
に著て

教の如く敬禮せよ。

又た云く

四時或は三時にせよ 此の法は後夜勝れたり 如意輪經の中に 本教にして佛  
の所説なり

若し是の如く修習せば 現世に初地を證し 此を過ぎて十六生に 無上菩提を  
成ず

何に況んや世の悉地 現生に意の如くならざらんや  
又た云く

此の大悲の儀軌は 日と及び宿と 時食と澡浴と 若し淨と不淨とを擇ばず。  
義淨所譯經に曰く 若し善男善女等あつて發心し、此の生に報を現ずることを希求せ  
ば、應當に一心に此の呪を受持せよ、受持せんと欲する時は、日月星辰吉凶を問はず、並  
に別して齋戒を修せ、亦た洗浴及び淨衣を假らず、但し心を止攝し口に誦して懈らざ  
れば、百千種の事所願みな成す、更に無明呪は能く此の如意呪王と勢力齊しき者を得、  
是の故に先づ當さに諸の罪障を除くべし、次に能く一切の事業を成就し、亦た能く無  
間の獄の五逆重罪を受けず、亦た能く一切の病苦を殄滅し、皆な除差することを得、  
諸の熱病あり、或は晝、或は夜、或は一日の瘡乃至四日の瘡、風黃痰癘三集嬰纏癩惡  
瘡、其の身を周遍し、及び眼・耳・鼻・口・腹・腰・頭面等の痛、支節の煩疹、半身不隨、腹  
脹塊滿、飯食不銷、頭より足に至る但だ是れ疾苦、是の如くの病等、呪を誦せば便ち差  
ゆ、若し他の魘魅蟲毒あらば悉くみな銷滅し復た遺餘なし、若し藥及惡魔鬼神諸行惡  
者あるも皆な便を得ず、亦た刀仗兵箭、水火惡毒惡風雨電雹劫盜能くするなく、及

び、其の身横死あることなし、來て相侵害する諸の惡夢の相、蛇蝎等の虫、諸の惡毒獸、虎狼獅子悉く害すること能はず、兵戈戰陣みな勝利を得、若し一遍を誦せば、如上の諸事悉くみな意を遂ぐ、若し日々に誦すること一百八遍すれば即ち觀自在菩薩を見たてまつる。告げて言く、善男子、汝等怖るる勿れ、何の願を欲求するも一切汝に施す、阿彌陀佛自ら其の身を現じ、亦た然樂世界を見る、種種に莊嚴すること經に廣く説くが如し、並に極樂世界の諸菩薩衆を見、亦た十方諸佛を見、亦た觀自在菩薩所居の處、補怛羅山を見るに、即ち自身清淨なることを得、常に諸王・公卿・宰輔のために恭敬し供養せられ、衆人愛敬し所生の處に蓮華化生し衆相具足す、所生の處に在ては常に宿命を得、今日より始めて乃し成佛するに至るまで惡道に墮せず、常に佛前に生せん。爾の時に觀自在菩薩、佛に白して言さく、世尊、此の旃檀心輪陀羅尼は我が所説の如し、若し至誠心あつて憶念する所能く受持せば必ず成就するを得、惟だ須らく深く信じて疑を生ずることを得ざれ。

實思惟所譯經に曰く、若しは貴、若しは賤、若しは男、若しは女、沙門外道、其の名字を稱し心を住め念を繋けて呪を誦すれば、應さに後夜若干明の時を以て、男最貴の者

は一千八遍、女最貴の者は一千十遍、第二貴の男は八百遍を誦し、第二貴の女は七百遍を誦し、第三の貴女は六百遍を誦し、若し婆羅門ならば五百遍を誦し、刹利は四百遍、首陀は三百、毘舍は二百、比丘は一百八遍、女人は一百三十遍、丈夫は一百五十遍、童男は六十遍、女は九十遍せよ、此の念誦の法に歸依せざるなし、百由旬迅疾なること風の如し、八百遍を誦せば觀音の眞身現前し、一切の所願を見て皆な能く之に與へしむ、一切の衆生明呪成就し、十千遍を誦せば聖者執金剛眞身現前して呪者をして見ることを愛子の如く鞠養して、一切の明呪を把持するに皆な成就せしむ。凡そ欲願する所あらば之に與へ、誦十三遍を滿さしめば、一切の諸佛如來を見たてまつるを得、七日を誦し滿せば、諸の呪仙王みな眞身を以て呪者の前に現じ、各の所成の明呪を以て授與し其の形を隱蔽し隨逐擁護し、一切安樂にして前に見れざるなし。

如意輪觀門義註の祕文に曰く

(一) 曩謨歸命の義、囉怛曩義、怛囉夜野三寶の義、曩莫稽首の義、阿里野嚩路枳諦聖觀、濕嚩囉耶自在、冒地薩怛嚩野菩薩、摩訶薩怛嚩野大勇猛道心の者、摩訶迦嚩拏迦野大慈悲者、怛爾他所謂る如來藏を開、唵とは其の字三身の義を成するなり。阿汗摩の三字を以て一字を成するなり、阿いて眞言を説く、唵とは其の字三身の義を成するなり、とは汗身、汗とは報身、摩とは化身なり。

(二) 曩謨歸命の義、囉怛曩義、怛囉夜野三寶の義、曩莫稽首の義、阿里野嚩路枳諦聖觀、濕嚩囉耶自在、冒地薩怛嚩野菩薩、摩訶薩怛嚩野大勇猛道心の者、摩訶迦嚩拏迦野大慈悲者、怛爾他所謂る如來藏を開、唵とは其の字三身の義を成するなり。阿汗摩の三字を以て一字を成するなり、阿いて眞言を説く、唵とは其の字三身の義を成するなり、とは汗身、汗とは報身、摩とは化身なり。

但し儀軌の文と多少相違せり、取意なるべし。

此の三字實相に契ふに由りて、即ち一切如来ジャキヤヲを稽首禮し、亦た如来無觀頂の義を成ず。斫羯囉鉢哩底ジャキヤヲ能轉無上法輪の義、亦た摧破の義、震鈔末泥シツゴ思惟實亦た如来實の義、實に六種有て能く衆生の願を満ずる故に、摩訶鉢那麼大蓮花は諸の非法を淨むることを表す、本と染ならざる故に、嚧々離塵垢の義二種あるが故に重稱するなり。一には内塵即ち五根なり、一には外塵の五境なり、二塵みな所得なし、以て方便となり瑜伽の觀智を成ず、底瑟吒チシユカ、住の義亦た無住の義、無住は以て一切法の本となす、亦た無住涅槃と云ふ、大智に由るが故に生死に著せず、大悲に由るが故に涅槃に住せず、入嚧囉熾燃ジツラの義、光明法界に遍滿して聖衆を驚覺するに降集して普く赴かじめ、下も一切の天龍八部諸の有情類を召して利益し加持する故に、阿羯囉野諸召アキヤヲの義、此に由りて諸佛菩薩天龍八部を請召すれば、召に應じて至て、悉くみな雲集して加持護念し玉ふ。吽字とは一切の法無因の義なり、亦是菩提道場と言ふ、即ち菩提道場に座して正法輪を轉す、此に由て此の眞言の一字に相應するときは則ち能く一切の佛法を證悟す、念念に佛法を證悟するの時、薩般若智を具して直ちに究竟に至り、金剛座に坐し、四魔現前する時は即ち大慈三昧に入て四魔を降伏するが故に則ち正覺を成ず。泮字是れ破壊の義、摧壞の義、成佛を得る時四魔を摧くなり。吒字、是れ一切の法、無所得の義、

梵書の形ち半月の如し。釋して云く、一切我無我なり、無所得を以て方便となして則ち生空を成じ、生空は半なる故に。薩嚩、是れ無言説の義、即ち法空の智を成ず、滿字の義なり、亦たは大福德成就の義といふ。訶字、是れ煩惱を斷ずる義、諸の有情をして煩惱を斷害し災禍を除遣す、見る者歡喜し、命終に臨まん時、極樂世界に生じ、蓮華化生して無量壽佛を見たてまつり、正法を聽聞して頓に菩提を證す。

〇〇白衣

壇の中に咒字あり、變じて月輪と成る、月輪の中に糞字あり、變じて蓮花臺と成る蓮花臺の上に糞字或はあり、變じて鉢曇摩花鉢曇摩花と成る、鉢曇摩花變じて白衣觀自在菩薩と成る、首に天冠を戴き身に素衣を着く、左手には念珠を執り、右手には印文を持す、足は白蓮華を踏めり、光明赫奕たり、乃至無量の聖衆前後に圍繞せり云云。

此れは是れ蓮花部母、白は是れ本淨菩提心、蓮華の種子含藏せらるゝ處、萬德莊嚴此れより出生する故に以て名と爲す。

○根本印二手内轉して二頭指眞言に曰く、唵濕吠帝、濕吠帝、半拏羅、縛悉彌、莎母。

(二)壇の中云云  
道場觀。

不空羂索經第四に曰く 大白觀世音菩薩の印 合掌して其の掌を下に開くこと一寸、二頭指・二中指の堅て、頭指の側に掲げ、上相去ること一寸、二小指各の堅て、微しく屈し、頭相去ること八分、真言に曰く 唵一摩訶去鉢頭二合迷二濕廣諸倪三虎

鳴虎嗜四莎母 此の印三昧能く兼法を集め速證成就す。同經第八に曰く 左手脇上に掲げ、掌を仰けて未敷蓮花を執り、右手側に掌を揚げ半跏趺坐す。

九曜息災大白衣觀音陀羅尼 西天竺の僧、金伊陀撰 若し日月人の本命中に在り、及び五星本命宮に在て闘戰し度を失するに大息災を立つべし、觀音或は文殊・八字熾盛光佛頂等の道場、

各の本法に依て念誦せば、一切の災難自然に消散するなり、一切の曜不吉祥ならば、此の真言を誦せ、能く吉祥ならん、真言に曰く

曩謨、羅怛曩、二合但囉二合夜野、二曩莫素麼薩羅囉二合諾訖囉二合但囉二合連引惹上野者去都地波、阿引路迦囉野、但囉也二合他唵弩麼底、跋弩摩底、薩賓上備、佉上細莎母 大白衣觀自在菩薩

○印 二手内に相双へ、進力二度合せ整て微し 真言に曰く 曩謨囉但曩二合但囉二合夜引野 娜莫阿引

哩野 嚩路引 枳帝濕嚩二合囉引野 二冒引地薩但嚩引 野 三摩訶引薩但嚩引 野 四摩賀引迦引

嚩拏迦引野 五但囉也二合他 去引 濕吠二合帝 七引 濕吠二合黨引 覺引 濕吠二合多上 部惹 惹曳の反 九濕吠二合

多縛 無獲の反 悉但囉引 十合 濕吠二合多麼引 囉楞 去聲 訖哩 二合 帝引 惹 惹曳の反 曳尾惹 上に准ず 引 十二 阿上爾

帝引 阿上 跋囉引 爾帝 十四引 薩嚩悉駄 娜莫娑訖哩 二合 帝 十五引 唵 裏 旃里 枳里 十六合 羅 捨野 娑

引 駄野 娑嚩 二合 賀 去引

○多羅菩薩 千手軌に出づ

○印 前の大白衣印に准ず、進力・頭の相合せ針の如くせよ、即ち成ず 真言に曰く 曩謨羅但曩二合但囉二合夜引野、一 娜莫阿引

哩野 二合 嚩路引 枳帝濕嚩二合囉引野 三 冒引地薩但嚩引 野 四 摩訶薩但嚩引 野 五 摩賀引 迦引

嚩拏迦引野 六 但囉也二合他 去引 唵 弩麼底 八後同 唵 跋弩摩底 九合 賀 十引

胎藏に曰く 歸命就多嚩哆履拏莎母。 ○種子才 或は才 又は才 ○三昧耶形 青蓮華 已に開き却て是を合す ○梵號 阿里也 多嚩 ○密號 悲生金剛 亦大行願金剛

或は呪本あり、曰く 哆姪他唵多唎多唎咄多利咄嚴婆訶 此れは是れ墮羅僧達磨木及、口に常に誦する所たり。

復た呪の本あり、曰く 哆姪他多利多利咄多利咄嚴婆訶



唵の字なきは是れ南天竺の僧、阿地崛多の翻出。

又た一本あり。多哇他多利咄多利咄多利咄多利莎婆訶

此れは是れ古來の大徳翻出、別に一巻あり。

亦た一本あり。唵哆姪他多唎多唎都咄唎咄唎咄唎駟婆娑

此れは是れ罽賓國の僧、達磨商陀口に常に誦する所、兼ねて梵甲にあり。

多羅念誦法に曰く

即ち妙蓮を觀じて本尊と爲す 其の身淨滿綠金光

摩尼の妙寶を瓔珞となす 寶冠あて首に無量壽を戴けり

右に殊勝與願の印を現じ 左は定手を以て青蓮を持す

三昧に住して月輪に處し 普ねく慈光を放ちて三界を照す

次に根本青蓮の印を以て 心・額・喉・頂を遍ねく加持す。眞言に曰く 唵多唎咄多

利吽

又た曰く 次に本尊根本の印を結び、印を以て自心の上を加持す、二羽智拳印にし相背け、進・力・禪・智堅て相合せよ、眞言に曰く 唵鉢娜麼多唎吽

又た曰く 次に字門を以て己身に布し、唵字を頂上に、多を額に安し、嚩字を二目、咄は兩眉、哆字を心に當て、梨を齋に當て、咄字二脛、唎二脛、薩縛右足、訶左足、四明、尊を引いて己身に入る、此を以て無二の體を加持し、應さに青蓮根本印を結び、蓮花百字の明を稱誦すべし、定惠の二羽内に相及へ、進力・禪智堅て、相拄ふること前印に同じ。觀自在隨心呪經に曰く 阿唎多利心呪根本及び印壇法、是の呪の威力不可思議にして世間を安樂にし、多く饒益せらる、若し天人有て之を受持せば、所有る怨對惡障怖畏みな悉く止息し、一切の外道の禁呪碎け散して害をなす能はず、心の所願に隨て一切の善業皆な成辨することを得と文り。

又た曰く 若し毎旦起きんと欲する時、淨心を以て手を洗ひ口を嗽ぎ呪を誦し、衣三遍を呪し訖て着すれば、所行往處、坐臥の處に禍對に遇はず、惡神見て即ち遠離し、惡人百步敢て害を興さずと文り。

疏第五に曰く 多羅菩薩は是れ觀自在三昧の故に女人の像と作る、多羅は是れ根の義、青蓮華は是れ淨無垢の義、是の如くなるを以て普眼をもて群生を攝受す、既に不先時亦は不後時、故らに中年の女人の狀と作り、太老太少ならざるなり。青は是れ降伏の

色、白は是れ大悲の色なり、其の妙は二用の中に在り、故に二色をして和合せしむ、是義を以ての故に青ならず白ならざるなり。其の像合掌するの掌中に此の青蓮花を持し、手面を觀音に向へ微笑の形の如し、通身圓光あて淨金色の如し、被服は白衣なり、首に髮髻あり、天髻の形を作す、大日の髮冠には同じからざるなり。

〇毘俱胝

〇印前の多羅の印に准ず、進・力・微しく屈して蓮葉の如くせよ、即ち成ず。千手軌に出づ。眞言に曰く 曩莫薩嚩怛他去引嚩帝引毘嚩二合曩二合毘樂二合三藐去二母第引毘樂二合唵婆野曩引捨賴三但囉二合薩賴怛囉二合娑野但囉二合細引鼻哩二合矩胝怛胝五吠同反引但胆吠上但胆六吠囉胆吠引囉胆七濕吠二合帝惹致賴二合唵二合賀引

胎藏に曰く 歸命薩嚩佩也但羅二合散爾爾入併娑破二合吒也三莎母

〇種子 畢利ヒリ或はズ 〇三昧耶形 數珠シユシユ

〇梵號 阿里也畢利俱地 〇密號 定惠金剛。

〇〇葉衣又別行法あり。

壇中に卍字あり、變じて八葉の蓮花と成る、其の上に卍字あり、月輪となる、月輪の中に卍字あり、變じて吉祥菓或は彌索、或は仗、或は鉢斧、或は未數蓮華。となる、變じて葉衣觀自在菩薩と成る、形ち天女の如し、首に寶冠を戴く、冠中に無量壽如來あり、瓔珞環釧をもて其の身を莊嚴す、背後に圓光ありて四臂を具足す。右の第一手は心に當て吉祥菓を持す、第二手は施願に作る、左の第一手には鉢斧を持し、第二手には繩索を持す、蓮花部の聖衆及び二十八大藥及將、並に諸の眷屬、各の本位に住して恭敬し圍繞せり。

〇根本印八葉 根本陀羅尼儀軌にあり 〇心眞言に曰く 唵鉢羅二合拏二合捨嚩哩二合發吒

〇梵號 阿里也伴但羅奢縛利 〇密號 異行金剛。

葉衣經に曰く 時に金剛手菩薩、觀自在菩薩の足を頂禮して、觀自在菩薩に白して言さく、聖者、大悲解脱如幻三昧に住して、能く一切有情の苦惱を除き、世・出世間に利益安樂を興ふ、假使ひ三千大千世界の一切の衆生同時に種種の苦惱及び八難の苦あるも、或は世間・出世の果報を希望するも、若し能く一心に觀自在菩薩摩訶薩の名號を稱念せば、時に應じ大悲の誓願を捨てずして、即ち種種の隨類の身を現じ、能く衆

生の一切の勝願を満てたまふ、亦た能く國界を護持して苦難を拔濟し、能く攝受し養育し吉祥を増長し、亦た能く囚禁の苦刑を遮止し、亦た能く蟲毒鬼魅及び諸の惡病を銷除し、亦た能く陣に臨んで刀杖を禁制し、亦た能く水火の災難を消除し、亦た能く癩瘡呪咀を斷除し、亦た能く方隅地界を結護したまふ。唯だ願くは聖者、未來の一切有情、國王・男女の、若し三寶を淨信し、佛法を護持せんものを哀愍して、王業を相承して斷絶せしむる勿れ、彼等の爲めの故に、軌儀陀羅尼加持方便を説くと文り。  
又た云く 長壽無病を欲求せば、意に隨ひ大小の白氈の上に於て、葉衣觀自在菩薩の像を畫け、前の如く四臂、施願手の下に於て、彼の求願の男女の形像を畫き、其の像を道場の中に置いて、毎日香花・飯食施繞、供養發願し、常に加持するを得ば、其の所願を満てん。

又の法。若し國王の男女、長じ難く養ひ難く、或は薄命短壽疾病纏綿寢食の安かならざるは、皆な宿業の因縁に由て惡宿直を生ず、或は數ば七曜しちやうに本宿を陵逼せられ、身をして不安ならしめば、則ち所居の處に於て牛黃或は紙、或は素を用ひて上に廿八大藥乃將の眞言を書し、四壁の上に帖はれ、先づ東方壁上に於て四大藥乃將の眞言を帖り、

東北角より起首めよ。

又の法は、本尊宿直の像を畫き毎月供養すべし、若し是の如きの法を作さば、其の惡宿直なりとも轉じて吉祥と成る、復た白檀香を以て葉衣觀自在菩薩の像を尅し、並に樺皮の上に於て此の眞言を書し共に帶せよ、若し此の法を作すには鬼宿の直日を取り灌頂を受け、其の灌頂の瓶は緇を以て瓶の項に繫け、香水を満ち盛り、水中に七寶及び五種の藥を着け云云

〇〇大勢至

巨 壇中 道場觀

〇〇壇中に蓮花あり、花臺上に月輪あり、月輪の中に卍字或は卍あり、變じて未敷蓮花と成る、蓮花變じて大勢至菩薩と成る、身相肉色にして相好圓滿す、左手に蓮花を持し右手は胸に當て、地・水・火の三指を屈し、赤蓮花に坐するに、眷屬圍繞せり。

〇印虚合して如來未敷蓮華 眞言に曰く 歸命、三、髻サムサム索、入莎母。 〇梵號 阿里也摩訶薩他麼波羅波多 〇密號 持輪金剛

疏第五に曰く 得大勢至尊は、世の國王大臣の威勢自在の如し、名けて大勢の言をな

(二) 復 傷の字か

す、此の聖者、是の如くの大悲自在の位に至り得るを以ての故に以て名とせり、所以に未敷蓮を持するは、毘盧遮那の實智の花臺既に果を成じ已て、復た是の如くの種子を持し、普ねく一切衆生の心水中に散ずる未敷蓮華を生ずるが如し、此の尊の迹是の處を同うし、亦た能く普ねく一切衆生潛萌の善を護り、敗<sub>レ</sub>復せざらしめ念念に増長す、即ち是れ蓮華部持明王なり。

國譯七卷鈔三終

國譯七卷鈔四

- 普賢延命 ○變染王 ○般若菩薩 ○普賢 ○五字文殊 ○八字文殊 ○虚空藏
- 地藏 ○持世菩薩 ○馬鳴 ○龍樹 ○普通菩薩 ○諸菩薩緣起

○普賢延命

(一) 觀想せよ、須彌山の頂に阿字あり、變じて七寶の宮殿と成る、其の中に唵字あり、變じて八葉の蓮花と成る、花臺の上に四の哦字あり、四大象と成る、象の上に紇哩字あり、八葉の蓮花と成る、上に慾字あり、變じて金剛甲冑となる、而も轉じて金剛壽命菩薩の身と成る、五佛の寶冠を着して二十臂を具足し、諸印を操持せり。

又た云く、八葉座の上に命の字<sub>ハ</sub>あり、五智杵と成る、轉じて本尊金色の相と成る、二十臂を具し諸寶を執持す云云。二手拳にして頭を相鉤す是れ其の印なり。眞言に曰く  
(三) 唵、嚩<sub>レ</sub>囉<sub>二</sub>合<sub>レ</sub>嚩<sub>レ</sub>灑、沙<sub>レ</sub>嚩<sub>レ</sub>賀。讚歎には金剛薩埵讚之を用ふ。

又の印 左手金剛拳に作て左乳の下に當て、其の頭指微しく屈して鉤となし、掌を仰

(一) 觀想せよ 已  
下道場觀。

(二) 唵云云 原本  
梵名、對譯文字は  
金剛壽命陀羅尼法  
所載による。

げて身に着けよ云云 已上の二説は以前の説なるのみ。

○東方天印 左手拳に作り、頭指の中節を屈し、頭小し曲げ大指を以て直く申べ、頭指の上に捻し着くる勿れ、右手亦た同じ、但腕を舉げ下して左臂上に着け、大指來去せよ二腕相交ふるなり呪に曰く 唵一地梨二合多羅上音瑟吒羅二合羅羅波羅三合末駄那莎訶

○南方天 左手掌を平に舒べ、右亦た此の如し、二腕相交へ、二中指鈎し結して索の如くし、二小指・二頭指・二大指各の之を曲げ、頭指來去せよ、呪に曰く 唵一尾嚕茶迦二藥及二合地跛多曳三莎訶

○西方天 左の拳に作り、腕相交へ、二大指頭を以て各の二中指の甲上を押し、二頭指相交へて索の如くせよ、呪に曰く 唵尾嚕博ハキヤ及二合那伽、地波多曳莎訶

○北方天 左の拳に作り、腕相交へ大指を申べ、上に向へ來去せよ、呪に曰く 唵吠除羅二合摩那野莎訶

金剛智三藏曰く 金剛壽命薩埵智身と言ふは、五智聚集して大樂金剛薩埵となる、四波羅蜜十六大菩薩を以て而も二十臂となす、五分法身を以て而も寶冠となす、内の四供養を而も禪悅となす、外の四供養を而も法喜となす、四攝方便三世諸佛を而も毛孔

となす、額より已上は過去の千佛、心ムネより已上は現在の千佛、心より已下は未來の千佛、此を以て三世常住金剛壽命薩埵智身と號す云云 口決に云く、此の尊通身黄金色にして智の寶冠を着して二十臂を具足して而も十六尊並に四攝三摩耶の標幟を執持せり右方愛喜寶光輪映鈎索、左方法利因語業護牙拳鑠鈴。殊妙の輕衣を被て鬘羅綬帶、千葉の寶花に坐す、花の下に四大白象あり、其の象各の外方に向て立てり、象の頂上に四大天王あり、外方に向て立ち誓て世界を護る。

○東方持國天王、其の形忿怒して齒を露しカハ、首の髪上カミに聳て猶し夜刃の如し、髮際に金環あり、身色綠青にして金剛甲冑を着す、左手の五指端徹しく曲れり、恰も物を持つる如し、右手に刀を執り胸臆の前に横へて及下にし首左さまにせり、物を切る勢の如くす。

○南方增長天の形前の如し、但し身色赤火、齒を露し現せず、二手外縛して二大指並べ立て、心前に當てよ。

○西方惡目天王、其の形前の如し、但し身色白にして二手の腕相交へ、右、左を押して刀索或は之を持せず。を持せり

○北方多聞天、身色黄金にして頭冠の上に赤鳥あり、形ち金翅鳥の如し、天身に甲冑を着て刀を帯べり、左手に寶塔を持し右手に三股戟を執れり。四象は生老病死の四苦を表す、此の法を作さんと欲はば、月の一日・八日・十五日に道場を建立して四十九燈を焼し、花香菓藥各の十六器を置き壇上に散し、此の尊を供養し、三七の淨行の比丘を請して此の經を轉讀し、各の四十九遍、此の眞言を念誦すること十萬遍を滿せば、即ち壽命增長を獲。

又た延壽建壇の法を説いて云く、一室を淨治して深さ一肘を掘て穢惡不淨の物を除去し、淨土を之に換へ壇にせよ、一方壇を作れ量廣三肘にせよ、瞿摩夷を塗飾して淨鏡の面の如くし、壇の中心に於て白粉を用ひ、一肘半の金剛甲冑を作り、中央を穿ちて一肘の火爐を作る、或は深さ半肘、若し其を穿つこと能はずんば、一火爐を取て壇心に安くも亦た得、然る後に諸の幡蓋を懸けて金剛三世尊の像を安置して之を供養せよ、乳木長け十指、骨婁草一千八莖乃至一百八を取て蘇に搗して、壽命眞言を誦し火に擲ちて之を焼け、焼かんと欲する時當さに觀すべし、火焰中に八葉の蓮花あり、花臺の上に卍字あり、光明暉曜遍照して大金剛壽命菩薩と成る、次にでまき、菩薩を擲引

して壇中に降し入れよ、餘の要法は軌等の文の如し云云

又た云く、爾の時、四天王等、佛の加持に乗じ普賢延命を助け各の誓を立て、言く、娑訶世界南瞻部洲に但だ此の經法流行の處あり、我等四王即ち爲めに結護し天衢をなからしめん。如し此の經法有て清淨の道場に如し降赴せずんば、願くは我れ此の威光を失ひ、我が果報を損し菩提心を退失して解脱を得ずと文り。

大壇の上に白蓋を張り、蓋の四角に幡各の二流を懸く合して八流黄色

○護摩壇の様、黄土を以て方形に塗作し、其の上に甲冑の形を畫け。

○所用物等。乳木 長け十指 穀木 桑木 骨婁草烏爪の根 莖なり 粳米の粉を蘇蜜に

和して之を丸にして大豆の如くす、又た直米を黄色に染む。藥種 黃精根 地

黃 枸杞 訶梨勒香 爵金 蘇合 青木 白檀

○○愛染王

(一)須彌山の頂に梵字あり、變じて七寶の宮殿と成る、宮殿の中に壇場あり、其の上に卍字あり、變じて八葉の蓮花と成る、花臺上に梵字あり、淨月輪と成る、月輪の中に

(二)須彌山 已下  
道場觀

オ字あり、容堵婆と成る、容堵婆變じて大日如來と成る、大日如來の心月輪中に種子あり、變じて三摩耶形と成る、三摩耶形變じて金剛愛染王となる、身色日暉ヒキの如し、熾盛輪日輪に住せり、三目威怒して視る、首髻師子冠、利毛にして忿怒形なり、頂に五貼鈎を安ず、五色の花鬘を垂れ天帶耳を覆へり、左手には鈴を持し右手には五峰杵を執る、儀形は薩埵の如し、衆生界に安立す。次の左手には金剛弓、右手には金剛箭を執る、衆星光を射るが如し、能く大染法を成す、左の下手に彼を持し、右の蓮は打つ勢の如くするに、一切惡心の衆速滅すること疑ひあることなし、諸の花鬘索を以て絞結し以て身を嚴る、結跏趺坐に作り赤色の蓮に住せり、蓮の下に寶瓶あり、兩畔諸寶を吐けり、乃至三十七尊並に無量の眷屬圍繞し恭敬せり云々。

種子・三摩耶形・並に多種密印・眞言・等口傳にあり、仍て之を注せず。

品第二

爾の時に世尊、復た馬陰藏三摩地に入りたまふ、時に金剛界如來、金剛手等に告げて言はく、金剛手、眞言あり、一切如來金剛最勝王義利堅固染愛王心眞言と名く、一切瑜伽の中に最尊最勝にして速かに悉地を獲、能く一切の見る者をして皆な父母妻

子の想を生ぜしめ、所作の業みな成就することを得、所持の諸餘の眞言、若しは佛頂部及び諸の如來部、蓮花部、金剛部、羯磨部等、みな能く治罰して彼等の眞言を速かに成就せしむ、若し眞言の行人持して三十萬遍を経れば、一切の眞言主及び金剛界の大漫拏擲王みな悉く集會し、一時に成就を與へて速かに大金剛の位乃至普賢菩薩の位を得む。爾の時に世尊即ち明を説いて曰く

唵摩贊囉識囉マカラキヤ曰路瑟拏灑縛ロシユニシヤガ囉薩埵ラサト弱吽鍍殺。

爾の時に世尊復た大頌を説いて曰く  
 二手金剛拳にして 内に相及へて縛を爲し 直く忍願を堅て、針にし 相交へて即ち染と成せ  
 是を根本の印と名く 若し此の眞言を持し 及び密印の力を以て 心・額・喉・頂を印すれば  
 金剛頂の身の如し 一切の諸の罪垢 纔かに結するに即ち當さに滅すべし 若し寂災と増盛と  
 愛敬と降伏とは 其の所愛の者に隨て 纔かに此の眞言を誦せば 彼れ即ち當

さし獲得すべし

若しは毒若しは相憎んに 纒かに結し誦せば當さに息むべし 食を加持すること七遍せば 我當さに甘露を降すべし。

愛染王品に云く 爾の時に遍照薄伽梵、金剛手に告げて言はく、我れ已に一切如來の所に於て曾し修學せしことを説けり、汝今諸の末法世の中の善男子・善女人等の爲めに、廣説し利樂せよ、時に金剛手、偈を以て頌して曰く

白月の鬼宿に於て 淨白の素練を取て 愛染金剛を畫け 身の色日暉の如し  
熾盛の輪に住し 三目にして威怒に視る 首髻に師子冠あり 利毛にして忿怒の形なり

又た五鈷の鈎を安して 師子の頂に在く 五色の花鬘垂れ 天帶をもて身に覆へり

左の手は金鈴を持し 右に五峰の杵を執り 儀形薩埵の如くにして 衆生界を安立す

次の左は金剛弓 右は金剛の箭を執り 衆星の光を射るが如くにして 能く大

染の法を成す

左の下の手には彼を持しめよ 右の蓮は打つ勢の如くす 一切の惡心の衆 速かに滅すること疑ひあることなし

諸の花鬘の索を以て 絞結して以て身を嚴り 結跏趺坐を作して 赤色の蓮に住めよ

蓮の下に寶瓶あり 兩の眸より諸寶を吐けり 像を造て西に安せよ 行人は西に面ひて對せよ

大羯磨印を結び 及び根本の明を誦し 兼ねて三昧耶 一字心の密語を示して

能く成じ能く 一切の惡心の衆を斷滅す 又た金剛界の 三十七の羯磨を結び 及び本業明を以てせば 速かに百千の事を成す 薩嚩訶瑟吒 及び諸の繫羅

訶

速滅して時方なし 刹那に復た生せじ 又た彼の那磨取て 師子の口に置け 忿怒を加へて降伏すること 一夜にして當さに終竟るべし 大根本の明を誦し



（二）除 或は降に作る。

三昧耶の印を結へ  
 又た伽跢耶ギヤクヤせしめんには 紅蓮花クワの藥を取て 一百八護摩せよ 一宿にして即ち敬愛せむ  
 又た彼を攝伏せしめんには 白檀香を取て 金剛愛染王キムギを尅キめ 五指を量等とせよ  
 長く身に帶して藏かくせば 一切の有情類 及び諸の刹利王 攝伏せんこと僕奴の如し  
 常に羯磨印を結び 大根本明を誦すれば 一切の福を増益して 堅固なること金剛の如し  
 若し七曜 命業胎等の宿を凌逼せば 彼の形の那摩とを畫き 師子の口に置き  
 て 一千八を念誦せよ 速滅して復た生ぜじ 乃至釋梵尊 水・火・風・焰・魔 頂行の惡類 疾く無邊の方に走らん 一切の惡種の惹び 淨行して苾芻衆 難調の毒惡の龍 那羅延自在 護世四天王 速かに（二）除いて命を失はしめん。

復た愛染王 一字心の明を説いて曰く  
 吽吒ムダ枳キム吽惹ビヤク  
 復た根本の印を説かむ 二手金剛縛にして 忍願を堅て相ひ合せよ 二風鈞形の如くにせよ  
 檀惠と禪智とは 堅て合せて五峰の如し 是を羯磨印と名け 亦是三昧耶と名く  
 若し纒かに一遍を結び 及び本眞言を誦すれば 能く無量の罪を滅し 能く無量の福を生ぜむ  
 扇底迦等の法 四事ながら速かに圓滿して 三世三界の中に 一切能く越こものなけん  
 此を金剛王と名く 頂の中の最勝を 金剛薩埵の定と名く 一切諸佛の母なり  
 復た扇底迦 五種相應の印を説かむ 戒方を掌に入れて交へ 禪智を相鈞し結び  
 檀惠を合せて針の如くし 忍願を堅て、相捻し 進力を各の偃うつけ堅てよ 是を

寂災印と名く

進力忍願を捻して 四指の頭並べて齊しくせよ

是れ布瑟置迦の

母捺羅の大

印なり

進力を蓮葉の如くする 印をば伽跢耶と名く

進力忍願の

上節を捻し覺めて

三角にす

阿毘左嚩迦には 當さに此の密契を用ふべし

進力を屈し鈎の如くし 誦する

に隨て而も招召するは

金剛央俱施なり

一切の時に作業せよ

大染金剛頂の

五の密印説き竟んぬ。

大勝金剛心瑜伽成就品第七

爾の時に金剛手、復た金剛薩埵を成就する一字心の大勝心相應を説く、此の眞言を説

いて曰く (一) 吽悉底

(一) 吽云云 原本  
梵字あるも今は省  
略す。

復た次に眞言行者、若し常に誦持せば、一切の天人の愛敬と降伏とを得べし、能く一切の人の見む者をして歡喜せしめ、能く一切の諸願を成就して悉くみな圓滿し、速かに金剛薩埵の身を成就する悉地を得て、現生の世に一切法平等金剛心を獲得す、時に

會の中の諸地の菩薩、各各神力を以て福德威光を以てして、金剛手を歎じて而も偈を説いて言はく

一切の諸菩薩 見聞すること能はざる所なり 今此の法教を演べたり 善く我が心密を解らしむ

諸法は自性なし 願もなく染淨もなく 金剛の一を乗となして 諸法を壊せざる教なり。

時に會中忽ちにして一障者あり、空よりも生ぜず、亦た他方よりも來らず、亦た地よりも出生せず、忽然として現せり、諸の菩薩各の醉へる如くにして、所從來の處を知らず。

時に薄伽梵、面門微笑して、金剛手及び諸の菩薩等に告げて言はく、此の障は何より來らむ、一切衆生の本有の障、無始無覺の中より來れり、本有の俱生の障なり、自我所生の障、始めなく初際もなく、本有俱本の輪なり。時に障者忽然として身を現じて金剛薩埵の形と作んぬ、頂上に於て一の金剛輪を現じ、足の下に一金剛輪を現じ、兩手の中に各の一の金剛輪を現す。又た心上に於て一の金剛輪を現す、遍身に光を放

ちて會中の諸の大菩薩を照觸す。時に金剛手佛に白して言さく、遍照薄伽梵、我れ今此の自性障の金剛頂法を説かんと欲ふ、惟だ願くは我が解説を許したまへ。時に金剛手、佛の聖旨を承け而も偈を説いて言く

若し諸の眞言の師 眞言の法を持誦するとき 一の散亂の心に於て 此の障即ち便りと爲て

能く眞言師 所修の功德の業を奪ふ 若し愛染王の 根本一字心を持すれば 此の障速かに除滅して 少も親近することを得ざれ 常に自心の中に於て 一の吽字を觀し聲 出入して命息に隨ひ 身と心とを見ざれ 但し字の因起を觀じ 大空に等同にして

金剛の性に堅住せば 全く金剛の體と成り 速かに自の身分を轉じて 便ち金剛の身に同なり

秋八月の霧に 微細なる清淨の光あるが如し 常に此の等持に住する 是を微細定と名く

自性所生の障 此の方便を得ることなく 決定して金剛に同じ 三界に能く越ものなけむ。

時に自性障、此の語を聞き已て忽然として現ぜず。

〇〇金剛王

壇中に白蓮妙色の金剛莖を觀ぜよ、八莖にして鬘藥を具し衆寶をもて自ら莊嚴す、常に無量光を出して百千の衆蓮繞れり。其の上は大覺師子座あり、座上に梵字あり、満月輪となる、月輪の中に衆字あり、變じて八莖の蓮花と成る、花臺上にぞ字あり、變じて三昧耶形となる二肢折羅相並べ上下一帖互に相交へよ 變じて金剛王菩薩と成る、身相白色にして五佛冠を戴き四臂を具足し相好圓滿せり、上の二手箭を端の勢の如くし、下の右手心に仰け金剛杵を持し、左手は金剛拳に爲り、左の腰側に安して金剛鈴を持し、緋裙の天衣を着し半跏して月輪に處す、及び金剛部の諸尊前後に圍繞せり。

○根本印二手を以て金剛拳にし、權・惠・進・力・相鈎せよ 眞言に曰く 吒枳吽惹カキムヂヤ

(二)壇中 已下道 場觀

儀軌の圖



眞實經文句之を圖す。



金剛薩埵軌次第

(朱義次第を述ぶ)



○ 普賢菩薩 金剛慢の印に住す、

理趣に曰く妙適。 十七尊義に述して云

く 眞實金剛。 普賢金剛薩埵の軌に云く

普賢菩薩。 五秘密軌に云く、 金剛薩埵と

は是れ普賢菩薩、 即ち一切如來の長子、

是れ一切如來の菩提心、 是れ一切如來の

祖師、 是の故に一切如來金剛薩埵を禮敬

したまふ。

○ 此の法は能く諸佛の道を成ず、 此を離

れて更に別に佛あることなしと文り。

十七尊義に述して云く、 大安樂不空眞實

す是れ適悦の義、 腰の左に置くは大我を表す、 右に五鈷金剛を持するは是れ五智の義

なりと文り。